

そう SO する? SURU?

秋田 市 文化 創造 館
AKITA CITY CULTURAL CREATION CENTER



10

号

2026年8月

特 別
ペー ジ
増 量 号

ラ
ー
ニ
ン
グ
プ
ロ
グ
ラ
ム
を
読
み
も
の
に
し
ま
し
た

書き下ろし
もお楽しみ
ください



受付日記④

黒木美佑

だいぶ早いうちに目が覚めた。

風呂場で足を濡らしながら顔を洗う。初夏だけど、朝のうちはまだ熱いお湯を使っている。

おひつの底を、お匙でコツコツつくようなせつなさが、朝はふつとするものだけれど、クリームで目のまわりを拭いて眉毛を抜くと、実務的なきもちになって、だんだん誰かのまえに立ち現れるわたしになる。夕飯の残りを食べて出勤する。

薄曇りの空から雨がはそく降っている。

歩道の縁の細かな砂塵から、ハマヒルガオがぼつぼつ咲いている。じょうこの形の花が、丸く空を仰いだり、すばまっていたり、それぞれが身ひとつで雨を授かるような形をしていて、その形を、わたしはじっと見ている。

日々、受付にはいろんな人が来る。

毎度わたしはすこし緊張する。施設の利用申請にいらっしやる方はもちろん、「夕方東京に帰るけれど、それまでどのようにに過

ごそうか」といったようなご相談もある。

「城跡のでっぺんまで登って、線路の向こう側の家々に目を凝らしていると、この町と昔なじみの心地になります」

町のなかの受付としての正解は分からない。でも、できることなら、血の通った言葉でありたいと思う。だから、八年前のわたしが秋田の町に引越してきて、暮らしのいちばん最初にやってみたことを話してみる。

血の通った言葉は難しい。切ると、本当に血がにじむように思う。でも、生ものでない言葉は、どこまでがわたしの言葉なのだろう。

印刷機用の紙が少なくなったので、コピー用紙の束を出してきて、半分に分けた紙束を両手で波打たせてからフーツと空気を吹くとき、雪の降らない町で過ごした子ども時代が、不意に記憶の底から浮かび上がってきた。小学校の先生はわら半紙を掲げて、「雪はこれぐらい真つ白や」と言ったが、でも、わら半紙よりも、雪はもつと白いとわたしは思う。

お昼の休みにお堀端のベンチに腰かける。

水面を見てみると、「あの時、思う通りになればよかった」という気持ちが浮かぶ。心のうちでちよつと祈る。どうしようかと祈る。そのあと、家から持ってきたおにぎりを両てのひらで握り直して、ご飯の真ん中にうずめた昆布をまじめな気持ちで噛んでいる。

嘆く気持ちではないけれど、ままならなさが、お昼休みになると、こころの上澄みに浮いてくる。凝視すると身体が小さくしぼんでしまうので、うれしいことを数えてみる。一番に、わたしは日の光がうれしい。お堀の縁にヨシが生えていて、それらが、風が通るといつべんにうねるのを見てみると、自分の生命というもののは色もなく、重さもなく、目にも見えないが、日傘や、ヨシや、雲の造形になって、わたしの前に立ち現れているのだと思う。

明るい気持ちでいるときは、そんなことを失念している。気持ちやすこし内側へ縮こまる時、ようやく自分の身体の重さを感じ出すような気持ちになって、よろこびを数えるごとに安寧な気持ちがあふつと降ってくるものなので、気持ちの陰りが、たまには幸福の糸口になることもあるのだと思う。

仕事に戻り、寸法を測るものがあつたので、物差しを持って3階の倉庫へ行く。

今日は2階の大きなスタジオでダンスパーティーが行われていて、階段を上るとたくさんの人たちが出番を待っている。倉庫に行く階段の途中で、惹きつけられるように踊りを眺める。

踊りというものを初めて見た。綺麗やなあ、という感嘆が胸に湧いて、物差しを後ろに持ったまま見る。踊りのまなざしは真剣で、相手の腕の内でぐつと背筋をそらして真つ直ぐ歩いてゆく身体や、その周りで、椅子に腰かけて前のめりに歓声を送る人たちの鮮やかな目のひかり。

人それぞれに身体というものがあつて、自分の身体というのは、痛んでも、あきれても、見限ることできない身体だけれども、まなざしを向けることも、息をすることも、すべてが生きていることならば、今、後ろ手に物差しを持って立っているこの身体も、ひとつの踊りなのかと目の覚める気持ちで思う。

スタジオの外に出て、うすばんやり発光するような心地で外階段を降り、表で作業をしている人のそばを通るとき、青い芝生の上いつぱいに並べられた角材があまりに鮮やかで、めまいのするような気持ちで総合案内に戻る。

ものごとは、ある日突然、弾かれたように出会ってしまうものなのかもしれない。あるいは、こころの中にちり積もっていたものが、不意に点火してしまうことだつてあるのだと思う。

自分の椅子に座つたが、そわそわと我慢できなくて、「すべてが

踊りなのかもしれないと思いました」と同僚に話しかけてみる。

デスクに向き直してタイピングを始めるが、伸び縮みする両手指の指先全部がいのちの具体なのだと思うと、身辺が打ち震えるような気持ちになつて、泣きたいような気持ちのうねりに、わたしはしばらく当惑する。

帰る時は薄暮。帰り支度をして外へ出ると、鐘がなる。

向こう側の低いところに星がひとつだけ明るくて、気候が良いので歩いて帰る。くたびれて、美しく歩けない体もわたしの身体。一日の疲れに目がくぼんで、腰が痛んで、ぶらぶら、手足を長く振つていつもの道を帰る。疲労の底に柔らかいよろこびがあつて、歩くとき、目に見えない湖水がわたしの身辺に満ち満ちているような、そんな気持ちがポツと湧く。

橋まで来ると川が暗い。水が山の方向へ流れてゆくように見えて、つきものが落ちたような気持ちで眺める。

それからまた歩き出すけれど、今日はくたびれて夕飯が思い浮かばないので、なにか食べて帰っちゃおうかなと思う。

コンビニで八十五円の切手を買つて、遠くに住む家族へハガキを出すために、通勤路を外れて郵便ポストに寄る。

受付日記④ 黒木美佑 1

環日本海という視座 伊藤俊治、石川直樹 6

言葉にしづらい思い出を残すには 笠井康平（作家の手帖） 20

遠く、さみしさを訪ねて 後藤那月 23

風土と身体——土方巽と石井漠、二人の舞踏家を中心に 山川冬樹 26

異種と共に生きる想像力——秋田・北東北の事例から 石倉敏明 35

「太平山系失われた石像」をたどる旅 佐藤成樹、佐々木民秀、畠山秀雄 53

下浜桂根のやまはげ、上新城のなまはげをめぐって 70

藤原浩一、川村均、高橋浩樹、佐田稔、齊藤壽胤、渡辺知 70

やまはげ、なまはげはどこから来るのか？ 齊藤壽胤 79

秋田市文化創造館の成り立ちと記録 90

——藤田嗣治と勝平得之のこと 熊谷新子 90

語りの世界へ 工藤千咲 98

花の庭を歩きながら 話し手…大友俊和（ガーデンおとも） 100

小町さん またこんにちは 最果タヒ 106

執筆者プロフィール 111

秋田市文化創造館の「ラーニング」より

新しい知識や視点に出会い、学び合い、
自発的な活動につながることを。

地域に根ざした歴史や文化を掘り起こし、
創造力を育むこと。

今号は、当館のラーニングプログラムで
お話しいただいた内容を中心に、
再構成し、掲載します。



4月12日、当館1階のコミュニティスペースにて、三浦魁斗さん（5歳）と、雪寧さん（3歳）

秋田市文化創造館

AKITA CITY CULTURAL CREATION CENTER

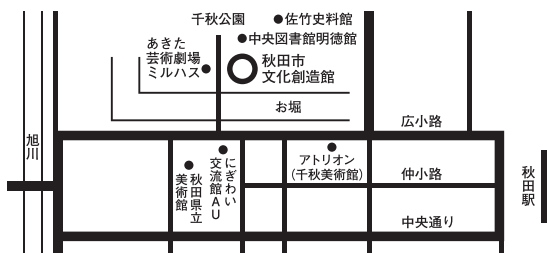
〒010-0875 秋田県秋田市千秋明徳町3-16

開館時間 9:00-21:00

休館日 火曜日（火曜が休日の場合はその翌日）、12月29日-1月3日

お問合せ Tel: 018-893-5656 Fax: 018-893-5659 e-mail: info@akitacc.jp

公式ウェブサイト <https://akitacc.jp>



- アクセス：JR秋田駅西口から徒歩約10分
- 専用駐車場はありませんので近隣の有料駐車場をご利用ください
- 車イスご利用の方などで駐車が必要な場合はお申し出ください

環日本海という視座

伊藤俊治×石川直樹

京都芸術大学大学院写真・映像領域（伊藤俊治教授）による授業「秋田京都惑星特急便（学びのためのディープタイム（深い時間）」が、秋田市文化創造館で市民にも無料で公開された、その内容を再構成し掲載する。

伊藤俊治氏のお話

僕は、秋田の土崎という、港町の出身です。生まれた家のすぐそばに多田等観という世界で一番チベットに詳しい学者の家がありました。岩波書店から『チベット』という本が出ています。ちょうど十日くらい前に、石川直樹さんから、今ラサにいます、これから帰りますと連絡がありました。多田等観は土崎生まれで、いきなりチベットのラサに行った人です。

京都の西本願寺の第二世宗主・大谷光瑞は、大谷探検隊を組織してインドやチベッ

トを探検し、一九〇三年に、釈迦が説法をしたといわれている霊鷲山を発見しました。その後彼は、日本が支配した場所、インドネシア、台湾、満州を回って、プランテーションを経営し、台湾の高雄に逍遙園を造りました。

この大谷光瑞という人に多田等観は目かけられて、ラサに行きます。そこでダライ・ラマ一三世に気に入られて、ダライ・ラマ一三世の下で十年間ラマ教を学んで、多くの門外不出のチベット文献と共に日本へ帰ってきました。東大や東北大学で教鞭を執っていました。東大や東北大学で教鞭を執っていました。僕も冒険家に憧れていた一時期があるのですが、石川さんのように体力がないので断念しました。

秋田が入り口となる環日本海文明
新刊の『秋田 環日本海文明への扉』で展

あつたとされています。

縄文時代の一万五〇〇〇年前を起点にするのではなくて、三万年前の日本列島を起点にしたいというのが一つの狙いです。その頃の日本列島の地形は今とは大きく異なっていて、例えば本州は、四国や九州と陸続きになって、古本州島という島を形成していました。北海道は、ユーラシア大陸と樺太と陸続きでした。北海道は古北海道半島だったんです。二万年前の日本は最寒冷期になりますから、その頃の海面は今よりもだいたい三〇メートルくらい低い。北海道と本州をへだてる津軽海峡は浅いところでも深度が一四〇メートルあるため、本州島と北海道はへだてられたままです。

対馬海流は、閉じたり開いたりしていたために、日本海は巨大な湖のようだったと考えられていると思います。一万五〇〇〇年前から、ペーリング・アレレード期と呼ばれる、急激な温暖化時代を迎えます。縄文時代の開始と温暖化というのは結び付いていて、縄文海進といって再び一気に一三〇メートル上昇し、北海道と樺太は大陸から離れた島になります。対馬海峡は大きく開き、黒潮から分岐した対馬海流という暖流が日本海に大量に流れ

込んできて、生態系を広く移動させていきました。

黒潮は世界最大級の海流ですから、海流があまりにも大量だったために、あふれ出た暖流は津軽海峡を乗り越えて、太平洋に流れ出て、一部は本州の北部の東岸沖を南下したり、北海道の渡島半島の南東部を北上したりするようになります。これが東北、北海道の縄文文化の基盤です。海流と人の移動の変化が、文化を生成させていきます。

海面の上昇とともに潮流が活発化して、いろんな海洋生物が日本海側にもどんどん生息するようになりました。狩猟採集漁労を中心とする縄文文化というのは、そういう生物の多様性に支えられています。暖流は沈み込まず、海面の表層を主に流れます。そのため、生じた水蒸気はシベリアからの寒波で冷却されて日本海沿岸に大量の雪や雨を降らせるわけです。

北海道南部の、例えば、鷲ノ木遺跡の外径が三七メートルもある環状列石とか、有名な青森の三内丸山遺跡とか、日本海に面したといえる亀ヶ岡遺跡の遮光土器群とか、太平山元遺跡の、北東アジア最古の一万五〇〇〇年

開いたのは、秋田を入り口にする、環日本海文明とも呼べるような、日本海を介した広大なネットワークのありようでした。秋田は決してどん詰まりではなくて、その背後に広がる深い文化への入り口であるということ。石川直樹さんの写真と、私の文章で示せないかと考えました。秋田という土地の表面には現れにくい古層や残層があり、それに目を向けてもらいたい。その層の重なり方に注意を払って記述したつもりです。

石川さんの写真にも古層や残層へのまなざしが湛えられています。古層とか残層には、日本を取り巻く海流や地形が大きく関わっていると考えています。

日本の縄文時代は一万五〇〇〇年前から二五〇〇年くらいまで続いたといわれています。日本列島にそれ以前は人がいなかったのではなくて、現生人類が日本へ渡ってきたのはおよそ三万年前くらい、そのルートは三つ

前の土器とか。それと世界最古の漆のかけらが見つかった垣ノ原遺跡が、一体の文化圏としてあることを、それらが実証しています。

現生人類が日本列島に渡来したルートとして定説化している三つのルートの他に、この本では、ほぼ内海に近かった日本海を船で渡って、秋田とか石川とか鳥取とか、出雲にたどり着いた第四の日本海ルートがあったと想定して書き始めています。

日本列島周辺には、北上する黒潮と、カムチャツカ半島から対馬列島にそって南下する親潮が流れています。黒潮はフィリピンや台湾を通して九州の南端で分岐して対馬海流になり、日本海側を北上して、津軽海峡や宗谷海峡を通過して、オホーツク海とか太平洋側へ抜け出ます。緑色の寒流で五度以下の冷たい親潮と、青色をした暖流の二五度くらいにまで温度が上がる黒潮が交わる。そのまじり合いが日本の基本的な文化を形成していて、そこには石川直樹さんの写真とか、さつき石倉さんが話してくれた文化の古層に通じていく、大きな海流と地形の問題が横たわっています。

今回の秋田の本では、特にこの日本海ル



『秋田 環日本海文明への扉』
亜紀書房 2024年

トと北海道からのルートに注目して記述を始めました。縄文時代よりはるか古い、二万六〇〇〇年前からこのルートをとどってやって来た人たちは、大体、シベリアのアムール川下流域の先住民と共通する遺伝子型を持っています。当時、北海道は、先ほどもいったように、シベリアとか樺太とかほぼ陸続きでしたから、北海道の細石刃石器や剥片石器はシベリアのものとよく似ていることも、このルートの根拠として挙げられます。

南の沖縄からのルートに関して言えば二〇一九年に東京国立科学博物館が「三万年前の航海徹底再現プロジェクト」を実施しました。台湾東部の長濱郷の烏石鼻から、琉球列島の西端の与那国島まで「スギメ（杉の女神）」という名の丸木舟で黒潮を横切り、二〇〇キロの海を渡る試みを達成しています。三万年前の技術と材料で、渡海が可能だとすると、さらに穏やかな日本海を渡ることは、縄文時代より以前に可能だったことが想定されます。こういうさまざまな時代と経路を経て日本列島に現生人類が渡ってきました。

秋田にも、日本海や北海道を経由して、さまざまな時代に、古層を形成する人類がやってきたことが明らかになる。そういう知見も

射程に入れながら、今回の本を書いています。

港町土崎

はじめに触れたように私が生まれたのは土崎という港町です。雄物川の河口に古くからある集落で、『日本書紀』や『続日本紀』に登場する秋田はこの土崎のことで、この土崎がみちのく開発の中心になっていきました。

土崎は、浜からなだらかに清水水の丘が広がっていて、越の国からやって来た阿倍比羅夫が、大船団の水軍を率いて、土崎沖に泊まり、蝦夷征伐の拠点にしました。私が住んでいたのは將軍野という、陣幕を洗ったとされている場所です、すぐそばに幕洗川という川もありました。もう埋め立てられてしまいましたが、子どもの頃の遊び場でした。今も、ちよつと歩くと、城跡があちこちに残ります。かつて秋田といえば、土崎のことでした。どうも郷土愛が出てしまつて、港っ子魂で最良をしてみますが、そう感じて少年時代を生きてきました。近年、秋田城跡の広い発掘調査が行われて出土した漆文書とかは日本最古のものですし、奈良時代の文物が多数発見されています。そのすぐそばに古四王神社があつて、日本最大の旅人である菅江真澄の墓も、伽羅橋を過ぎて少し上がった所にあります。伽羅橋は藤田嗣治の「秋田の行事」に

も描かれています。

伽羅橋伝説とか朝日長者や夕日長者とか、いろんな伝説がこの一帯には残っています。

秋田出身の作家で伊藤永之介という人がいて、映画にもなった『警察日記』で知られている作家ですが「山うるわしく人貧し」という文学碑そこに建っています。その文学碑は朝日の出てくる、太平山の山並みのほうを向いている。そしてこの地から見る夕日は、伝説の夕日長者が示すように、日本で一番美しいのではないかといわれています。

野口達二という土崎出身の作家がいます。新作歌舞伎を書いている劇作家です。彼が、ふるさとで一番、印象に残っているのは何ですかと問われて、日本海に沈む夕日だと即答している。夕映えが、ハマナスの花の色を染め上げて、海を全部真っ赤にして、沈んでいく。

昨日飛行機で秋田に来るときに、鳥海山の山越しに見た日本海に、夕日が沈んでいく風景を見て絶句しました。それくらい、日本海に沈む夕日というのは、山越しの阿弥陀図じゃないですけど、神々しいものがあつ

て、見る者を感動させます。

第二次世界大戦の日本最後の空襲地になったのが、土崎空襲と呼ばれている大空襲でした。ターゲットは、当時、日本最大の産油量を誇った日本石油の秋田製油所だった。米軍はそこを狙って、一九四五年の八月一日に大空爆を仕掛けます。B 29が一五〇機くらい来て、五時間にわたって爆撃が続きまし

て、野口達二の生家はこの大空襲で焼け落ちて、野口は終戦の日におじいちゃんと二人だけで夕日を眺めたと書いていますね。その光景は紫色の煙が立ち上って、まさに西方浄土を思わせる風景だったと。

ブルーノ・タウト

これは八世紀から九世紀にかけての日本地図です。これまでは、朝鮮半島から、対馬、九州經由で渡ってきて近畿地方におちついた大和政権が表舞台の歴史でしたが、そうじゃなくて、渤海からダイレクトに日本海側にやって来る船というのがたくさんありました。僕が秋田の文化芸術を見直すきっかけになった、ドイツ人で、カントと同郷のブルーノ・タウトという人がいます。現在、ロシアの飛び地になつていますが、ブルーノ・タウトはカリーニングラード、以前はケーニヒスベルグと呼ばれていた街に生まれました。北の港町生まれのプロイセン人で、生涯旅人

だったブルーノ・タウトは、ロシアで都市計画をやっていたこともあつて、ヒトラーに目を付けられて、一九三三年に日本に亡命します。ベルリンからパリ、マルセイユ、オデッサ、さらにシベリア鉄道を介してウラジオストクから日本の敦賀へたどり着きました。日本に三年ちよつと滞在しています。仙台とか高崎で工芸の指導を行つて、『日本文化私観』とか『桂離宮』とか著作を書いて、日本人が気付かなかつた日本の美と文化を示し、今では、日本美の再発見者というふうにいわれています。

日本の美というのは、タウトという外国人、まればとによつて再発見されて目覚めたというのが定説になつています。タウトは日本の民俗的な美意識と、その結晶である工芸とか建築といったものに、未来の芸術と社会に進むべき道筋を見いだしました。この時代にタウトがいなければ、多くの日本の美の形は失われていたのかもしれない。日本人だけが日本の美や文化を知ろうとしないとタウトは嘆いていて、日本人は当時、自分たちの美とか文化に盲目状態でした。

タウトの特異性は、一九一四年の「グラスハウス（ガラスの家）」と、一九一九年の



日本海 写真：伊藤俊治

「アルプス建築」に示されています。色ガラスドームの中に流れる水のシステムを持つガラスハウスは、一九一四年にドイツ工作連盟展で、実際に造られたものです。これはタウトが作ったおもちゃの模型ですけれど、ガラスを色と光の結晶として捉えたものです。ガラスハウスはガラスを透過して水面に反射する光の洪水を受け止める場として、建築がある。ガラスは、雪の結晶でもあります。

一九一九年のアルプス建築というのは、アルプスの山の上に、ガラスの建築を造ろうというような壮大な計画でした。さらにタウトは星の建築とかを造ろうとした。タウトの内部の中で展開された幻想世界で、スケッチがたくさん残っています。

アルプス山中の地表から生命体のようにして生成してくる建築が描かれています。共同体のシンボルとして山頂に築かれたクリスタルガラスの神殿から光が発光され、さらに星の光が発せられて、圧倒的な冬の雪山の光景がそこに展開されています。実現されはしませんでしたけど、このタウトのイメージというのは、彼が秋田で見た雪山の景色ともダブっていきます。タウトは自分の生まれたケーニヒスベルグという冬は氷結してしまいう港町と、アルプスの山々を舞台に見た建築

日常の経験の中に生きている豊かなものの働きをカントは見つけようとして、それを理解することで自分の可能性を押し広げて、世界を生きる人間としてどういうふうに自分を高めていけるのか。カントはこれを大学の講義でずっと論じ続けていました。死の間際まで、われわれの日々の生活を織りなしている営みについて書き、その営みの背後に人間が生きる意味を見いだそうとする。

『人間学講義』の中で引き付けられた言葉は、世界というのは、当の世界そのものを学ぶ学校であるという言葉でした。今回、この秋田漂流教室に、京都芸術大学大学院の学生たちを連れ出した最も大きい理由は、そのことを感じてはしなかったからです。人間はどういうふうにしてこの世界の中に自分の居場所を見いだして、その関係の中に入り込んで、世界と共振していけるのか。そのことの大切さを、カントは死の直前まで問い直し続けた。人を存続させるのは、偉大な思考とか高尚な芸術ではなくて、何よりも自分たちが生きている日常である。日々の営みこそが人間の文化を練り上げていく技である。

この技をカントは「クンスト」と呼びました。芸術とか美術のことですね。芸術とか美

と、冬の秋田の雪景色を重ね合わせます。

タウトは敦賀から日本海に沿って北上して見学する予定でした。この地方は、日本でも取り残された土地としてあまり知られていない。それだけにこれから書く、自分の著作にとつて非常に重要な資料を提供してくれるだろうとタウトは記しています。この日本海の旅には京都の建築家の上野伊三郎が常同行していました。秋田行きを勧めたのも上野伊三郎です。

秋田に入ったタウトは、上野と一緒に版画家の勝平得之を案内役にして、明日行く秋田県立博物館の分館である、旧奈良家住宅を訪れました。もともと、金足にある男潟北岸の、広大な水田地帯を仕切っていた奈良家九代目の喜兵衛が三年がかりの歳月をかけて造った豪農の家です。奈良家は奈良から秋田に移住してきた人々です。今から二八〇年前に造られ、現在は国の重要文化財になっています。太平山を背景にして、がっしりした家屋がちゃんと残っている。

タウトが奈良家の何に感心したかという点、太い柱が何本もある入り口の土間が一番優れていると書いています。さらに、上がり

術というのは日々を生き延びるための美しい技のことである。それを一人一人が何とか自分で編み出していかなくてはいけない。

その技は秋田にはまだ残っているように、秋田を足しげく訪れて僕は感じたんです。そのことはもううちよつと詳しく、十一月に石倉さんや赤木明登さんと太平山三吉神社で話をすると、工芸の問題のときに説明をしようと思っ

上野伊三郎と上野リチの再評価

ブルーノ・タウトに『日本美の再発見』という本があります。六章立てですけれど、その五章と六章の最終章は、冬の秋田と京都の桂離宮で締めくくられています。冬の秋田と京都がつながっているんですね。冬の秋田でタウトの案内をした上野伊三郎とその妻の上野リチも、特別な旅をしてきた人々です。これまで近代建築とかデザイン史では上野伊三郎や上野リチは、ほとんど触れられてこなかったのですが、最近では再評価されています。伊三郎は京都の宮大工の長男で、宮大工になろうとしていた人です。宮大工の修行を行うのですけれど、それで満足できずに、一九二二年から四年間ウィーンとベルリンへ留学する。

かまちの横一本の巨木のたたずまい。それらが織りなす地響きがしそうな緊張感に強い感銘を受けます。先ほどのアルプス建築じやないですけれど、大地から生えているような、建築の趣きに魅せられました。

タウトはこの奈良家がある金足近辺の風景に触れて、自分のふるさとのケーニヒスベルグを思い出します。ケーニヒスベルグには僕が特に強い関心を持つ人たちが生まれています。ハンナ・アーレントもそうですし、大好きなE・T・A・ホフマンとか、あとイマヌエル・カントとか、そういった人たちがこの町から現れている。

タウトの同郷イマヌエル・カント

カントというとおじけづいてしまいますが、カントが最晩年にまとめたのが、『人間学講義』という本でした。僕はあまりカントには関心がなかったのですが、なんで関心を持つようになったかというと、ウォルター・ベンヤミンに『ドイツの人々』という本があつて、あまり知られていない端正に書かれた本ですけど、その中にカントの書簡が引用されていました。『ドイツの人々』の中のカントの実際に書いた手紙を見て、僕は強い感銘を受けました。

僕が一番好きなデザインナーにヨーゼフ・ホフマンという、ウィーン工房を主催していた人がいます。上野はそのヨーゼフ・ホフマンの助手になつて、そこでフェリス・リチと出会って、結婚する。リチって、テキスタイルとかガラスとか陶器とか七宝だとか、いろんな工芸を作っていました。

彼らは、一緒に京都へ帰ってきます。一九二七年には日本の新しい建築デザイン運動を起すべく、先ほどうちよつと触れた日本インターナショナル建築会というのを立ち上げたん

ですね。そこがタウトを日本に招きました。ブルーノ・タウトの他に、ヨーゼフ・ホフマン、ペーター・ペーレンス、ウォルター・グロピウス、エーリッヒ・メンデルゾーンという錚々たる、当時の世界最高レベルのメンバーが外国会員としてその日本インターナショナル建築会にはそろっています。上野も、タウトも、ライカで秋田の写真をたくさん撮っていたことが記録されていますが、もうその写真がどこにあるのかちよつとよく分からない。

タウトは日本に三年余りいて、日本でもあまり自由な設計とかデザインでできなかったこ

ともあって、イスタンブールへ移動します。一〇年ぐらい前にイスタンブールに行ったときに、タウトが残した最後の八角形の建築物を見て、ちよつと驚きました。タウトが去った後、一九三六年から上野は三年間群馬県の工芸所長を務めて、奥さんのリチも嘱託で工芸品の製作指導に関わっていました。

その後で、夫妻で満州へ渡るんです。戦争直前の、幻の国満州の特別な位置がよく分かると思いますけどかつての渤海国の地です。リチはその満州で、工芸指導に当たって、太平洋戦争が終わった後、満州国は消滅しますけれど、彼らは帰国し、京都市立美術大学に奉職し、京都で後進の指導に当たりました。秋田、京都、ウイーン、満州を移動していく彼らの旅にも、世界を学び直すヒントが隠されている。

パトリック・ゲデスの「地域研究」

時間があれば本当はいろいろ話したかったんですけど、もう時間切れですね。地域研究、「リージョンサーベイ」という領域を初めて学問として成立させたのはスコットランドの都市計画家、生物学、植物学、教育学者であるパトリック・ゲデスです。

以前、石川さんと、瀬戸内海の周防大島や沖家室島から、陸路を伝って日本海の見島と青海島まで移動する「アーキペラゴ…海と山と島を渡る」というワークショッップをやったことがあります。もう二十年ぐらい前ですね。そのときは、民俗学者であり写真家でもある、菅江真澄全集の編集者でもあった宮本常一がたどったルートを移動しながら、瀬戸内海から日本海まで、山や川を越えながら、人が歩くことや場所の本質を考えようとした。

ちょうどパトリック・ゲデスの、世界的なシンポジウムが山口で行われていて、そのプログラムをワークショッップの中に組み込んだことを思い出します。ゲデスに関してはまた時間がかかるので今日は省略しますが、地域研究の重要性を初めて示した人物であり、自己学習ということのカントと同じように重視した人物です。

ゲデスは『生の図式』で次のように述べました。

「場所の研究は地理学、仕事の研究は経済学、人間の研究は人類学になつてゐる。しかしこうした研究はバラバラになつてしまひ、それぞれの領域は別々の枠内に入つてしま

い、交わることはない。その証拠にこうした研究は大学の学部や学科に閉じこめられ、講座や学会も別々のものになつてゐます。しかし、私たちは、これらのバラバラな研究を交差させて生きた統合体を生み出さなくてはならないのです。」

ゲデスは場所というものを、この世界を構成する諸々の要素の総体とみなしていました。場所は生きた総体の中にあります。世界は世界を学ぶための学校であるということをゲデスも同じような言い方で示している。秋田という場所にも大きな潜在的な可能性があり、それらを掘りおこしていかななくてはなりません。その手がかりに、この『秋田』という本を手にとつてもらえればと思います。ありがとうございます。



森子大物忌神社 (2024年8月7日)



秋田竿燈まつり (2024年8月6日)



大日堂舞楽「五大尊舞」（2024年1月2日）

伊藤俊治氏より

新しい本を出しました。『秋田 環日本海文明への扉』というタイトルです。編集を担当してくれた亜紀書房の西山大悟さんのお考えもあつて、最終的にこのタイトルにしました。石川直樹さんは、私が東京藝術大学で教えていたときの博士課程の最初の学生でした。石川さんの博士論文のタイトルが、「環太平洋における群島文化論 東南アジア島嶼部・ペーリング海周辺地域における神話と渡海の文化を視座として」というもので、非常に興味深い博士論文を書いていただきました。

トカラ列島や宮古島や奄美大島や徳之島、久高島や竹富島、金門島などさまざまな島の神話と文化について論考した博士

論文でした。そのことも少し頭の中にあつて、「環日本海文明への扉」というサブタイトルを付けました。

私は、写真のことをずっと書いてきた人間ですけれど、秋田の写真に関してはほとんど書いたことがなかったんです。石川さんの写真を見て、これはまじめに秋田や秋田の写真のことに取り組まなくてはいいなと思いました。

この本は、石川さんの写真を原点にして、「写真」（ふげん社）という季刊の雑誌に二〇枚ほどの文章を寄せたことがきっかけになっています。石川さんはそれ以前、それ以後にも、秋田にずっと通つて、秋田を撮影した写真がたくさんあります。さらに、樺太やシベリア、石川県や北海道な

ど、日本海に沿った地域の写真が、この本には多数収められています。

石川さんが、小正月行事とか祭礼とか、秋田の季節の折に触れ訪ねて撮影した写真というのは、今後、いろいろな形で、大切な写真になっていくと思います。

それでは石川さんのほうから、秋田を撮影してきて思つたこと、それから、世界中、ヒマラヤから北極・南極まで、石川さんは世界中を撮影し続けてきていますけれど、その文脈の中で、秋田で特に感じたことを中心にして、お話しいただければと思います。よろしくお願いします。

石川直樹氏のお話

伊藤先生がいま話してくださいのように、ぼくは大学院の伊藤先生のゼミでずっと学んでいました。修士課程から博士課程まで、先端芸術表現専攻の第一期生として学ばせてい

いただきました。

今回のこの本に関しては、「写真」という雑誌に写真を載せることになりまして、小説家とか作家の方で、写真と組み合わせる書いてもらいたい人はいますか、と編集部から連

絡が来ました。いろんな小説家の名前が頭に浮かびましたが、伊藤先生に秋田のことを書いていただくのが最も意義があるんじゃないかな、と思つて、打診した次第です。

伊藤先生は、大学院の授業で、本当にたく

さんのことを教えてくださいました。そのなかで、時々、故郷である秋田のこともお話しくださって。そのことをもつと伺ってみたいと思い、先生に文章を書いていただきました。それが基になって、この本ができることになりました。

本のカバーを取ると、大湯の環状列石の写真が使われています。自分と秋田の関わりというのは、二十年近く前からで、この環状列石を訪ねたのが最初だったと記憶しています。

当時、北海道の余市にあるフゴッペ洞窟の壁画や、北海道・東北の環状列石に関しても調べながら写真を撮っていました。そうした旅の中で、大湯環状列石に行ったのが、秋田とのつきあいの始まりだったと記憶しています。

島の連なりとして日本列島をとらえなおしたい

遺跡や関連施設を巡ると同時に、大学院で伊藤先生の授業を受けていました。自分が直感的にもつと知りたいと思うようなことや、その先にあるテーマについて、伊藤先生が授業で様々なヒントをくれたんですね。そんな中、島の連なりとして日本列島をとらえなおしたい、という思いが自分の

えてもらったんです。たくさんさんのアーティストの活動がいかに冒険的であるか、冒険の何が芸術的なのか。芸術という分野がいかに冒険や探検と近いものであるか、ということに、修士課程、博士課程の授業を受ける中で気づかされていくわけです。

山川冬樹さんが、多摩美術大学の授業で伊藤先生に教えていただいて、土方巽に初めて出会ったということですけど、自分も、美術から人類学・考古学・民俗学に至るまで、その後の自分の研究対象になる種のようなものを伊藤先生から授けてもらったといっていると思います。冒険や探検というものが、表面的な意味ではなく、人間の心の動きや精神の運動に至るまで包括しうるのだ、ということとを色々な例と共に教えてもらったわけですね。世界中の先史時代の壁画をフィールドワークし、風土建築に関心を持ったのも、伊藤先生の授業がきっかけです。

だからぼくの中では、唯一無二の恩師で、自分の視野を大きく押し広げていただいた方です。それまでは本当にただの冒険ばかりかみないな感じだったんですよ。北極から南極まで一年がかりで旅をしたり、エベレストに登ったり、人が行かない所に行つて写真を撮

中で深まり、東北の沿岸部にも通うようになっていったんです。

大学院で伊藤先生に教えていただく前、学部生の頃は文学部で文化人類学を専攻していました。その頃は不真面目で授業にもロクに出ていなくて、それこそ冒険とか探検のことで頭がいっぱいだったんです。自分は、十日前くらいまでチベットにいて、一カ月間ほどチベットで山登りをしていました。標高八〇〇〇メートルを超えるシシャパンマという山に登っていて帰ってきたばかりなので、まだちよつと体がふわふわしているというか、頭もふわふわしています。山登りだとか川下りだとか、海を渡るとか、十代の頃から冒険や探検のことばかり考えてきて、まあ、今も似たようなものですね。

白瀬轟と阿部雅龍君

秋田県は南極探検で有名な白瀬轟の生地でもあります。白瀬轟は、にかほ市出身の探検家です。当時、アムンセンやスコットが世界初の南極点到達を競っていた時代に、白瀬轟は開南丸という船を造つて南極大陸に行き、アムンセンやスコットよりも早く南極点に到達しようとしていました。でもその夢はかなわず、南極点到達前に、途中で引き返すこと

ろうと思つていた。でも、大学院に入つて伊藤先生と出会つてからは、それだけではない新しい見方、別の可能性や、身近な所にも未知の世界があるということを教えてもらいました。

祝祭だとか伝統行事、祭祀儀礼、そういったことに関心を広がつていったのは伊藤先生の授業がきっかけでした。岡本太郎が出会ったナマハゲの話をしてくれたと記憶しています。そして、来訪神行事、すなわち折口信夫がいう「まれびと」の存在を知り、実際に男鹿半島にナマハゲを見に行ったのは二〇一〇年のことでした。男鹿半島では何カ所も行われていますけれど、その中で一番歴史がある真山地区のナマハゲを見に行きました。一四年前になります。

来訪神行事を追いかけて

そこを皮切りに、東北・北陸と九州・沖縄の、来訪神行事を追いかけるようになっていきました。能代市浅内のナゴメハギや、にかほ市のアマノハギなんかも、ナマハゲの系譜ですね。アマノハギは、桑の木の根っこを使った、怖いお面です。根っこ部分の凹凸を利用して、それを顔に見立てて仮面になっているので、人工的な感じが薄れ、精霊的な印象

になります。アムンセンが明治四四年一月に、スコットが翌四五年一月に南極点に到達した一方で、白瀬はそれよりも後に南極大陸に到達。先人の歩みを知って失意の中、それでも南極大陸を進みながら力尽き、自身の最終到達点に広がる場所を大和雪原と命名して日本に帰ってきます。

白瀬が生まれたのは、金浦にある浄蓮寺というお寺で、その近くには記念館もあります。ドン・キホーテ的な冒険家としての面もあり、不遇な人生でしたけれど、自分は尊敬しています。自分と同世代で、冒険家と名乗っていた阿部雅龍君が、つい最近、病気で亡くなつてしまいました。阿部君は白瀬轟の足跡をたどつて南極大陸に行こうとしていた秋田出身の青年です。白瀬轟に関する話は今日配られた封筒の中に入っている、文化創造館の開館記念ブック「もつと知りたい」という本の中に書いています。

冒険の何が芸術的なのか

冒険や探検について、ぼくはずつと関心があつて調べてきましたし、冒険や探検の本質について考え続けてきました。そんな中で、大学院に入つて伊藤先生に出会つたとき、冒険や探検と芸術の結びつくような考え方を教

を強く与える怖いお面だと思います。アマノハギを撮つたのは二〇一三年だったかな。

秋田市の雄和平沢地区でヤマハゲも撮影しました。米俵の、底の部分を使つて仮面を作っています。二〇二四年の一月一日にはにかほ市の金浦赤石地区でアマハゲを撮影しました。部屋の中にアマハゲが入つてきて、ご先祖様の遺影があり、仏壇や神棚がある部屋をまれびとが訪ね、そこで飛び跳ねたりします。まれびとをご先祖様が見ているというようなシチュエーションには他地域でも会いましたが、多義的な意味があるように思いました。

こういった一連の写真は『まれびと』というタイトルの写真集になって、小学館から出版されました。伊藤先生にもテキストを寄せていただいています。このアマハゲについては、「秋田魁新報」の「ハラカラ」という面で、写真を載せて、文章を書かせていただきました。

秋田での撮影

二〇二四年元旦は秋田に泊まり、翌日、大日堂舞楽を見に行つて撮影をしました。大日堂舞楽の仮面は「まれびと」とは少し意味合



石川直樹写真集「まればと」
小学館 2019年



クロストーク「まればと／風土／日本海」
2024年1月14日秋田市文化創造館にて
ラーニングプログラムとして開催



秋田魁新報「ハラカラ」54号 (2024年2月23日付)

いが異なりますけれど、共通している点もあります。仮面は、どこから見ても自分と目が合っているような感じがする。左から見ても右から見ても、上から見ても下から見ても、自分と目が合っているというか見つめられているような。写真も似たようなところがあつて、自分はフラインダーを通して見ているけども、向こうの世界から見られて見ているような感覚がある。そんなことを、大日堂の舞を見ながら考えていました。特にこの黄金の仮面「五大尊舞」に関しては印象に残っていて、これも「秋田魁新報」の「ハラカラ」という面に書いています。特に二〇二四年の年明けの大日堂舞楽が忘れられないものになったのは、能登半島で大きな地震があつたことで、その地震があつた直後、ぼくは大館能代空港に降り立ちました。降り立つてすぐ宿に向かう道中、イノシシやタヌキが道路に出ていたんですね。北陸と東北で距離は離れていましたけれど、こちらでも動物たちが何かを察知していたのかなと思いました。そんな経緯があつて、二〇二四年の大日堂舞楽は非常に忘れられないものになりました。

他にも、湯沢の犬っこまつり、刈和野の大綱引き、上桧木内の紙風船上げ、大仙市花館の川を渡るぼんでんなども撮影しました。新

刊『秋田』の中にたくさん収録されています。二〇二三年には、堀井美香さんという秋田出身のアナウンサーの方も撮影しました。いろんな仕事を「秋田魁新報」ではさせていただきます。

最後に撮影したのは、夏の、秋田竿燈まつりです。お彼岸の時期、死者が帰ってくるの依代としての意味合いを提灯に感じました。「ねぶり流し」というのがもともになっていると思いますけれど、一種の依代なのかなと。伊藤先生が研究のフィールドにしているバリ島のペンジョールとか、能登半島のキリコ祭りとかもそうですが、闇夜に高く掲げる何かが、死者の世界である彼岸と此岸をつなぐ、鍵になっているのかもしれないと思いますながら、祭りを撮影していました。

この『秋田』が出版されるにあたって、伊藤先生が土崎の出身なので、土崎の港に行ってみたりとか、秋田城跡を巡ったりとか、大学院を卒業してもう二十年近くになりますけれども、まだまだ伊藤先生の言葉に感化されて、旅に出て、学んでいます。

菅江真澄のお墓、大物忌神社の鳥海山様なども訪ねました。鳥海山様というのは、鳥海

山を模した大きな岩が登り道の途中にあります。『ザ・ファーストスラムダンク』というアニメ映画でここが舞台になっているようで、静謐な場所なのに、行ってみたら若いカップルなんかがいて、不思議な感じでした。

白井晟一の建築も、伊藤先生に教えてもらって訪ねたものの一つです。秋田県内の、彼の建築が残っている場所をたどって、写真に撮りました。どれも、自分だけの学びではたどり着けなかった場所ばかりで、伊藤先生の授業の記憶が旅の指針になっていました。そこからまた新しい旅へとつながっていき、どんどん世界が広がっていく。『秋田 環日本海文明への扉』という本については、これから自分でも何度も読み返しながら、また新しい旅につながっていく道しるべのような存在じゃないかな、と思っています。



5つのトーク 秋田京都感星特急便 〈学びのためのディーブタイム（深い時間）〉

日時：2024年10月26日（土）13:00-18:00
会場：秋田市文化創造館2階 スタジオA1
主催：京都芸術大学
共催：秋田市文化創造館
後援：秋田市

伊藤俊治（美術史家、京都芸術大学大学院教授）
石川直樹（写真家）
石倉敏明（芸術人類学者、秋田公立美術大学准教授）
山川冬樹（美術家、ホーメイ歌手、秋田公立美術大学准教授）
熊谷新子（編集者、秋田市文化創造館職員）

京都芸術大学大学院写真・映像領域（伊藤俊治教授）によるエクスカッション形式の授業を当館で特別無料公開しました。秋田をフィールドに選び、風土と文化の関係について探求しました。現代のアーティストの話題も盛り込みながら、秋田の魅力を掘り起こすレクチャーでした。

言葉にしづらい思い出を残すには

笠井康平（作家の手帖）

昭和戦前の「みなとっ子」が

秋田市北部の土崎港は、秋田市ポートタワー・セリオンの所在地であり、プロレタリア文学のさきがけとなった同人誌「種蒔く人」創刊の地でもある。発起人となった小牧近江・金子洋文・今野賢三は、第一次世界大戦後のヨーロッパで起きた平和運動・反戦思想の影響を受け、菊版十八ページの小冊子を故郷で印刷していた。今日でいう創刊準備号だ。やがて彼らは東京で再結集し、社会主義の国際的な広がりと連帯しながら、賃金労働者の生活と意見を伝える作品を世に送るようになった。

一九二一年に「種蒔く人」（土崎版）が刊行されてから二年後、秋田市生まれの十七歳が東京へ旅立ち、神保町でフランス語を学びながら学内同人誌を制作するようになった。石油業を営む実業家一族に生まれ育った彼は、少年時代から詩作を楽しむ読書家だったようだ。秋田中学校（現・秋田高等学校）を飛び級し、東京商科大学（現・一橋大学）を卒業すると、川崎貯蓄銀行に勤めながら兼業翻訳家を始めた。同世代が立ち上げた新興文芸誌に、

アンドレ・ジッド（1869-1951）、マルセル・ブルースト（1871-1922）といった当時最新のフランス小説を訳し、一九三一年にはヴァージニア・ウルフ（1882-1941）の代表作『灯台へ』の日本初訳も手がけた。三十作以上の訳業を残したが、父親から専業の許しを得てはどなく結核を患い、三十二歳で亡くなった。

社会を変えたい友人たちと

彼は葛川篤（1907-1938、本名・刈田儀衛）と名乗り、ベンチャー精神に溢れた詩人・小説家・評論家とともに、「昭和モダニズム」と呼ばれる前衛小説シーンを担った。彼が都市部の書店街に暮らした一九二〇年代は、毎日新聞・朝日新聞が一〇〇万部を突破し、新潮社の世界文学全集（全五十七巻）が四〇万部発行されるなど、出版産業が急速に大衆化した時代だった。長者番付に流行作家が名を連ね、文学部の出身者たちが党派・結社を組み、日本文藝家協会をはじめとする職能団体が設立され、「もの書き」の社会的地位はもつと上がるはずだと信じられていた。

市場拡大につれて著者の棲み分けと読者の層別化も進み、純文学・大衆文芸・プロレタリア文芸という（暗黙の）市場区分が形成された。ふたりにひとり大学へ進む今とはちがい、高等教育を受けた男性は五%ほど、女性は一%未満だった頃。国内人口が六〇〇万人を突破するなか、著述家の人口は三〇〇〇人にも満たなかった。彼らが懂れた「文学者」は高学歴の知識人であり、選りぬきの起業家でもあった。海外トレンドを伝える新興メディアが生まれては消え、採算度外視の創作グループが集まっては解散し、あちこちの誌面で論争が起きては忘れられた。進歩的な考えは伝統を否定し、公序良俗を乱すと警戒されたから、検閲、発禁、逮捕、勾留、拷問も身近なニュースだったようだ。

災禍と幻滅の時代に

けれどもその後、関東大震災と昭和恐慌、東北大凶作に見舞われた日本は、一九三〇年代にかけて軍事クーデターや物価高騰、経済格差の広がり、結核（亡国病と呼ばれた）の蔓延に苦しんだ末に、資源確保と領土拡大を狙った軍事侵攻が泥沼化して、外交的孤立を深めていく。愛国心が過熱し、皇国史観が一党独裁と結びつく世相にあつて、流行に敏感な若者たちは貧しい故郷を思いやり、厳しい現実を変えようと、全国各地で「新しさ」を求め、遠い「世界」の動きを知ろうとして、いつかどこかの「夢物語」を語り合った。

この景色には見覚えがある。インターネットが世界をつなぎ、理想の社会に近づけると信じられた、あの懐かしい時代の姿に似ている。パソコンからスマホへ、ホームページから動画配信へ、都会から地方へと、あまりにも騒がしい孤独が広まったとき、私たち高所得国の若者たちは、青年期の「人生」を新しい情報メディア環境に託したかったのだろう。

その百年後を生きる私たちも、権威主義の台頭が進み、紛争と暴力が勢いを増す時代に、人口減少と高齢化が「変わらない」と悲観しながら、日本発コンテンツの海外市場規模を三倍に増やす「ものがたり」を信じようと努めている。歴史は、またくり返すのか。そうではないナラティブはありうるのか。

失われない話術を求めて

葛川篤が手がけた小説は、どれも一九二〇年代後半に出版された。マルセル・ブルースト『失われた時を求めて』（1913-1927）は試訳にとどまり、ヴァージニア・ウルフ『灯台へ』（1927）は第二章・第三章のみだったが、アンドレ・ジッド『贖金づくり』（1926）は完訳できた。文学研究は彼／彼女たちを、ヘンリー・ジェイムズ（1843-1916）やジェイムズ・ジョイス（1882-1941）と並んで、「意識の流れ」を自国語の散文芸術シーンに持ち込んだモダニズム小説の系譜に位置づける。

葛川の編集担当を務めた伊藤整（1905-1969）は、この手法は

「現実中にある外部形態と行動を描写すると共に、その各形態と行動とから聯想として発声する空想、記憶、念願、痛恨、歓喜、その他限らない心理内の諸映像を直接に、説話的にでなく発声的に記述」することで、「内部現実と外部現実との精緻な多彩な織物を造り出すことが出来る」と説明している（出所…「方法としての『意識の流れ』」）。

ごく簡単にいうと、「思いのままに書く」方法だ。話がそれる、気が変わる、ふと思ひ出す、考えがまとまらない、一度に多くを感じた。そんな一瞬の「感じ」をとりとめなく書き出す。程度の差はあれど、視点の切り替え、余談の挿し込み、文節のつぎはぎ、語順の入れ替え、構文の崩し、文法の乱れ、句読点の省略、語句のくり返しなどを用いる。実例を見てみよう。葛川篤訳『抄訳失われた時を求めて』に、こんな一節がある。

つい先程雨が降ったばかりなのに、しかも絶えず變る空模様なのにも拘らず、アルベルチヌをエブルヴィルまで見送つてから、と言ふのも彼女は彼女の言ひ廻しによれば、ボンタン夫人の別荘のあるこの小さな舊達と、彼女がロオズモンドの両親に「寄宿させられて」ゐたアンカルヴィルとの間を「機械の梭のやうに往き來して」ゐたのだから、彼女を見送つてから、私はかつて私たちが祖母さんと一緒に散歩したとき、ド・ヴィルパリシス夫人の馬軍が通つたあの天通りの方

へ、ひとりで散歩に出掛けた。（傍線部は筆者による）

整つた話術でまっすぐに書きたければ、傍線部だけを残せばいい。ところが語り手「私」は「空模様」を気にし、「彼女」の昔話にふれ、「祖母」を思ひ出すことにした。ただの「散歩」がふたつのエピソードを呼び出すきっかけとなつて、行動よりも追憶に割く文字数が増えた。こま切れの場面が流れるように切り替わるから、読みのリズムに「遅れ」を生む効果がある。

葛川も訳出に手こずつたようだ。原文のグルーヴはとても再現できないだろう。それでも伝わる「何か」があるのか。それは言葉で表せるのか。最新のリアルタイム音声翻訳が直面する技術課題に、忘れられた昭和モダニズムの先がけたちも悩んでいたとしたら。現代に受け継がれた実験小説から得られる示唆はまだまだありそうだ。



ヴァージニア・ウルフ著、葛川篤訳『灯台へ』作家の手帖 2024年



マルセル・ブルースト著、葛川篤訳『抄訳 失われた時を求めて』作家の手帖 2026年

葛川訳の詳細・購入はこちら



遠く、さみしさを訪ねて

後藤那月

はじめて白浜駅に降り立った時、溢れんばかりの眩い太陽の光に思わず目をつむつた。熱く、刺すような日差しを私は知らない、まるで南国に來たかのように思う。改札の外には“WELCOME”の文字が書かれた色褪せた大きい看板がある。駅から市街地まではバスで移動する必要がある、一時間に一本のバスを待っている。

二〇二五年の秋、私は和歌山県の白浜町を訪ねた。今年の春に開催した個展のリサーチを兼ねた滞在だった。白浜は昔から心身を癒す宿湯として親しまれてきた町で、人の往来が多い。けれどもこの町はどこか寂しげで、憂いを帯びている。旅人を受け入れ、そして深く追わない街の空気が私にはとても心地良かった。ここでは誰もがまれびとのまま、漂い続けられるような気がした。

曇りの日、雲の下で世界は淡く影を落とし、すべてのものが等しくある。坂が多い町、入り組んだ路地に迷う。すると山はいっ

そう近くに感じられた。複雑な地形に沿うように連なつた建物が目につく。隣合う家と家の間は極端に狭く、まるで個人の輪郭は曖昧で互いに共存しているようだった。町を歩いている時、つい磨りガラス越しの部屋や庭先を見てしまう癖がある。カーテンのひだの綻び、数年前の朝刊、手入れされた植物の艶、無防備に置かれた二脚の椅子、それらひとつひとつが顔も知らない住人のことを語り聞かせてくれる。

熊野の沿岸部を車で走っていると、多様な岩の表情が見られる。熊野、及び紀伊半島は海底にあるプレートの上に位置しているため、数千年前から地殻変動の影響で地が浮き沈み、侵食され、長い年月をかけてえもいわれぬ形を現していた。白浜一帯で見られる地層は前弧海盆堆積体と呼ばれる。現在は田辺層群と熊野層群に分かれているが、元々はひとつながりの地層であつたそうだ。それがマグマや地殻変動により東西に分断された。沿岸部の風景の中でも特に鳥毛洞窟という場所に惹かれ、現地の知り合

いに何度か連れて行ってもらった。そこへは干潮時しか渡ることができない。道となる岩場には数時間前まで岩を覆っていた海水が取り残されて、岩の窪みに溜まり、熱を浴びていた。車を止め三十分ほど歩くと、やがて深く穿たれた洞窟に辿り着く。泥岩と砂岩から成る見事な方状の縞模様が目立ち、奥へ奥へと誘われるようだった。暗闇に目が慣れるにつれ、果てのないような内部が見えてくる。海鳥の羽が周辺に散らばり、そこにも静かな営みがあったことを想像する。

洞窟の奥の壁に身をもたれながら来た道を振り返ると、大きく開いた洞の口が絵画のように風景を切り取っていた。ふと、岩の壁面が静かに崩れ落ち小さな粒が地面へと降る様を見た。足元に転がる石もまた、この土地の地形を形成する巨大な岩肌の断片なのだろう。どのくらいそこに居たのか、あんなにも大きかった潮溜りは、まっ白い小さな塩の結晶に変わっていた。

沿岸部の風景を形成したのは、日本の南岸から太平洋を北上する黒潮の影響も大きい。黒潮の海水は透明度が高いため、太陽からの青い光だけが通り抜け海水を深い藍色に染めるという。波とともに運ばれる温暖な風は今もなお熊野の生命を育み続ける。当時の植生は時代とともに失われつつあるが、一部では原始の森に近い植生が残っている。そのひとつが妙法山にある阿彌陀寺、その先の奥の院へと続く道だ。この辺りでは人が亡くなると、その

魂はまず妙法山へと登っていくと信じられていたそうだ。

実際に山道に足を踏み入れると、艶やかな木々が静かに騒めき、霧が瞬く間に視界を覆う。ここなら浄土に手が届くかもしれないと錯覚する。見えない気配だけがあたりを満たす中、私は確かに境界をまたぐような心地を覚えた。全身がひりつくほどの静寂と呼応するように、体内の息がすべり出していく。頭の前から足の先まで、神経がすべて繋がるような鋭い感覚は、私の輪郭をふるわせ、端々まで満ち、そしてはたと消えた。

圧倒的な自然そのものへの畏怖は、やがて仏教や修験道と出会い、他にはない熊野の信仰を形づくった。熊野の山々は、穢れや性別などの境界を超えてあらゆる人々を受け入れてきた場所である。まるでぽっかりと口を開けたように、今もすべてのものを迎え入れている。私もその引力に誘われたひとりだ。その向こうには、無窮のときが流れているのだろうか。

私の原風景ともいえる幼少期の記憶がある。寝付けない夜、父に抱えられて見た風景のこと。家の目の前には田園が広がり、その田んぼの両端を陸橋が二つまたいでいた。ある冬のしんとした雪の日、私は変わらず父に抱えられながら外に出た。すでに雪はこんもりと田を覆い、月に照らされた銀の舞台を見つめる。降る雪は音もなく、真つすぐに奥へと伸び、ただただ、静かだった。あの時、わたしは途方もない遠さを前にした。

幼い頃から自然はとても近くに在るものだった。けれど秋田の山々は沈黙したままで、私がいるここからは精神的に距離があるように思う。町もそうだ。旧道に残る電灯、暖かい虎猫の柔らかな背骨、七人の子をおぶるお地藏さまと、そばに供えられた花や、八月の祭り囃子も、そのどれもがあつた山々と同じようにさみしそうに映る。

それはお守りのような風景。いつも遠くからその輪郭を臉の裏でなぞった。さみしさをたずさえていることは、決して寂しい訳ではない、彼らは、豊かな孤独でいることを選んでいる。

独自の信仰をきっかけに各地から人々が集う土地となつた熊野も、その奥深くや町に浸透する気配は、あの秋田の風景を彷彿とさせた。土地に潜むさみしさと出会ったとき、私は映し鏡のように自らの内にも立派なさみしさがあることに気づかされる。熊野を詣でる人々は、歩くことを介して自身の奥に眠るさみしさと出会ひ直すのだらう、再び胎内を旅して、生まれ直すかのように。この地を訪れる人々がする、何かと形容しがたい存在もまた、私たち自身に宿るものなのかもしれない。

遠く離れたこの町で、私はひそやかに息づく北の地を想う。



風土と身体——土方巽と石井漠、二人の舞踏家を中心に 山川冬樹

秋田県の南部には、細江英公と土方巽による写真集『鎌鼬』が撮影された「田代」という地域があります。今ご覧いただいているのは、私とその田代で撮影した写真で、実際に『鎌鼬』の撮影現場となった田んぼの風景です。先日、現地を訪れる機会があり、その際に撮影したものです。

……ところで、今日はこうして松葉杖を突いた姿で、みなさんの前に立っています。少し前に、東京都青梅市の多摩川上流域で「芸術激流」という企画に参加したのですが、これは、さまざまなアーティストが川沿いで作品を展示したり、パフォーマンスしたりするのを、観客がラフティングボートで川下りを楽しみながら鑑賞する——そんな少し変わった試みでした。そして、そのパフォーマンスの中に、私は骨折してしまつたのです。

パフォーマンスを開始した比較的早い段階

で、岩に足を強く打ちつけ、骨折していたのですが、その後も私は数時間にわたって、パフォーマンスを続けなければなりませんでした。激痛が走り、身体の自由が利かず、立つことさえつらい状態で、それでも何とか立ち上がろうとする——そのとき、ふと土方巽のことが頭に浮かびました。身体が思うように動かない中で、それでも立とうとするこの感覚こそが、「暗黒舞踏」と呼ばれるものの核心なのではないか……と。

今日は、「風土と身体——土方巽と石井漠、二人の舞踏家を中心に」というテーマでお話しする機会をいただきました。私は現代美術、音楽、舞台芸術の分野でアーティストとして活動しながら、秋田公立美術大学で教員を務めています。本日、この後にお話しされる石倉敏明先生とは職場の同僚です。また、伊藤俊治先生は私が多摩美術大学に在学していた頃の恩師でもあります。今日は、その恩



雄勝郡羽後町田代 2024年 写真：山川冬樹

師の故郷で企画された場でお話できることに、深い感慨を覚えている次第です。秋田に赴任してから、まだ一年半ほどしか経っておらず（二〇二四年一〇月時点）、この土地を代表して語れる立場ではありませんが、「身体」という切り口からであれば、何か語れることがあるのではないかと。

土方巽という「病」

思えば土方巽を初めて深く知ったのは、大学院時代——伊藤先生の授業でした。たしか一九九七年頃のことだったと思います。「暗黒舞踏」という、土方巽が創始したダンスのジャンルについては、それ以前からなんとなく耳にはしていました。しかし、土方巽その人とその思想、あるいは彼の表現の真髄に触れたのは、やはり伊藤先生の授業が初めてでした。授業で上映された土方巽の舞踏の記録映像は、私に鮮烈な衝撃を与えました。ダンスとしての動きそのものより、土方の身体がまとうている、言葉にしがたい「風土」のよ

うなものに、強く惹かれたのです。それ以来、私は土方巽に関する本や資料を集めるようになりました。今にして思えば、伊藤先生の授業で土方巽に触れたあの体験によって、私は土方巽という「病」に「感染」

したのだと思います。私たちはコロナ禍を通して、ある病原体がどのように身体に感染し、影響を及ぼすのかをよく知っています。それは空気や飛沫、接触を介して侵入し、身体の奥深く、細胞にまで入り込み増殖していく。一定期間潜伏し、発症する人もいれば、しない人もいる。回復したと思っても再発したり、後遺症という形で症状が長引いたり、慢性化したります。

芸術もまた、どこか感染症に似た性質を持つていてのではないか——そんな風に、私は常々感じてきました。伊藤先生の授業で土方巽に「感染」して以来、たびたび「土方熱」を発症し、いったん落ち着いたと思うと、別の形でまた症状が現れてくる。そんな小康状態が慢性化したまま現在に至っている感覚があります。これまで私はアーティストとして、大駱駝艦や山海塾など、土方巽の影響下にある舞踏カンパニーと共演する機会はありませんでしたが、暗黒舞踏の世界にとっぷり浸かってきたわけではありません。それでも土方巽という「病」が身体の中に残り続けている感覚は、今も確かにあるのです。

そして秋田に赴任してからというもの、その症状はむしろ強まっているように感じてい

ます。その意味で、土方巽という「病」は実にしつこい。身体の奥深くで、ずつと疼き続けている。この「しつこさ」こそが、土方巽の芸術の強度なのだと思います。さらに言う

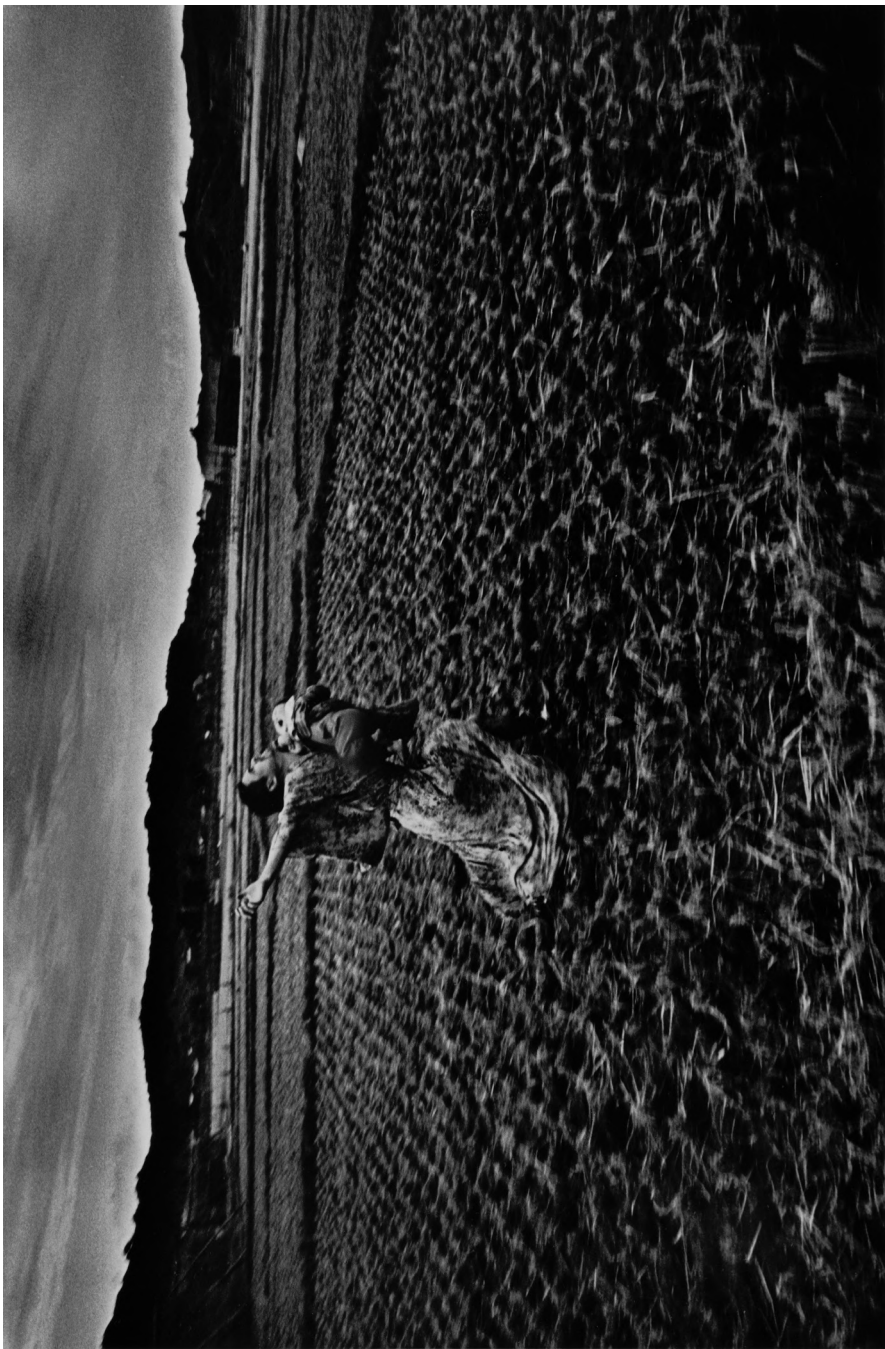
と、その「しつこさ」は、写真集『鎌鼬』の撮影地である田代でも、地元の人々の身体の中

なかで、いまだに疼いているのではないかと

思うのです。

写真集『鎌鼬』を生んだ「風土」

細江英公は、土方巽とともに一九六五年に田代を訪れ、ゲリラ的にフォトセッションを行いました。その成果は四年後に写真集『鎌鼬』として結実します。現在の田代には、土方巽ゆかりの資料を収蔵する「鎌鼬美術館」があり、二〇一六年からは毎年「鎌鼬の里芸術祭」が開催されています。私は先日、その芸術祭に招かれ、講演とパフォーマンスを行いました。それはちょうど、写真集『鎌鼬』が撮影されたのと同じ九月の終わりのことでした。まず細江の白黒写真で見てきた風景が、鮮やかな色彩を伴って目前に広がっていることに、私は感動を覚えました。さらに驚くべきことに、『鎌鼬』に写っている風景の多くが、今もほとんど変わらない姿で残されていたのです。



『鎌鼬』の印象があまりにも鮮烈なため、私たちはしばしば、土方巽が田代の農村で生まれたかのようなイメージを抱きがちです。しかし実際に土方が生まれたのは、秋田市の保戸野八丁であり、羽後町田代は父親の出身地にあたります。現在、「鎌鼬美術館」は旧長谷山邸という歴史的建造物の一角にあります。ですが、かつてこの邸宅の隣には、土方にとつて憧れの存在だった従姉妹の姉が暮らしていたといわれています。そうした縁から、土方は子どもの頃に田代をよく訪れていたようです。おそらく、従姉妹の姉への思慕も相まって、少年土方は田代の風土に深く「感染」したのではないかと想像します。

その後、土方は秋田を離れ、東京へと向かいます。高度経済成長期のただ中で、いくつものスタジオを渡り歩き、さまざまなジャンルを越境した末に、ついに独自の舞踏を確立するに至ります。「暗黒舞踏」の誕生です。それは子どもの頃に田代で感染し、長く潜伏していた「風土病」が、時を経てついに、身体表現として発症した瞬間だったのです。

『鎌鼬』が撮影された一九六五年は、東京オリンピックの翌年にあたります。当時の東京都知事は東龍太郎でしたが、彼は「訪れる

外国人に恥ずかしいくない東京」を掲げ、都市美化政策を推し進めました。「一千万人の手で東京をきれいに」というスローガンのもと、都民総出の清掃が行われ、同時に高度経済成長によって汚濁した都市河川は次々と暗渠化されていきます。つまりこの時期、日本から「風土」と呼ばれるものが、クレンジングされるようにして、急速に剝ぎ取られていったのです。そう考えると、土方巽が、同じく東北出身の写真家・細江英公とともに田代に戻ってきたという事実は、当時の空気への反作用、あるいは「風土への回帰」という時代への反抗として捉えることもできるでしょう。

「鎌鼬の里芸術祭」に参加して、私が特に心を動かされたのは、『鎌鼬』という一冊の写真集を撮影するためにその土地を訪れた土方巽によって、田代の人々にもたらされた「事故」とでもいうべき一瞬の接触の余韻が、地元のひとりひとりの中に、今も生き続けているという事実でした。細江英公は『鎌鼬』の「後書」で、そのときの様子を次のように記しています。

—— 田代では、二人はまことに非礼な、いや、犯罪的ともいうべき傍若無人の行為で、

とつぜん、村人の前に姿を現し、子どもと戯れ、農作業の休憩中の農夫たち一家が道端で談笑する前にべたりと座り込んで嘲笑され、畑の中で野糞をたれ、お嫁さんを襲い、赤ん坊を攫って田圃を走り、これぞ何を隠そう『鎌鼬』の一撃、電光石火の暴力的ハプニングだった。この方法は、映画でもない、テレビでもない、絵でもない、文学でもない、ただ写真術だけがでる独壇場だった。—— ※1

細江が言うように、地元の方々に話を聞くと、当時の土方の訪問は、現在のコンプライアンスの感覚からすると「アウト」な行為の連続だったようです。農作業の合間に休んでいた一家の前に突然座り込み、ウケをねらつて自らの股間を露わにして見せたという逸話や、人さまの家に上がり込んで障子を破りまくったという悪事の数々——それらを田代の方々は、まるで伝説か神話でも語るような口ぶりで、「今の世ではあり得ない（笑）」と口を揃えて話してくれました。写真の中で土方に攫われた赤ん坊は、成長して現在鎌鼬美術館で働いていらつしやるそうです。このように『鎌鼬』にまつわる伝説を、地元の方々が今なお生き生きと語り継いでいる姿に触れると、「鎌鼬の一撃」とともに、土方巽が植え付けた「病原体」が、今も田代の人々

の身体の奥深くで生き続けているのだと実感させられます。

田代で出会い直す

伊藤先生の著作には、「風土」とは単なる気候や地質、地形、景観の総称ではなく、「人間の精神構造の内部に刻まれた、自分を理解する方法」であると記されています。土方が父の故郷である田代の「風土病」に「感染」したとするならば、その「風土病」は土方異という特異な芸術家の身体を宿主としながら創造的な変異を繰り返し、時を経て田代の人々に再感染しながら、今も生き続けているように思えてならないのです。

だからこそ、私たちは田代を訪れることで、地元の人々を通して、もう一度、土方異に出会い直すことができる。それこそが、田代に「鎌鼬美術館」や「鎌鼬の里芸術祭」があることの最大の意味なのではないでしょうか。そこは単に舞踏手たちが集い、舞踏を披露する場ではありません。訪れた人々が田代の人々を介して土方異と出会い直し、その「風土病」に再感染する場として機能しているのです。そこにこそ、田代が「舞踏の聖地」と言われる所以があるのだと思います。

して西洋列強に肩を並べようとするなかで、ハンセン病患者の存在は「国辱」とされ、排除の対象とされました。つまり、強制隔離の背景にあったのは、医学的な合理性ではなく、国家の体面や統治を優先する政治的都合だったのです。

私がこのハンセン病という病を知ったきっかけも、実は土方異でした。土方の「舞踏譜」の中には、「癩病院」という一節があります。「舞踏譜」とは彼が舞踏を記述するために考案した独自の方法で、いわゆる振付のためのスコアというよりも、身体の状態や心構えのイメージを記したノートです。そして「癩」とは、ハンセン病の古い呼称のことです。土方の「舞踏譜」には、――癩病院。（舞踏家が、癩患者に、おまえは癩患者だよ、とハンコを押される。最終的段階。痛みのお路を通して、神秘的な内奥へ。）ペーコンの顔三つ……※2といった、強烈なイメージが並びます。ここでの「ペーコン」とは、歪んだ人体像や肉体の崩壊を思わせる表現で知られる画家、「フランシス・ペーコン」のことを指しています。

土方異自身が、「これはハンセン病の踊りだ」と明言したことはないようですが、舞踏

「風土病」とは、特定の地域の自然条件や生活習慣と深く結びついて生じる病を指します。地域文化と病とが、ここ秋田でいかに密接に結びついてきたかは、疫病除けとして地域に祀られてきた鍾馭様のような人形道祖神や、西馬音内盆踊りがもともと、疫病死を含む死者たちの霊を慰めるための踊りとして理解されてきたことから明らかでしょう。

土方異と「ハンセン病」

「風土と身体」というテーマについて考えるとき、「病」、とりわけ感染症の問題を避けて通ることはできません。私はここ十年ほど、ハンセン病療養所に通いながら、ハンセン病とそれに関わる文化的・社会的事象の研究を続けてきました。ハンセン病は、厳密には医学的な意味での「風土病」に分類されませんが、特定の地域に長期間固定化する傾向があり、生活環境や社会条件と不可分だったことから、しばしば「風土病」的な文脈で理解・説明されてきました。

ハンセン病は、らい菌によって引き起こされる細菌性の感染症で、症状が進行すると、顔や手足に病変が現れます。また、感覚麻痺によって痛みや熱を感じにくくなり、怪我や炎症に気づかず症状を悪化させてし

評論家の市川雅は、土方が自身との対話の中で、ハンセン病によって皮膚が溶け、身体が棒状になるイメージについて語っていたと証言しています。さらに、土方の暗黒舞踏の拠点であり、稽古場でもあった「アスベスト館」が、かつてハンセン病療養所「慰魔園」の跡地に建てられたという事実も見逃せません。慰魔園は一八九四年にキリスト教系団体「好善社」によって開設され、一九四五年の東京大空襲で焼失しました。後にその跡地を土方の妻、元藤燐子が購入し、津田・元藤近代舞踊研究所を経て、土方と元藤の出会いを機に「アスベスト館」が誕生します。偶然とも必然とも言える、歴史の重なりです。

土方異の記録映像『夏の嵐』には、「ハンセン病」というタイトルで舞踏が展開される場面がありますし、「疱瘡譚」と題された作品があることからわかるように、彼が疱瘡、すなわち天然痘や、ハンセン病など、「病」にまつわる多様な身体像から着想を得ていたことはよく知られています。土方の有名な言葉――五体が満足でありながら、しかも不具者でありたい。いっそのこと俺は不具者に生まれついていた方がよかったのだ、という願いを持つようになりますと、ようやく舞踏の第一歩が始まります。――※3という

まうことも少なくありませんでした。また白内障や緑内障によって瞳が濁り、失明する方も多くいらつしやいました。こうした身体機能の喪失や、身体的な苦痛に加え、「ボディ・イメージ（自分の身体をどのように感じ、捉え、意味づけているかという主観的な身体像）」の崩壊という、深刻な心理的苦痛を伴う病でもありました。一方で、ハンセン病そのもので命を落とすことはありません。また、らい菌の感染力は極めて弱く、感染しても特定の体質の人しか発症しないことが、歴史的にも知られていました。それにもかかわらず、外見に症状が現れることから、世界中で長く差別の対象となってきました。患者たちを最も苦しめてきたのは、病そのもの以上に、社会から受ける差別と排除だったと言えるでしょう。

日本のハンセン病隔離政策を振り返ると、かつての療養所は療養の場ではなく、実質的には強制収容所でした。その根拠となった「らい予防法」は一九九六年まで残り、二〇〇一年には熊本地裁で違憲判決が下されています。日本は他国と比べても、異常なほど厳しい隔離政策を取り続けてきましたが、これは明治初期から始まる日本の近代化と表裏一体のものでした。近代国家と

発言にも、彼の舞踏が病者や障害者の身体像を志向していたことがうかがえます。

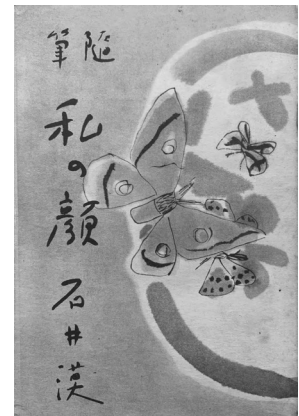
しかし実際に療養所でハンセン病回復者の方々と関わってきた身からすると、彼が体現する身体像は、現実の患者の姿とは大きくかけ離れており、かなり違和感があります。『隠喩としての病い』でスーザン・ソントグが指摘したように、病が隠喩として用いられるとき、現実の苦痛や社会的条件はしばしば歪められ、不可視化されます。その意味で、土方異の身体表象もまた、隠喩に過度に依拠した、差別性を孕む表象として批判的に捉え直される必要があるでしょう。

その上で、私たちは土方異をどのように再評価できるのでしょうか。私は次のように考えます。生政治時代において、権力は私たちの生に直接介入し、どの生に価値があり、どの生に価値がないかを独断的に決定しようとしています。そのような状況のなかで土方は、権力によって無価値とされた病者の身体の側にこそ創造的価値を見出し、さらに己にその「病」の力を行使してみせることによって、近代に叛乱を起こそうとしたのではないでしょう。

石井漢と病者たち

しかし土方と「ハンセン病」との関わりを調べても、先に挙げた事例以外に具体的な記録はほとんど見当たりません。その理由は明確で、土方は特定の病を舞踏で表現していたのではなく、あくまで抽象化された「病」のイメージを、舞踏として体現していたに過ぎないからです。これ以上調べても新たな資料は出てこないだろうと思っていたときに、出会ったのが、石井漢の随筆『私の顔』という本でした。石井漢は一八八六年、秋田県三種町生まれで、土方異より四二歳年上の舞踊家です。秋田という風土が、世代を超えて近現代における身体表現の先駆者を二人も輩出してきたことは、特筆すべき事実だと言えるでしょう。

随筆『私の顔』には、石井漢が戦前から戦後にかけて行なった数多くの慰問公演について綴られています。とりわけ戦時中は、戦地で兵士のための慰問公演を行い、一九三九（昭和十四）年刊行の『皇軍慰問 北支から中支へ』には、戦車や軍艦マストを模した群舞を披露するダンサーたちの姿が掲載されています。こうした戦地慰問の流れのなかで、彼は積極的にハンセン病療養所や精神病院にも訪れ、多くの慰問公演を行うようになりまし



石井漢『私の顔』モダン日本社 1940年

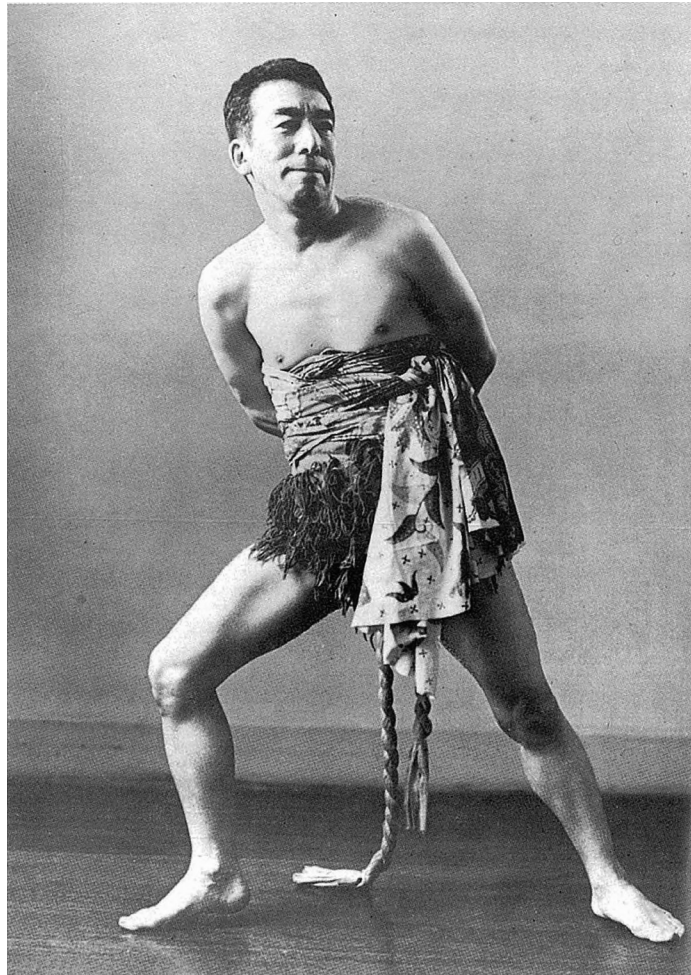
た。東京の国立ハンセン病資料館には、土方異に関する資料がほとんど見られない一方で、石井漢に関する資料は数多く残されています。一九五四年六月二五日、多磨全生園での慰問を伝える同年の「全患協ニュース」や、一九三四（昭和九）年に香川県の大島青松園で行われた慰問公演の集合写真など※4が、その一例です。また療養所には必ず機関誌が存在し、短歌や文学作品、批評文、時には隔離政策への抗議文などが掲載されてきました。その中には、石井漢の慰問公演を観た患者たちによる感想を綴った文章も数多く残されています。

国立ハンセン病資料館に残る資料のなかで、特に私の心を引いたのが、一九五四年に国立療養所多磨全生園での慰問公演を観た、館祐子さんという療養所入所者の方の印象記です。

「ありふれた言だが、凡そ人間社會に於て、娛樂のない生活程空虚なものはない」という書き出しから始まるその文章※5には、石井漢の踊りが、患者たちにどれほど深い感動を与えたのが、率直に綴られています。印象記には、前年に石井が都立松沢病院を慰問した際に着想を得て制作された作品「狂へる動き」が上演されたことが記されています。松沢病院とは明治期に端を発する精神科の専門病院で、「狂へる動き」とはつまり、精神病患者の身体の動きをモチーフにした踊りであったと考えられます。石井漢が土方異よりもはるか以前に、病者の身体像から踊りの着想を得ていたことは特筆に値します。さらにその踊りがハンセン病療養所で披露され、患者たちに感動を与えていたという事実には、驚かされるばかりです。

風土と身体

また石井漢は随筆『私の顔』のなかで、岡山県のハンセン病療養所、長島愛生園を訪れた体験を、「不幸な楽園」と題した章で詳しく記しています。石井漢の各地への慰問は、誰かに要請されたものでなく、自発的に行われたものだったそうですが、当時、これほど継続的に療養所に通い、密に患者たちと交流し、その体験を言葉として世に残した芸術家



石井漢「囚われたる人」1922年

は類を見ません。石井漠は若い頃に吃音を抱え、中国での慰問公演中の事故で右目を失明し、左目も視力が低下していました。さらに生涯、眼病にも悩まされていたといえます。身体の不自由さを身をもって知っていたからこそ、隔離された人々への共感が、彼を慰問活動へと向かわせたのではないのでしょうか。

土方巽が、あくまで抽象的に病者の身体像を体現しようとしたのに対し、石井漠は極めて直接的に病者たちと関わりました。この点において両者は対照的です。しかし、土方巽の「不具者でありたい」という言葉と、石井漠の生き方を重ね合わせると、そこには共通する精神が浮かび上がってきます。それは、近代の日本が排除してきた病める身体や、狂える動きのなかにこそ、人間の生の根源的な姿を見出そうとする姿勢です。生きることの過酷さを身体に刻んできた秋田という「風土」を介し、二人の舞踊家はこの点で通底しているのではないのでしょうか。

石井漠は、次のような言葉を残しています。——精神病院は、ある意味では現代社会の縮図である。(略)我々は、いっとんな衝動を受けて、明日は精神病院の門を潜らなければならなくなるかも知れないのだ。——※6 この

言葉は、病を「他人事」として切り離し、正常と異常の境界を固定化しようとする現代社会への鋭い問いかけです。

石井漠の生誕地である三種町下岩川長面を訪れたとき、この素朴で閑かな風景から、偉大な舞踊家が生まれたことに、不思議な感慨を覚えしました。「風土」は静かに、しかし確実に、身体の深層に刻まれていく。

土方巽と石井漠。二人の身体表現を通して見えてくるのは、「風土」とは単なる土地ではなく、その土地に刻まれた病や痛み、歴史、そしてそれを引き受けようとする身体、記憶そのものだということです。社会が忘れ去ろうとしてきたものを、身体はいつも無言で引き受けてきた。そのことを、二人の舞踊家は、踊りを通して私たちに示しているのだと思います。

ありがとうございました。

- ※1 細江英公『鎌鼬 普及版』(青幻舎／二〇〇九年)
- ※2 和栗由紀夫『舞踏花伝』(ジャストシステム／一九九八年)より
- ※3 土方巽『美貌の青空』(筑摩書房／一九八七年)所収「犬の静脈に嫉妬することから」より
- ※4 「藻汐草」第3巻第6号(大島青松園入所者自

- 治会発行／一九三四年)
 - ※5 「多磨」第35巻8号(多磨全生園入所者自治会発行／一九五四年)所収、館祐子「石井漠舞踊團印象記」より
 - ※6 石井漠『私の顔』(モダン日本社／一九四〇年)所収「沈黙の歌姫」より
- 本稿は、当館にて二〇二四年一〇月二六日に行われたラーニングプログラム「秋田京都惑星特急便」での講演を元に再構成したものである。

異種と共に生きる想像力——秋田・北東北の事例から

石倉敏明

秋田公立美術大学で芸術人類学の研究を続けている石倉です。今日は「異種と共に生きる想像力——秋田・北東北の事例から」というお話をします。

僕は東京出身で、学生時代に人類学を学び始めた頃はヒマラヤ山麓の少数民族の調査をしていました。インドのシッキム州、西ベンガル州のダージリン丘陵、そしてネパールのカトマンドゥ盆地の各地でフィールドワークをして、主に山の神々の信仰や神話の研究をしてきました。その後、多摩美術大学に職を得て芸術人類学研究所(現・アートとデザインの人類学研究所)の設立準備と立ち上げに関わったところから、アーティストと仕事をするようになりました。

それ以来、現代人類学の視点から、古くから伝わる神話や伝承の研究をしながら、一方ではアーティストとともにコラボレーション

作品や展覧会、アートプロジェクト、芸術祭などを共同制作してきました。二〇一九年にはアーティストや建築家、音楽家とのコレクションの一員として、「ヴェネチア・ビエンナーレ2019」の日本館作品「Cosmo-Eggs——宇宙の卵」(キュレーター:服部浩之)を共同制作し、展示しました。

二〇一五年には、田附勝さんと『野生めぐり』という本を作りました。これは伊藤俊治さん、石川直樹さんの『秋田』と同じように、写真家とのコラボレーションによる本ですね。『野生めぐり』は、一九七四年生まれの日本列島のさまざまな土地を訪ねて、そこでまだ飼いやられていない野生のイメージと出会っていくという旅をまとめたものです。

そこで旅の一つのテーマになっていたのが、今見えている現代の日本の背後に、潜在する



ヴェネチア・ビエンナーレ2019「Cosmo-Eggs | 宇宙の卵」オープニング風景 写真:石倉敏明



石倉敏明、田附勝著『野生めぐり:列島神話の源流に触れる12の旅』淡交社 2015年

もう一つの日本を見ていくことです。言い換えれば、地域の歴史の奥に蓄積されたリアリティをどのように発見し、記述していくか。時間は決して単純に流れたり、消えたりはしない。このようにある場所に沈殿し、蓄積する歴史的現実を「時層」という言葉で呼ぶようになりました。今日は伊藤さんの『秋田』に並行して、僕自身の見てきた秋田の「時層」について、特に異種と共に育まれた想像力について、お話ししてみたいと思います。

ファームガーデンたそがれ

僕は二〇一三年に秋田公立美術大学が開学した時に教員として採用され、東京から秋田市へ移住してきました。ちょうどその頃、妻と一歳の息子と一緒に、潟上市の菊地晃生さん、みちるさんご夫妻が営むコミュニティ型農園の「たそがれ野育園」に田んぼを借り、農作業に参加しました。ここでは菊地さんの農園「ファームガーデンたそがれ」の一角に各地から家族や個人が集まって、緩やかなコミュニティを形成しているんです。

この農園では、化学肥料や農薬を使用しない冬季湛水型の不耕起農法によって稲作を行っています。そのため生命力のある土が維持されていて、たくさん微生物がその中

棲んでいるんですね。ですからイトミミズなどの土中生物が生育し、タニシやセリのような食べられる生き物も田んぼを棲家にしていきます。また、たまに山からカモシカが降りてきて、畑で大豆を食べていたりします。僕は学生時代から稲作の体験を続けていても二十年以上も田んぼの仕事に関わってきただけですが、秋田でも子どもたちと一緒に土に触れて、コロナ禍で中断するまで、はだして田んぼの泥に塗れながら農作業を続けました。美大の教員も職員も学生たちも関わらせていただいています。世代で言うところ、本当に生まれたばかりの赤ん坊から、子育て世代、そしておじいちゃんおばあちゃんにあたる世代まで、非常に幅広い世代が関わっています。

この田んぼには実に多くの生物種が生息していて、それぞれの時間やリアリティを生きています。自分たちが飼っているイヌ、ネコのようなものから、田んぼにもともと生息していたさまざまな生物、そして、目には見えない微生物も含めて考えると、たくさん人の「人間ならざるもの」がそこに共生しているということが見えてきます。

ここで季節を共有し、皆と一緒に働き、遊び、料理し、共食する体験は僕たちのような

移住者にとってとても刺激的な体験でした。農作業だけでなく、周囲の里山で山菜やキノコを採集したり、コミュニティの皆さんと一緒に時間を過ごし、季節を実感できたことはその後の生活の基盤となりました。やがて娘が生まれ、二人の子どもたちとここに通って他の子どもと遊び、稲作の作業を手伝うという経験は大きかったと思います。収穫量や販売することを重視した農業ではなく、あくまでも素人による農業体験ですが、これが自然と身体をつなぐ核となって、一生の宝になっていきます。秋田でしかできないような体験が、ここには今も受け継がれています。

土に生きる民俗

伊藤俊治さんの『秋田』に、柳田國男と三木茂の共著『雪国の民俗』が紹介されています。写真家・映画監督の三木茂が『土に生きる』という映画制作のために昭和一五（一九四〇）年に一年かけて男鹿に滞在した際に撮影した写真集で、民俗学者の柳田がテキストを寄稿しています。

三木の写真はある意味、とても映画的で、当時の秋田の民衆の姿を生きたと捉えています。特に土に生きる人々の豊かな表情、手仕事によって染められた素朴な着物、農業習

俗など、秋田らしさというものが感じられます。被写体になっているお百姓さんや子どもたちも伸び伸びとしていて、素直な土着性が感じられると思います。しかし、面白いのはこの八十五年ほど前に撮影された写真集の被写体は、服装などが違っているだけで、現在と連続している現実があるということです。例えば、この本に写っている子どもたち同士の遊びや自然との関係性は、驚くほど現在のそれと似ています。

これは僕の最初の年の田植えの写真です。一才の子どもを背負いながら手植えをしています。もちろん今はコンバインとかトラクターがあるので、機械農業がメインなのですが。しかし、肝心なのは、どんなに機械化されていても、農業の核心は、手足で土に触れて、種を播き、稲の苗を植えるということです。手作業、手仕事、あるいは足を泥にまみれさせるということ。そういう身体性というものがどれだけでも得がたいということ、秋田に来てから身に染みて感じました。

僕は東京で、人類学者の中沢新一先生のもとで学び、その頃から伊藤さんの本も読むことができました。学生時代には中沢先生のゼミで、山形や東京でも稲作を体験してきました

が、秋田ではそれを家族と一緒に、全面的に三六〇度、土や、風や、雨や、雪にさらされるという体験をすることができました。もしかしたら、三木もそうした直接的な体験をしたかもしれない。これは現代の流行である「スマート農業」とは全く異なる体験かもしれない。僕は重要なのは、この、身体的な直接性にあると思います。秋田ではそこから、本当に多くを学んできました。



「たそがれ野育園」の田んぼにて 写真：高橋希

穂仁王と藁細工

東北には「ほによ」という稲作の習俗があります。秋田市や潟上市のように、風の強い地域では、内陸部の羽後町あたりの稲架掛けのように、物干し竿のように稲を掛ける干し方ではなくて、田んぼの脇に一本の杭を立てて、そこで井桁に稲を組んで干すという干し方をします。これは横からの風に強い稲の干し方で、これを穂の仁王というところで「穂仁王」と呼びます。地域性が見えて面白

いです。

ファームガーデンでも、基本的には八十五年前の三木茂の写真と変わらないやり方をしていました。まあ、三木の撮影地は船川ですから、地理的にも潟上に近いんですけれども、昔とそんなに変わっていない技術が現存していることが見えてきます。例えば風で穀物を選別する唐箕からしという道具も、今、菊地さんのところでは木製の古いものを使っています。足踏みの風を起こして、籾をより分けていくことをやっていますが、三木茂の写真に写っているのと同じようなタイプです。

こうして稲という植物を育てて米を収穫し、ご飯や餅として食べる。さらに米を収穫した後は、食べられない稲藁いねわらを使つて細工をして、例えば人形道祖神やしめ縄のような神聖なものから雪靴、草鞋、俵、蓑かさ、笠のような暮らしの道具まで、いろんな道具を作っていく。こうした体験が秋田という地域のベースにあると思います。

太平洋戦争中の農業

三木茂の本で特に重要なことは、後書きに書かれています。どういうことかというところ、この本に描かれている暮らしは、戦

し、『野の鳥の生態』というシリーズを刊行します。

陸羽一三二号は、日本の農業史に必ず登場するような、画期的な稲の品種でした。宮沢賢治もこの開発に感銘を受けて、陸羽一三二号を取り上げた詩があります。賢治は、農業技術者で地質改良のために秋田に来て、石灰を売り歩いていました。伊藤さんの本の中でも紹介されていますけれど、岩手から秋田に来るという奥羽山脈越えの旅、鉄道で旅をしてきて、この陸羽一三二号を植えて食べるということが、当時の日本、歴史的な冷害が続いた昭和初期には非常に重要な近代化の指標になっていきました。こうした歴史を踏まえて、米に関する文化史を批評的に捉えながら、改めて秋田でお米を作るということとはとても重要な、ローカルから発信できる体験だと感じています。

秋田の発酵食文化と魚類供養碑

秋田には保存食や発酵食品の文化があり、それが信仰と結び付いているという状況があります。例えば五城目町では、山王山高性寺という大根の絵馬が奉納されているお寺があります。こういった蘿蔔根らふこんの絵馬はなぜ奉納されるのかというと、生命力の象徴になって

争の産物でもある、ということです。

「今日わが大日本帝國は、光輝ある三千年の歴史を賭し、米英撃滅に一切をあけて戦つてゐる秋、農民も亦銃後にあつて食料増産の戦ひに挺身してゐるのである。」

まさに、その時期にこれが作られていたという、歴史的な重い事実があります。

「今こそ日本農民は父祖傳來の血を湧きたたせ、一粒の米、一個の芋をも、國家に供して土に生きる決意を漲らせ、父祖から受け繼いだ農に誇りをもつてゐるのである。」

昭和一八（一九四三）年、当時はこういう感覚が、決して珍しいものではなかったと思います。戦時のエモーショナルな感覚ですね。前線で戦っている兵隊だけではなくて、彼らに食料を供給する、そのバックヤードとしての農村も戦争を担っている。兵士に食糧を送るという崇高な使命を帯びている決意表明です。民俗学という学問の成果が、國家に動員されていく証でもあり、雪国秋田を象徴化していく一つのドキュメントにもなっているわけですね。二つの大根が、エロティックに絡まり合っているのは、実は聖天さんの象徴ですね。

聖天しょうてんさんは、歓喜天かんぎてんという密教の神様の別名です。もともとは、インドでバラモン教時代から信仰を集めてきたガネーシャという神様を、大乘仏教を経由して日本に導入したものです。奈良の生駒聖天や浅草の待乳山聖天が有名です。聖天さんは顔が、象の顔をしていて、雄雌の象が抱き合つて、エロティックに絡まり合っている。男鹿の真山神社にも、神仏習合の光飯寺ひかりいでらが祀っていた歓喜天の祠が今もあります。それは性行為や食することなど、生きること否定するのではなく、肯定しようとする庶民信仰をベースにしています。こうした歓喜天信仰が特に真言宗のお寺には残っていて、大根絵馬を供える習慣にも結びついているようです。これが「いぶりがつこ」のような漬物文化の底流にある、つまり冬にも美味しく食べられる発酵食品につながっています。

五城目には五〇〇年以上続く朝市があつて、今も市の立つ日に行けば、海側には魚の店、山側に行くとキノコや山菜の店が多いようです。朝市通りの端つこに福祿寿酒造が

ます。秋田は大東亜戦争の兵士への供給源としての役割を担い、「銃後の守り」の要地でもあつたわけですね。

同じ時代、一年ほど前に、寺尾博という農家学者が、「わが国においては稲もまた大和民族なり」ということを言っています。これは藤原辰史さんの『稲の大東亜共栄圏』にも引用されているのですが、秋田の大曲にある農商務省農事試験場陸羽支場で働いていた、寺尾博の言葉です。同じような感覚があつたとみていいと思います。

寺尾博は、仁部富之助という農家学者とチームになって、一九二二（大正一〇）年に陸羽一三二号というお米の品種を開発しました。「陸羽二〇号（愛国）」と「亀の尾」を掛け合わせた品種です。陸羽一三二号は、冷害に強く、しかもおいしいお米ということでも長い間日本の農業を支えてきた画期的な品種でした。そしてコシヒカリとかササニシキとか、その後に出てくるあきたこまち、サキホコレは、この陸羽一三二号がなければできていないわけです。寺尾の共同研究者であつた仁部富之助は、「日本のファールブル」といわれる卓越した鳥類学者でもありました。彼は、農業試験の合間に鳥の観察に熱中

あつて、見学をさせていただくと、「良イ歌ヲ大ニ歌フベシ」という、お札が壁にあります。これは時計がない時代に歌の回数で權入れを数えるためであり、良い酒造り歌を歌えば歌うほどおいしくなっていくという意味もあるのでしょう。

福祿寿酒造のある朝市通りの反対側に、高性寺があり、市神様が祀られています。中世の記録には「虹の立つ所に市を立てる」という記述がたくさんあります。それは市場の交換が、虹が象徴する聖なる世界に関わってきたからです。獲つてきた山海の産物は、市神様にまず捧げなければならぬ。自然界から授かつた山海の幸は、そのまま売買できる経済的な対象にはなりません。それをまず市神様に捧げて、そこでようやく貨幣価値に交換できるようにする。だから朝市通りの入り口に市神様があつて、反対側に酒蔵があるということとは、必然的な意味があるということです。つまり、食文化の極みであり、神聖なものでもある酒造の醸造文化と、市神様が、朝市を守っているということになります。

秋田の発酵食文化といえば、ハタハタ寿司や、しょつづるのことも忘れるわけにはいきません。冬季にハタハタが産卵のために接岸

するということは、長らく秋田の県民のアイデンティティでした。しかし、最近はなかなか獲れなくなつて、ハタハタは希少魚になつてしまいましたね。また、八郎潟も戦後の復興期に干拓されて、ほとんどが広大な農地に生まれ変わりました。男鹿半島の入り口、男鹿大橋のたもとにある通称「ハタハタ神社」には「雷魚大供養」という供養碑があり、海の魚たちの魚類供養碑が立ち並んでいます。八郎潟側の八龍神社には、小魚やボウなど多くの淡水魚の供養碑が並んでいます。八郎潟周辺は、秋田でもっとも供養碑が多い地域の一つですが、かつては男鹿半島でもハタハタを大量に水揚げし、発酵食品の材料にしてきました。魚類供養碑は、かつて秋田の食文化を支えていた魚類たちとの関係を後世に伝えるものです。

「東北」を再発見する

秋田と中央との関係で考えると、秋田はかつて、蝦夷といわれる野蛮な土着民族が住む日本国家以前の歴史を秘めた場所である、と考えられていました。古代国家による内的な植民地だと考えられてきたわけです。それは形を変えて近代まで続いてきた思考である、と言えそうです。だからこそ二〇一一年三月十一日以降「東北」という言葉が頻繁に登場

することになりましたけれども、復興の名の下でいろいろな矛盾が吹き出してきました。

社会学者の山内明美さんが『子ども東北学』という本で、東北は、東京のような大都市へ、コメも自然資源も、兵士も、若い労働力や電力も、そして自動車の部品も、あるだけのものは全て出し尽くしたと書いています。秋田の若者たちも女性たちも、東京や他の大都市に出稼ぎに行くという時代が長く続きました。現代の人口流出や高齢化は、決して秋田という地域だけの問題ではなく、こうした地方によつて支えられてきた大都市や中央集権的な国のあり方の問題でもあります。

そういう地域であるからこそ、東京のような大都市では見えない何かが見えてくることはあると思います。歴史学者の高橋富雄氏によると、東北には二つの歴史的言説があったそうです。一つは文学の国、ロマンの国、芸術の完成が期待されているところの歌枕の世界。歴史的に詩と共にある土地というふう

うとこちら側を行き来するような視点が、北東北のさまざまな文化の中に生き残っています。例えば、ここには神話や伝説と共存する歴史という次元があり、それが膨大な芸能や工芸を支えています。国家的な歴史の外にあり続け、決して飼ひ慣らされない、まっろわざるものたちの生きた痕跡が、東北には残っています。ですから、高橋富雄氏が書いたように、東北は、歴史の最初から実は「最後の場所」であり続けた、という特性を持っているのではないかと考えています。

菅江真澄と祖先的視点

今から二〇〇年ほど遡る江戸時代後期に北日本を旅した菅江真澄という人がいます。真澄は当時、故郷の三河からはるばる、信州、東北、蝦夷地（北海道）へと旅を続けた旅人で、特に秋田には一番長く滞在し、この地で亡くなりました。彼は観察した景観や習俗を、図絵という形で残したのですが、彼が実は松尾芭蕉を慕つて東北にやってきたということは「秋田」に書かれています。真澄の図絵は、フィールドワークの観察記録や省察をテキストだけでなく絵画、イメージで描写したという点でも現代の芸術人類学に通じるマルチモータルな試みだったと思います。

菅江真澄の図絵は、秋田県立博物館に保存されていますね。ほぼ同時期の秋田蘭画は美術館で保管されますが、菅江真澄は博物館に記録・保存されるという棲み分けがあります。真澄は「博物画」で、蘭画は「美術」に分類されるという眼差しは、実はとても近代的な制度に過ぎません。人類学者のジェイムズ・クリフォードはこうした分類制度を「芸術Ⅱ文化システム」と呼んでいますけれども、有象無象のものを専門家が選別して、ここから先が美術であるという形で、美術館で保存していく。あるいは、ここから先が文化財であるということと博物館に収蔵していくことになりました。それが近代という枠組みをつくってきたわけです。

しかし、この枠組みは絶対的なものではありません。秋田公立美大と秋田県立近代美術館が共同で開催した「ARTS & ROUTES——あわいをたどる旅」という展覧会（2020-21）ではこの制度をシャッフルして、美術の文脈で真澄を評価し、現代のアーティストたちの応答を紹介しました。同様に、埋蔵文化センターや博物館から考古学・歴史学のアーティファクト（文化財）を借用し、複合的なアートとして位置付け直しました。秋田のように、美術館で、現代アートの作品を展示す

「みちのく」というのは「道の奥」、つまり政治的に組織された範囲の外にあるということ。政治がそこまで及び得ず、国になり得ないまま外に放置されているから、道の奥なのであると高橋氏は書いています。全ての東日本を包み、これを終結させる、奥深いターミナルが東北だと。だからこそ、ここから新しい歴史をつくつていかなければいけないというのが、一九七〇年代に高橋富雄氏が考えていたビジョンでした。

このビジョンはのちの研究者たちによつて受け継がれていきます。「東北学」を継承した民俗学者の赤坂憲雄さんは「いくつもの日本へ」と表現していましたね。日本は決して単一民族・単一言語の国ではなく、多様な地域の歴史を持った複数性を秘めているのだ、ということ。僕はそれに対しては異論を持つており、あえて「いくつもの非日本」という表現をしています。というのは、西日本やヤマトの文化がやって来る前の蝦夷の文化は、「いくつもの日本」ですらなかつたからです。

アイヌ語地名が残り、稲と鉄によつて拡張する巨大な日本という国家に組み入れられる前の境界が秋田にはあつて、その城柵の向こ

ることが難しい地域では、県立の美術館や博物館の視点をシャッフルして、互いの成果を交換することに大きな意味があります。そこで重要なのは、近世から近代にかけての二〇〇年という時間をとらえ直す、ということです。

秋田市文化創造館は、まさにこの試みを拡張する施設として、美術館でも博物館でもない施設として二〇二一年に開館しました。横手の「ARTS & ROUTES」展と同様、開館記念ではキュレーターの服部浩之さんが生活と表現が交わる場所として「2000年をたがやす」という展示を監修しました。二〇〇年というのは直接知っている親族がもういない世代間隔です。アメリカ先住民の掟では「今から七代先のことを考えて物事を決定する」という長期思考がセットされていますが、これはほぼ二〇〇年先のことを考えて生き



「ARTS & ROUTES——あわいをたどる旅」会期：2020年11月28日-2021年3月7日、会場：秋田県立近代美術館

る、と言い換えることができると思います。「二〇〇年後の世界」というのは自分がいなくなつて、自分の知っている人ももう死んでしまった世界をどうデザインしていくのかということになります。同様に、二〇〇年前の菅江真澄の記録を読むことは、自分の直接知らない祖先の世界から学ぶ、ということ。それは、その世界と今の現在が底流でつながっていることに気づき、つぎの二〇〇年にバトンをつなぐことでもあります。

秋田の超領域性

菅江真澄の視点は、単に過去に生きた祖先たちの視点をよみがえらせるだけではなく、異邦人や旅人の視点から秋田を見つめ直すことにもつながってきます。例えば現代の秋田の文化として評価されている人形道祖神やナマハゲのような習俗は、どちらも菅江真澄によつて記録され、イメージとして描かれています。

秋田県立博物館に行くと、学芸員さんが真澄の絵を示して「これがファーストナマハゲです」「これが最初の人形道祖神の絵です」と解説してくれるはず。菅江真澄は、現在も続く秋田の民俗行事を自身の目で観察し、記述し、描きました。そう考えると菅江

とんどの考古博物館では、新聞紙を使つてそれらを包装し、保管していることに気づくわけです。

新聞紙というのは最も簡単に手に入る、安価な梱包材です。そもそも単価が安くて、読んだ後はたいてい廃棄される。公共施設ではゴミになつてしまうので、梱包材として再利用可能で、素材的にもカケラを包むのに適している記録メディアです。土器を保存するにはちょうど適しているんですね。

しかし、それだけではないのです。土器の表面には、数千年前の縄文人の手で縄目紋様が刻まれてきました。同じように、実は新聞紙にはたくさんの情報がプリントされている。土器に直接刻まれている情報を読み解いていくのが考古学者とするならば、写真家はそれを包んでいる、あるいは背景になっている新聞も同じ情報として読み解けるので



田附勝著『KAKERA』
T&M Projects 2020年

真澄がやってきたことは一〇〇年後の後継者である柳田國男や、そのさらに一〇〇年後に生きた私たちの生に直接結びついています。例えば、菅江真澄はいわゆる縄文土器の紋様を記録して絵に描いています。真澄から約一〇〇年後に、大森貝塚を発見したエドワード・モースが報告書に「cord marked pottery (コードマーク・ポタリー)」すなわち「縄目模様の土器」と書いて、そこから「縄文土器」という言葉が生まれました。しかし、実はその一〇〇年前に、既に同じ意味を持つ「縄形」という言葉を使つて、菅江真澄は北東北で出土した土器を記録していました。

今ではこれが考古学の対象になり、人類学や民俗学とは棲み分けをしています。絵画は美術大学で学ぶような、専門的なものだと考えられています。菅江真澄はこうした近代的な学問の制度や分類を超えた、現在の言葉でいうと超領域的・複合的 (trans-disciplinary) な視点を持った、横断的な知性の持ち主であつたと言えるでしょう。僕が勤めている秋田公立美大では、これを現代に取り入れるために「複合芸術 (Transdisciplinary Arts)」という領域を研究する大学院を創設しています。今、菅江真澄の視点を受け継いでいこうとするならば、われわれはそこに芸

はないか。数千年前の縄文人たちが作つた記号と、明治・大正・昭和・平成の新聞に刻まれたさまざまな写真やニュースというものが記号化されて残っている。そのすべてのレイヤーを、時間と生の絡まり合う「写真」として表現できるのではないか。ここから田附さんの「KAKERA」というシリーズが始まりました。これは「時層」をめぐる、いわば列島の写真史なのです。

未来の考古学者は、写真家の田附さんも、地方の埋蔵文化センターの考古学者も、別々のやり方で、縄文人たちの生きた時間、つまり折り重なつた「時層」にコミットしたと考えるかもしれません。そうやって時間を超えていく、時層を再発見し、それに触れていくということが、実は日本中の地域の博物館の収蔵庫で起こっていることになります。

これは青森県の寺下遺跡のもので、教育委員会の会議室で田附さんと一緒に見せてもらった土器のカケラで、とつてもかわいいですね。美術的に見ても、デザインの見ても、とてもいいなと思うようなものが、展示されずにごろごろ転がっています。古代の人々の心や人格的なものを込めた表象が、あるいは日本列島の精神史そのものが横たわつ

術学的な視点だけではなく、考古学的・民俗学的・人類学的・宗教学的・歴史学的・芸術学的・デザインの学的な視点を越境し、さらに多くの専門性と掛け合わせて、複合的な視点を持つ必要があります。

私たちの目の前には、旧石器時代や縄文時代から受け継がれてきた、文字に記録されていない技術、なりわい、生命そのものが、残っています。これを現代の美術やデザインとつなげる必要があると思います。こういう試みは、深く西洋的な制度に規定された東京の美大、芸大でもどうしても立ち遅れてしまいがちです。秋田をはじめ、地方の美術館や美術大学でやらなければいけないテーマだと思っています。

「時層」を再発見する

最初にご紹介したように、僕は東日本大震災後の日本列島を、写真家の田附さんと一緒に旅してきました。彼のシリーズで「KAKERA」という、最近の作品があります。彼は美術館、博物館に展示された修復済みの土器や土偶ではなくて、地方の郷土資料館や考古館、埋蔵文化財センターのバックヤードで埃をかぶっている「土器のカケラ」を撮影して歩いたんですね。そこで、実はほ

ています。それが鉾石のように露頭し、われわれの目の前に少しかだけ現れてきている。

これはとても重要なことです。つまり、菅江真澄やモースが初めて土偶を見たとき、あるいは柳田國男や岡本太郎がそれを再発見したときと同じような喜びや驚きを、僕たちは追体験できる。例えば民俗学の創始者として有名な柳田國男も、佐々木喜善という遠野出身の若者から故郷の伝説を聞いてその土地の時層を再発見し、そのカケラを集めて『遠



土偶に秘められた「人格的なもの」の破片（青森県・寺下遺跡）写真：石倉敏明

野物語」という本にまとめました。だから、『遠野物語』を読んだわれわれは、喜善や柳田と同じようにシシ踊りや座敷わらしの話に出会うことができるんです。岡本太郎が縄文土器や秋田のナマハゲを通して再発見したのも、同じように現代につながる「時層のカケラ」だったのだと思います。

一つのテキストや一つの作品や造形を、歴史的なマスターピースだとか、動かすことのできない決定的なテキストとして読む近代的学問ももちろん大事なのですが、そこからもう一步進んでみる必要がある。それは、田附さんが地方の資料館に埋もれている土器のカケラの写真を通して触れたように、時層を発見し、触れてみることです。柳田や岡本太郎がそうしたように、今度はわれわれ自身が柳田國男になってみる、われわれが岡本太郎になつてみる、ということです。そういう学問が二一世紀には必要なんじゃないでしょうか。伊藤俊治さんの『秋田』はまさにそういう本です。そういう新しい超領域的な学問のあり方を、僕は伊藤さんや中沢新一さんから学んできたつもりです。

大日堂舞楽と太陽思想

「時層」の再発見は、縄文文化の新しい理
在してという繰り返しがあります。それに気づいたのは、学生時代、中沢新一先生の研究室の学生たちで鹿角に通つて、みんなで大日堂舞楽の短編ドキュメンタリー映画を撮つた時でした。

大湯環状列石に空間化された太陽エネルギーと大日堂舞楽の背景にある大日如来への信仰は、盛夏に行われる死者儀礼、祖先の霊と生者が一体になつて踊る、盆行事の踊りが存在しています。鹿角には毛馬内盆踊りという有名な盆踊りがあつて、これは大日堂から遠くない毛馬内地域で、月山神社のすぐ近くで行われるわけです。ここには月の信仰があります。さらに大日堂舞楽のほうでは、明治時代に廃仏毀釈で寺院が神社に変わつていったときに名称が大日靈貴神社に、祭神は大日如来から天照大神に変わります。さらに平成期には、東日本大震災の後に「鹿角のエネルギーを考える会」というのができて、面白いことに「エネカン」といわれている人たちが太陽エネルギーでソーラーカーを走らせたりしています。

縄文時代の太陽信仰と、平安時代の大日如来信仰と、明治以降の天照信仰と、さらに二〇一一年以降には、再生可能エネルギー

解に発展していきます。例えば世界遺産として認定されている鹿角市の大湯環状列石には二つのストーンサークルがあつて、その中心点が夏至と冬至のときに一つの線に結ばれます。その先に日の出、日没の場所があるからです。ここから、当時の縄文人たちが、明らかに太陽の観測をしていたと考えられています。縄文後期の、今からおよそ四〇〇〇年前に住んでいた人たちが、配石によつてこういうランドスケープをデザインしていたということは驚くべきことです。

さらに鹿角市には、古墳時代（西暦五三三年）に創られたという伝承がある大日堂があり、七一八（養老二年）の再建時から、大日堂舞楽という厳冬の舞楽が伝承されています。この一帯は、今から約一三〇〇年前の人たちが大日如来という太陽を主尊格とした仏の信仰を育んでいた場所で、秋田の大館から鹿角、岩手県の大幡平にかけて複数の大日堂があります。これらの大日堂は「だんぶり長者・吉祥姫伝説」と関わりを持つていて、一部分は八郎太郎伝説とも関わりがあります。吉祥姫は、だんぶり長者の娘で、継体天皇の妃となつたという伝説の女性です。

八幡平にはこれらの信仰の中心となるお堂

に関する新しい動きが同じ鹿角市の周辺で起こっている。表向きの表現形は異なつていたとしても、この地域には通底する自然エネルギーへの関心が持続しているようです。同じように、だんぶり長者伝説に出てくる大地から溢れる酒というモチーフも、神話学的には大地の底に流れる生命力や、この地域に豊富な地熱エネルギーや温泉の表象として読み解くこともできるかもしれません。

「朽ちていく神」と再生思想

秋田に潜在する「時層」は、時間という次元を、歴史とは異なる仕方で見覚えることを可能にするでしょう。例えばそれは、公式の記録や歴史に残されてこなかった時間を思い出させてくれます。時層は、季節的な体験によつて繰り返されていきます。それは、毎年作り替えられる藁人形の神様、人形道祖神の造形にも刻まれていくのではないのでしょうか。それは、公式の歴史記録には残らない民俗の記憶というものを、その造形イメージに刻み込んでいるのではないかと、僕は考えています。

人形道祖神は、秋田の内陸部、特に米代川や雄物川の源流域に近い穀倉地帯で、今も継承されています。これは空間化された境界を

があつて、毎年一月二日の深夜に四つの集落から「能衆」という舞手たちが集まつて、現地で「ざいどう」と呼ばれる舞楽を舞います。『秋田』には、石川直樹さんの素晴らしい写真が掲載されています。九演目が伝承されるうち、「駒舞」は能衆が震えながら馬を動かすトランス的な儀式の要素があり、太刀を持つて舞う「鳥偏舞」は岩手県花巻市の早池峰神楽とも共通する要素があります。「鳥舞」は稚児の美しい舞で、「五大尊舞」では、だんぶり長者伝説の夫婦を表す胎蔵界と金剛界の大日如来と密教の五大尊が登場します。「工匠舞」は吉祥姫の埋葬場面を表す重要な演目です。

重要なことは、四〇〇〇年前に生きていた縄文時代の人たちと、一三〇〇年前に大日堂舞楽を伝えたと言われる奈良時代の人たちは、直接的な関わりはないにもかかわらず、同じように太陽エネルギーをめぐる思想を儀礼化していることです。信仰の連続性もありません。それにもかかわらず、太陽への関心が持続しているということ。折口信夫ならば「間歌遺伝（アタヴィズムⅡ隔世遺伝）」といったと思うのですが、太陽エネルギーへの関心が時代を超えて、ある条件のもとに吹き出して、また潜在して、吹き出して、また潜

守る神ですから、村落のような地域共同体の外れ、辻や川沿いや道端に立つて、疫病の侵入を防いだり、地震避けの機能を担うものです。これは毎年「人形立て」の行事によつて設置されるのですが、実は朽ちていくことが前提になつていくわけですね。まず、毎年の季節の循環に沿つて農作業をして、その副産物である藁を使っている。つまり、無料で手に入る。わらしべ長者のようにゼロ円で手に入る藁が神様に化けていくということになります。しかも、季節とともに雨風にさらされて、朽ちていく。コメが一種の通貨として国家の税制や貨幣価値を担っていたかつての日本では、藁はいわば地域通貨として、コメとは異なる価値を担ってきました。藁も米も、社会の人間と人間をつないでいくという意味では、経済学者シルビオ・ゲゼルがいつている「朽ちる貨幣」という、オルタナティブな地域通貨の経済思想なのではないかということとを、『野生めぐり』という本に書きました。

この神様は、実は美術大学の入試デッサンでモチーフになるような、ギリシア・ローマの光の神、石の神、劣化しない神、朽ちない神様、超越神とは明らかに異なります。また、ヘブライズムの伝統が扱ってきたような、表象不能な唯一神とも、明らかに異なり

ます。そうではなく、風雨にさらされ、ボロボロになって腐っていく神、朽ちていく神様です。美術という制度はとても狭いもので、こうした目の前にあるモチーフが見過され、わざわざ西洋的な神聖なイメージが目標とされていたりする。その本末転倒を超えて、朽ちる神の姿に目を向ける必要があると思います。

哲学的に考えれば、世界を超越する神がヨーロッパのイデアルな表象だとすれば、それはどこまでも理想化された人間身体像、しかもアジア人ではなく、欧米人のそれをスタンダードとするようなイメージがそこには付随します。これに対して、徹底して世界に内在する神、土と風の神、ボロボロに朽ちる神が人形道祖神であり、草と木の、あるいは土に、泥にまみれた神であるということになると思います。これは単に災害避け、地震避け、疫病避けの願いや祈りを含みながら、大地や土に還り、またそこから立ち上がる自然の力、つまりは再生の力を表している、と解釈可能です。同様に、秋田のお隣の津軽地域に行きますと、餓死者の霊が転生して稲虫——ウンカやイナゴ——に転生して稲を食べに来るという伝承があつて、「虫送り」という藁蛇の表象へと変化していきます。いずれ

も、風雪にさらされ、土に還っていく藁の造形物です。

「深い時間」に迫る 芸芸としてのアート

男鹿半島のナマハゲも、このように大地から生まれ、大地に還っていくものの一つです。もちろん来訪神としてのナマハゲは、海から来る、真山から来る、または太平山から降りて八郎潟の水を渡ってやって来る、などと地域ごとに異なる伝承があるのですが、やはり藁製の「ケデ」「ケラ」を身につけており、それを集落の外れや、神社の柱、御神木などに巻きつけて雨風や雪、太陽にさらし、ボロボロになって大地に還っていくように、つまり朽ちるがままにさせるのです。

人形道祖神も、虫送りの藁蛇も、あるいはナマハゲのケデも、一年も経つとやがてボロボロに朽ちていきます。虫送りの蛇は特に、腐った怪物のように不定形なものになっていくのですが、その先にはさらに解体されて、土や風そのものに還元されていくことになります。では、土に還る時間とは、何か。これが、一種の人間を超えた時間、ディペシュ・チャクラバルティのいう「ディープタイム」——深い時間——ということです。いくつもの時層を含んでいるような、地質学的な時間。ある

いは人間的尺度を超えた地球そのものの時間、そこにはあります。

秋田にも「道切り」のお祭りがあつて、由利本荘市の東由利地方にも、藁蛇をつくって不吉なものや災害を遠ざける慣習があります。この間、田附さんと夏に撮影してきて、この道切りのすぐ横に、道路が崩壊して、土砂崩れが起きて寸断された道路があるんです。つまりこれは合理的な理由がないわけではなくて、ここから先は土地が脆弱であるということを示すサインでもあることもありま

す。そういう意味では実利的なサインであると同時に、一種、目に見えない世界にもつながっているという呪術的なサインでもあるという、二つの要素があるわけです。どちらも「深い時間」に触れているものであり、これによって人間は、なんとか生き残ってきた、と言えるでしょう。

このように土に還る、風雪にさらされる、ボロボロに朽ちてゆく、という要素は、どれも直立する人形道祖神が立てなくなり、大地に倒れて分解されていくように、やがて立てなくなり、這いつくばって土や雪に溶けていくような何か、を象徴しているようにも見えます。秋田の前衛性を発揮する代表的な

アーティスト、土方巽もまた、このような意味で「深い時間」に触れ、分解されることを潔しとした一人だった、と思います。土方は「世界のダンスはまず立つところから始まっている。ところが私は立てないところから始まったのである」「私の舞踏は泥から生まれた」と語りました。例えば、バレエのようにつま先で大地の上に立ち、天に向かって美しく跳躍するようなダンスに対して、土方の暗黒舞踏は、言ってみれば土から生まれてそこに還ってゆくダンス、いわば「朽ちてゆく身体」のダンスを世界に広めたと考えられるのではないのでしょうか。

天に向かって跳躍するダンスは、最初から大地に立ち上がることが前提で、そこからさらに上方へ、天に向かって垂直的に跳躍します。ところが舞踏というダンスは、立てないこと、言うこと、足を引きずられることによって、まず立つことのできない赤ん坊や、寝たきりの老人、土を這う動物や虫たちの次元に近づいていきます。なぜなら、そこでこそ、大地と生命との垂直的交換が発生し、無生物が生物へ、生物が無生物に変容するよう大きな生成変化が起こっているからです。

土方の舞踏は、そこからさらに下方のマテ

リアルな世界へ、つまり田んぼの泥のように人間の足を深い実存へと引き摺り込み、物質へと潜り込みます。そして、そこから軽やかな風や水となつて世界を循環し、流動します。彼は写真家の細江英公と共に秋田の羽後町、田代で『鎌鼬』という有名な写真集を撮影しました。そこで田代の田んぼを駆け抜け、赤ん坊をさらって走っていく土方は、ある意味ではこの泥に足をすくわれながら、時には風のように地表を吹き抜け、駆け抜けていくという存在でもあるわけです。ですから、土方が宙を跳んだとしても、それは天国に向かって飛ぶのではなくて、大地の見えない次元に、より深く潜るためにそうしている、と言えるでしょう。それは、西洋的な不朽の超越性ではなくて人形道祖神的な超越性、あるいは大地に内在するもう一つの超越性といったものだと思います。一つの宇宙論でもあると思いますが、そういうものを内在させながら世界に羽ばたいていくという、惑星的思考というのはこういうものだと考えます。

先ほどから紹介している写真家の田附勝さんも、実は「朽ちていく写真作品」というものを秋田の上小阿仁村で実験していました。これは写真史的に非常に重要な作品だと僕は思っているのですが、二〇一三年



田附勝《みえないところに私をしまおう》「KAMIKOANI プロジェクト秋田」2013-2015

ギ文化を移入してきました。かつては何世帯ものマタギが暮らしていましたが、平成期には、そこで最後のマタギがたった一人で活動を続けていました。佐藤良蔵さんというマタギが、集団猟ではなくて一人でクマを仕留めるといふ、最後の名人だったわけです。この方を生前最後に撮影したのが田附勝さんです。トタンのマタギ小屋を造って、そこを小さな写真美術館に見立て、八木沢集落に暮らししている人々のポートレートを現像した写真作品の展示を、夏の芸術祭のあいだに数カ月行いました。

実は、田附さんのトタン小屋の展示は、他の作品と同様に撤去する予定でした。ところが展示が終わって、数ヶ月後に佐藤良蔵さんが亡くなってしまった。そこで、急遽解体を取りやめ、一年間扉を閉じたままにしておきました。僕はその翌年に鹿角で大日堂舞楽を見た帰路、一月二日に行ってみましたけれど、夏にやった芸術祭のときはまったく違って、小屋は腰まで埋まってしまうような豪雪の中にありました。シャベルで掘って中を覗くと、かろうじてトタンの壁に守られた写真たちが、少しずつ風雨や雪にさらされ、写真が退色していました。

それからさらに夏を迎え、一年の喪が開けたときに初めて扉を開けて、退色した写真を開放しました。それは、あたかも抽象絵画のようになっていました。ぼろぼろになった写真というのはなかなか見る機会はないと思います。しかも、それは意図的な作用ではなくてほったらかしにされていたものです。上小阿仁村の八木沢集落の湿度や風や雨や雪にさらされて退色していった。実際トタンに穴が開いてびしょびしょになっているほどでした。

ところが一番奥にある良蔵さんの遺影とも思われる肖像写真は、奇跡的に姿をとどめていたのです。二〇一五年に、これを再展示したときには真ん中に良蔵さんがいて、彼を取り巻く花のように、村の風景が見えてくるという展示になりました。偶然の要素が大きかったわけですが、まさに作家やディレクターの意図を超えたイメージとして、奇跡的な状況が作られていったのだと感じています。

これを秋田市のBYONG POINTという大付属のギャラリーに持ってきました。ホワイトキューブで展示をしたのが二〇一六年の、「みえないところに私をしよう」という四年間のプロジェクトを回顧する展示です。

た。良蔵さんが、祭壇のような場所に向かって手を合わせている写真が退色して、抽象絵画のようなイメージの中に人と頭骨が浮かび上がる。写真というのはもちろんあたかも目で見たような光景がそこにイメージ化されるわけですが、それが退色していくことによって、もう一度、物質の世界に返っていく。朽ちていく。死者の生きていた時間、彼の生と最後のマタギの世界にもう一度出会い直す、というとても美しい写真だなと僕は思っています。

この田附さんの作品は、僕は秋田の美術史において、非常に重要なものだと思います。このように秋田の「深い時間」に触れた作品を、秋田でまた見てみたいものです。秋田にはいくつもの美術館があるのですが、残念なことに、この重要な写真作品はどこにも収蔵されていません。秋田の県立・市立美術館には、昭和期の有名写真家のようにすでに評価の確立したものの、あるいは在野の秋田派と呼ばれる写真家の作品が所蔵されていますが、まだまだ限定的です。秋田の美術館は、秋田蘭画や昭和期までの作品だけでなく、現代の秋田に生まれた重要な作品、現存作家の優れた作品を収蔵できるように生まれ変わる必要があると思います。

コンタクト・ゾーンとしての秋田

八木沢集落では万灯火^{マンリウ}といって、お彼岸の日に火を灯して祖先の霊に供えます。このように死者を招き、供養する儀礼は秋田県全域に継承されています。これを一種のコンタクトゾーン（接触領域）として考えると、ハタハタやクマ、あるいは農作物の植物のようないろんな生き物たちとのコンタクトゾーンと、亡くなった死者とのコンタクトゾーンという両方の接触体験が、秋田という地域の精神性の根幹を作っていると僕は考えます。

ナマハゲのような来訪神が訪れる、家に還ってくる、というのはとても重要なことです。年がら年中ナマハゲにいられると困るわけですが、一年に一回、来訪神に来ていただいて、丁重におもてなしを受けて帰っていただく、ということですね。それによって常在神ではなく、大晦日や小正月のような時間の裂け目に現れる、一時的な来訪者としての神という存在が文化として生き残っていくこととなります。

岡本太郎が出会って衝撃を受けたのもこの文化でした。彼はパリでマルセル・モースという人類学者の弟子になり、わざわざ美術学科から転科して人類学者になってまで学んだ



田附勝《拝む人(みえないところにわたしをしよう)》2013年8月

人です。太郎はそうして学んだ人類学の知識を持って日本に帰ってくるわけですけど、そこで日本中を旅することになり、最初に目指した土地の一つが秋田だったということが、伊藤さんの『秋田』でも紹介されていますね。

太郎は男鹿でナマハゲと出会い、その生々しさ、野生味に溢れた造形に衝撃を受けます。このような視点はその後も脈々と受け継がれていて、近年では世界各地のアーティストが男鹿に来て、ナマハゲを見学しています。男鹿のミュージアム（なまはげ館）も素晴らしいので、僕も海外からアーティストや人類学者が来るとよく連れて行きます。ここで展示されているナマハゲの面のいくつかは、今も本番の日になると持ち出され、実際に使われているということにも驚かされます。

もちろん男鹿半島だけではなくて、秋田市の豊岩のヤマハゲや寺沢の悪魔はらい、にかほ市では小滝や石名坂のアマノハギ、赤石のアマハゲなど、小正月行事の中でさまざまな来訪神があります。石名坂のアマノハギの面は、一五〇年以上前の仮面だといわれています。太郎が出会ったような、訪問者を戦慄させるようなコンタクト・ゾーンは、今も秋田

には生き生きと継承されているのです。

伊藤さんの『秋田』という本もまた、こうした現実のコンタクト・ゾーンを可視化し、理解可能な形式に翻訳したものだと思います。この本を通して、僕たちは秋田という場所を理解するための新たなスタートラインを引き直すことができたと思っています。この本は、つまり秋田についての知識を勉強するだけではなくて、秋田という場所で共に一緒に生きる。あるいは秋田にあるさまざまな芸能や、ここに生きているさまざまな人間ならざるものと共に、もう一度自分の表現や自分の生活というものをつくり出してみる、そういうきっかけを生み出すような現代のスタートラインだと思います。

秋田から生まれる新しいアート

秋田には、他の地域ではもう消えてしまったような、惑星的な意味を持つ習俗や記憶が、まだかろうじて息づいています。こういう風土の中で今、若手のアーティストが頭角を現してきているということをご紹介したいと思います。

一人目は、僕が秋田公立美術大学の初年度に出会った一期生、永沢碧衣さんです。彼女

いていました。彼女が卒業後、阿仁地方のマタギ文化の理解を深めたいと狩猟免許を取りました。興味深いことは、そこで阿仁地域の深い伝統をもつマタギの方々が、女性である彼女を狩猟集団に受け入れ始めた、ということです。マタ

ギは原則的に男性しか山の中には入れないような厳格にジェンダー化された土着文化なのですが、永沢さんは、その文化を尊重しつつも、そこに非常にクリティカルな視点で入っている、女性でありながらマタギの狩猟に参加する、というユニークな立ち位置にいます。阿仁のマタギには他にも写真家、植物研究者、書店経営者、林業家など、興味深い活動を続けている若い兼業者が増えています。



菅原果歩《飛鳥滞在期》2021-2022年 写真：草薙裕

これから歴史を振り返るときに、永沢碧衣さんのような画家がマタギに狩猟文化を学んだということとは重要な意味を持つでしょうね。彼女はさらに、自分が住んでいる県南の横手市でも地元の猟友会に入って、矛盾に満ちた箱根によるクマの害獣駆除に参加しています。一方には、山の神様の違いとして神獣としてのクマを授かる狩猟文化がある。もう一方には、クマを人間の敵、害獣として駆除しなければいけない都市の現状がある。その二つの世界を行ったり来たりしながら、あるいは神獣と害獣に分離された二つの世界の両岸に引き裂かれながら、しかも彼女は自分が授かったクマの皮から膠（にかわ）を作って、それをういクマとクマの生きる山々の景観を描いている。僕がVOCA賞の推薦委員を担ったとき、彼女は狩猟したクマを描き切っていて、その

は、今の秋田を代表する作家になりつつあると思います。永沢さんは、在学中は魚を観察して描くことに熱中していました。卒業制作の『淵源回帰』という大作では、まさに産卵のために母川に回帰して、ボロボロになつて自らの生命が尽き果てようとする鮭の姿を描



永沢碧衣《山衣をほどく》2022年

絵は鬼気迫るものがありました。

VOCA展 2023 で大賞を受賞した永沢さんの作品は『山衣をほどく』というものです。ここには、実は、水害のシーンが描かれています。二〇二二年に描かれた絵ですが、その段階ではまだ秋田市の水害も、記録的なクマの被害もなかった。ある意味、二〇二三年以後の自然と人間の関係、目の前にある現実を見ずするような作品です。彼女の描く動物や自然の描写は、単なるノスタルジアの対象としての自然ではなくて、現在の自然であり、未来の自然でもある。彼女は伝統的なマタギの狩猟を学び、そこで得た技術も含めて世界観を構築しています。二〇二三年に六本木の21_21 DESIGN SIGHTギャラリーで行った企画展「Material, or」では、僕は企画委員の一人として「今回は、絵画ではない作品を出展してほしい」とむちゃ振りをしました。永沢さんはそこでも、冬眠中の動くクマ、そしてその時にクマが見ているであろう夢を映像化する、という挑戦的な作品で見事に応答してくれました。

もう一人、秋田美大を卒業した後に東京藝術大学の大学院に進学した、菅原果歩さんの作品を紹介しましょう。彼女は一〇代の頃から

らずつと鳥を観察し、リサーチをベースに鳥の写真やドローイング、フィールドノートへの記録などを続けている作家です。彼女もまた秋田の自然を観察し、それを独自のスタイルで表現しています。まず、彼女のフィールドノートが素晴らしい。秋田の鳥類と人間との間から見えてくるマルチスピーシーズ（複数種）の関係を観察し、エスノグラフィ的な視点でこれを写真や絵画などのイメージとして表現します。彼女は学生時代には日本海の孤島、飛島をフィールドとしていましたが、その後も日本列島の各地でフィールドワークを続け、興味深い作品を発表しています。彼女もまた、人間と自然の関係を根本的に捉え直しながら、フィールドとしての秋田から、新たな表現方法を編み出そうとしています。

「共異体」としての秋田

こういう若手作家たちが現れている中で、いま秋田から何を発信できるでしょうか。僕はこれを「共異体」といつています。「共に同じ体」と書く共同体ではなくて、「共に異なる体」と書く共異体。つまり異なるものがあるものか同化されることなく、互いに異なつたまま共存できる世界のあり方。秋田には確かにさまざまな社会的な課題があります

が、こうした共異性が共有されてきている、ということ。「共異体」の感覚や視点が、これからの世界では重要になってくるだろうと考えています。

人間は、人間以外の者たちとの生命の網目の中から、食料や資材や燃料を受け取り、限られた生を更新しているという基本的な生活があります。これを秋田のマタギや農業をやっている方も含めて、大事にしている方は多い。そういう場所で、秋田では日本で一番多くの無形文化財が育まれ、世界遺産やジオパークが継承されています。そして、激減する人口、少子高齢化と若年層の流出という現実の中で、自然と人間の関係に大きな変化が発生しています。

東北の生活文化には、互いに生活圏を共有する鳥獣虫魚を含む生物環境が、それ自体が一個の他者として存在している、という感覚があります。つまり、人間ではないものたち、死者や祖霊、来訪神や人形道祖神のようなものたちが、それぞれ現実的なものとして、他者化されているというのが、秋田の芸能や伝承の特徴であると思うのです。この山野河海からいただいた恩恵に対して、秋田の人々は祀り、祈り、感謝し、返礼する。これ

が一種の贈与のサイクルをつくっていく。こうした他者性に対する態度を、AIやデジタル環境が社会を変えていく現在の中で、自然物と人工物の交ざつた世界のただ中で認識し、再構築するというのが、現代の挑戦だと言えるのではないのでしょうか。これを、僕は「共に異なる主体同士の関係」として捉え直し、共異体の人類学を発信したいと考えています。

共異体を感じ、構築する格好のフィールドとして、もう一度秋田を再発見することができるのではないか。そのための重要なテキストとして、伊藤さんの『秋田』から多くのことを学びました。秋田は環日本海にあつて海と陸で北方世界へとつながる扉であり、人間的な共同性と共異性を併せ持つハイブリッドな文化の揺籃です。秋田はそれが見えやすい、「異種と共に生きる」のに格好の地域であると思います。人間以外の種について想像を巡らしつつ、人間以上の世界にコンタクトする場所という意味で、秋田を再び見いだすことができるのではないのでしょうか。

本稿は、当館にて二〇二四年一〇月二六日に行われたラーニングプログラム「秋田京都惑星特急便」での講演を元に再構成したものである。

「太平山系 失われた石像」をたどる旅

佐藤成樹 × 佐々木民秀

石像写真 畠山秀雄

写真集『太平山系 失われた石像』を刊行した佐藤成樹氏と、秋田の山に精通する佐々木民秀氏のお話とともに、信仰の山・太平山の今昔をたどる。太平山の登山道や廃道にある石像約一〇〇体を撮影したのは、故・畠山秀雄氏である。

佐藤成樹氏のお話

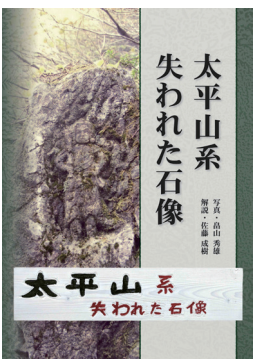
畠山秀雄さんとの石像探し

佐藤 本の紹介をさせていただきます。私と畠山秀雄さんの二人で出版した写真集が、『太平山系 失われた石像』です。平成六（一九九四）年に工藤武則さんが出版した『太平山系 埋もれた石像』が元になっております。この本は協力者のみなさんと太平山の石像探しをして、一冊にまとめたものになります。

す。残念なことに、工藤さんは早くにお亡くなりになってしまいました。一度だけ、「登山用品の店かもしか」という工藤さんの大町のお店に本を購入しに行つたことがあります。工藤さんは郷土史や山の歴史に詳しく、勉強させていただいた記憶があります。

その約三十年後に、偶然太平山で畠山さんと出会いまして、さまざまな助言や写真をいただきながら、一緒に石像探しを行いました。

実際に畠山さんとお会いしたのは一回だけです。畠山さんは長期の病氣療養中で、やりとりはほとんど電話と、あとは私が手紙やUSBをご自宅の郵便受けに投函する。何日かすると電話がかかってきて、できたよつておつしやるので、郵便受けに取りにまた行きます。一回電話をするといく二時間、月の電話代が一〜二万かかるようなときもあつて。

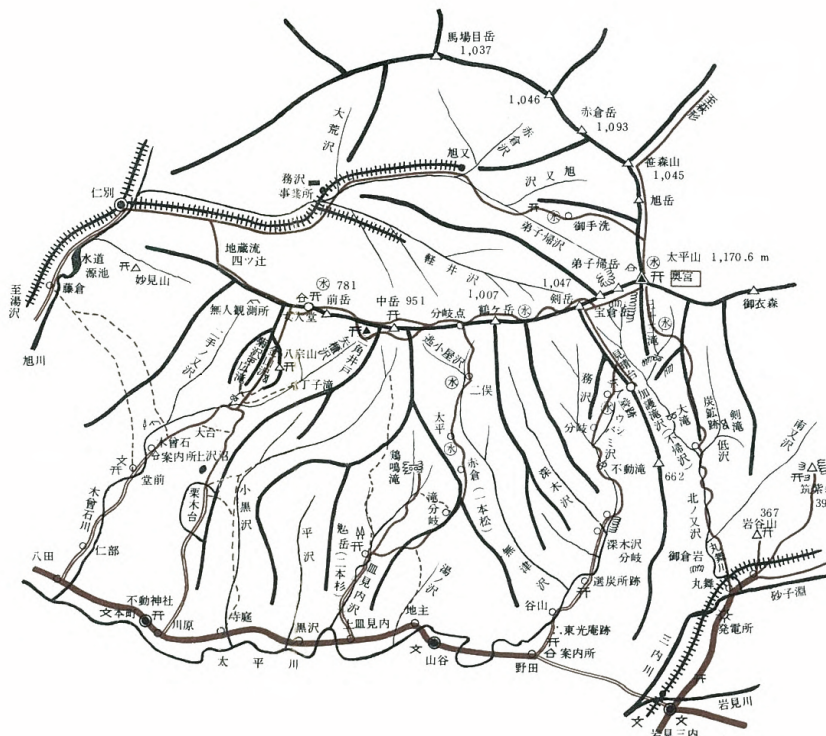


『太平山系 失われた石像』（2024年）
写真：畠山秀雄 解説：佐藤成樹
私家版

畠山さんは二〇二四年に亡くなりましたが、あの声は今でも頭の中に残っていて、いまだに亡くなったのが信じられません。

本来であれば、畠山さんがお元気なうちに、令和五（二〇二三）年に本を出版する予定でしたが、同年七月の豪雨災害で太平山の中が荒廃し、被害状況の確認や、もう一年かけて石像の再調査をし、その上で出版したのが今回の写真集になります。

太平山の登山コース



作図（昭和38年頃）：佐々木民秀

佐藤 太平山三吉神社の奥宮があるのが太平山の頂上・奥岳です。秋田駅周辺から見えるピークは、中岳や木曾吉山と呼ばれるピークです。今日は、秋田市太平の野田口から、奥岳に向かっていくコースの石像について説明させていただきます。太平山に登る主要なコースは四つありますが、この野田コースは太平山三吉神社にとって昔から表道や表参道といわれる参詣道です。

もう一つが仁別・国民の森の旭又コースになります。こちらは昔から裏道や裏参道といわれています。また、おそらく太平山の信仰登山が始まった頃は、秋田市太平の八田から木曾石を通って、金山滝、前岳、中岳に行くコースが中心であったと考えられます。中道と呼ばれていた木曾石コースです。もう一つは、岩見三内の丸舞コースです。この会場には、太平山に登山されている方も多いかと思いますが、お伝えしたいのは、太平山は、今も信仰が生きている山であるということです。

今も太平山三吉神社では、七月一日が開山祭ということで、広面赤沼の里宮からご分霊を太平山奥岳の奥宮までお遷ししています。そして九月一七日には閉山祭をおこない、奥宮からご分霊を広面赤沼の里宮にお

佐藤 本書に掲載されました石像について説明させていただきます。

こちらは、旧太平山三吉神社顕勝地の、【十四番碑・阿弥陀如来】（文化八年・消失）と【如意輪観音】（文化八年・消失）になります（写真1）。今はもう完全に失くなってしまいました。私も何回かここに入って探していますが、見つかることができていません。もともと大きい杉の傍らにあったそうですが、伐採され、たぶんそのときにどこかに寄せられてしまったのでしょうか。



写真1：十四番碑・阿弥陀如来（文化8年）消失（右）、如意輪観音（文化8年）消失

還しています。※現在は豪雨災害の影響により奥岳の奥宮と参籠所が閉鎖されているため、臨時開閉山祭として別の日程で行われている。

旭又コースが一番登りやすいコースでしたが、令和五（二〇二三）年の豪雨災害により完全に通行止めになっていますので、今登れるのは、野田コースと金山滝からの木曾石コース、そして丸舞コースの三つになります。

日帰りなら八、九時間くらい歩かないと帰ってこれない山です。市民の皆さんからすると、近いようで、大変遠い山になってしまっているのが太平山の現状になります。

野田コースの石像



写真2：十七番碑・阿弥陀如来（文化8年）一部流失

この【十七番碑・阿弥陀如来】（文化八年・一部流失）は建立年が一八一一年で江戸時代になります（写真2）。菅江真澄が太平山に入り『月のおろちね』を著していますが、それが文化九（一八一二）年ですので、菅江真澄が



写真3：巳待供養塔（安永3年）令和5年流失

太平山に入った頃には既にこの石像がありました。『月のおろちね』の中にも、さまざまな石像を見たという記録が残っています。この石像があることが、江戸時代に菅江真澄が歩いた道であるという証しでもあります。

さらに進んでいくと、【巳待供養塔】（安永三年・令和五年流失）という『月のおろちね』にも書かれている、巳待信仰の石像があります（写真3）。この写真が撮られてから数年後、大雨の影響ですぐ手前の太平川に碑面を下にして沈んでしまいました。私は何回も行ったり来たりして川の中に入り、頭の部分が特徴的なのでようやくこの石像だろうというところまで見つけました。

十人くらいしないと引き上げられない大きなので、そのままにありますが、山の

会の方たちに協力していただけないかなと。引き上げて起こしてみたら、ただの石だったら困るなと思い、ずっと躊躇しています。令和五（二〇二三）年の豪雨災害でさらに流されてしまつて、それらしい石はあるのですが、実際にこの石像なのかどうかは分かりません。菅江真澄が記録している石像の一つなので、機会があれば、皆さんにお声掛けをして、ロープを掛けて引き上げたいというのが、今後の私の課題というか夢です。

【廿二番碑・聖観音】（文化八年）はもう少し先に行った所にあるものです（写真4）。この石像も探すのに大変苦労して、何回も山に入りましたが、結局見つけれませんでした。ちょうどその頃、秋田市の文化財保護課でも石造物調査をやっていました。いただいたデータの中に、この石像のGPSデータが



写真4：廿二番碑・聖観音（文化8年）

入っていました、それを元に再度探しに行きました。

ここはもともと登山道でしたが、近年の水害で登山道が流され河原になっていて、その河原の中に石像が一個ぼつんと。秋田市の文化財保護課の方は、よくこれを見つけたなと思いました。普通であれば、ただの石にしか見えませんが、その記録を取っていただいたことによつて、見つけることができました。

じゃあ、そのままそこに置いておいていいのかと。文化財保護の観点からすると問題もありますが、河原の中から、水は来ないだろうという土手の斜面に移設しました。ピンクのテープを目印につけてありますので、いろんな人に、ここにあるよ、と話すようにしています。

なぜかというと、私一人しかそのことを知らなければ、いつかはなくなつてしまいます。皆さんにここにあるということを確認してもらふことによつて、次の世代につなげていけるのかなという思いで、印を付けたり、極力一年に一回は行つて、どうなっているのかなと観察し続けています。これは私たち山の人間と、秋田市の文化財保護の行政の方

と、一緒になつて守ることができた石像の一つです。

不動滝と地藏菩薩

佐藤 続いては、【不動滝】です（写真5）。禊をする場所でもあります。昨年の秋に著名な石川直樹さんという写真家が秋田に来て、太平山に入つた（二〇二四年一月三日）時のことを書いた創造館のニュースペーパーが今日置いてあります。そこにも不動滝の写真が一枚載っています。

「不動さん」を祀っているから「不動滝」だろうと思つていたので、昨年の秋に入つたときに気がつきました。雨が少なく水量がこれほどなかったときです。写真は、雨で水量が多いときで、水が少なくなると、滝



写真5：不動滝 修験者が水垢離を行った神聖な場所 撮影：佐藤成樹

の落ち口が二つに分かれるんです。そうすると、真ん中に「不動さん」のような姿が現れました。それで【不動滝】という名前が付いたんだなと気がつきました。そのときどきの自然、季節のタイミングがありますので、いろいろな季節に山に入らないと気づかないことがあります。昔の人というのは、それなりの理由があつて名前を付けたのだと知った次第です。

不動滝を正面に見る【御滝神社】には、【不動明王】と【地藏菩薩】（文政一一年）が祀られています。現在の登山道は神社の裏を通っていますが、昔は神社の前から滝の下におり、菅江真澄が書いた『月のおろちね』でも、対岸に渡る橋が架かつていて、不動滝の脇をさらに上に登っていました。

今回、畠山さんとの石像探しの中で最も苦労した石像の一つですが、【地藏菩薩】（明和九年）が滝の上にありました（写真6）。写真は三十年前のものです。滝の上の藪化した旧道ですので、なかなか素人では行けないようなところですよ。上流部分から渡つて、さらに戻つてくるという大変な思いをしたお地藏さんです。工藤さんの本には、これは、松の木



写真6：地藏菩薩（明和9年）

以後三十年も経過しており、たぶん枯れてしまつたんでしょね。なので、行つても目印の松がなくて、どうしたものかと。

自分でもよく分からないのですが、その日道具も何も持つていなくて。でも何かに引き寄せられるような感じで、とりあえず掘つてみよう、素手のまま、斜面を掘つていったら、指先に何かが当たるので何だろうと思つたら、この台座でした。全部土に埋もれていて、何も見えない中でたまたま掘つたら出てきました。これは奇跡かなと思いました。

台座があるということは、絶対お地藏さんもあるだろうと、一緒にいました清水川修さんとお話をさせていただいて。一時間も掘つたでしょうか、倒れているお地藏さんが土砂の中から出てきました。とりあえずその場に

起こしましたが、ここに置いたままだと、また同じように埋もれてしまう可能性があるというので、即、翌週に清水川さんと一緒に山に入りました。背負子を持っていて、清水川さんが、背負子に台座だけ載せて立ち上がったんですけども、結局そこで動けなくなつてしまいました、あまりの重さに。

これは困つたなと、背負子を二人で、三〇メートル運んでは休み、運んでは休み、を繰り返して、五〇メートルほど上流部分まで何時間もかけて移動しました。今は大きい杉の傍らにお祀りしてあります。これも今となつてはここまで行けるのは清水川さんと私二人しかいせんので、何とかして皆さんにも行つていただけるような状況になればなと思つています。

鈴の音の不思議

佐藤 清水川さんはお経をあげることができず。ろうそくと線香に、お供え物を持つていき、その大きい杉の下でお祭りを行いました。清水川さんがバナナとチョコレートも。このお地藏さんは、明和九（一七七二）年のものですが、初めてバナナとチョコレートを食べたんだらうなと、お地藏さんも喜んでく



『太平山系 失われた石像』を刊行した佐藤成樹氏

していますので、刈り払いをしないと入って
いけなくなるのかなと思います。明和九年
は、太平山の中で年号が入っている石像の中
では一番古いものになります。

明和七年というのがありますが、ちゃんと
した形として残っているのは、太平山の中
はこの地藏菩薩が最古です。明和九年は徳川
の時代でいいですよ、一〇代の徳川家治。秋
田でいうと秋田蘭画の始祖といわれる佐竹義
敦（号は曙山）の頃に祀られました。これは
石像探しの中でも思い出深いものの一つです。

畠山秀雄さんの写真

れているだろうという笑い話になりました。
一緒に拝んでいたら不思議なことがありま
した。後ろのほうから鈴の音が聞こえてくる
んですね。山菜採りだろうなと思ったんで
すけれど、冷静に考えたら、この先の下とい
うのは不動滝で、普通の人が来られるよう
な所でもなくて。どうしたんだらうと、二人
で、お地藏さんが喜んでくれたんだらうな
ということがありました。

清水川さんとは、以降毎年欠かさず、年に
一回はお参りに行っています。最近また藪化

佐藤 石像の写真を撮影した畠山秀雄さんと
出会ったのは、令和三（二〇二一）年の七月
です。私は太平山三吉神社のお手伝いをさせ
ていただいておりますが、開山祭の前に一度
ヘリで物資を仁別・国民の森から奥岳に輸送
しています。その年、国民の森のヘリポート
で仙台から来るヘリをずっと待っていました。
太平山にある石像を探しているものがある
と、いろんな方と情報交換をしている中
で、畠山さんがそれだつたら知ってるよと。
今は七月なので藪で入っていけないから、雪
の降る頃に連絡くれたら連れてってあげるよ

のも分かります。今では、崩れたり荒れたり
してなくなつたものもありますし、昔はこ
うだつたという点から考えると貴重です。畠
山さん以外には、石像の写真を体系的に撮影
していた方はいないんですね。『太平山系 埋も
れた石像』を出した工藤武則さんは絵が上手
でしたので、本の石像は全てイラストです。

イラストで記録しているので、彫られてい
る文字をすべて文字起こししているんです
ね。今となつてはすり減つて見えなくなつて
いるものも。工藤さんの本にはそういう資料
的価値があります。畠山さんはそれを写真で
撮影していました。今ではもう失くなつてし
まつたものも結構あります。長い年月、三十
年かけて山がどう変わっていったのかとい
うことも撮影したのだと思います。

残念だつたのは、太平山の写真も三十年に
わたつて撮影していたはずなんです。それを
もらつておくべきだと、後で気づいて。故人
のパソコンの中に入っているの、もう世の
中に出ることはないかと思っています。定点的
に長期的に撮影するというのは、歴史の記録
の観点からすると重要なことです。今回、こ
の石像の写真だけでも引き継ぐことができた
のは大変有意義なことだと思っています。



写真7：不動明王

佐藤 写真集を出して一番嬉しかったこと
は、表紙に使われている写真は、旭又コース
上部の空滝という所にある【不動明王】が岩
に掘られたものです（写真2）。三十年前の写
真です。この不動さんを見たいという人が
結構いて、私もその一人でした。いろいろな
方にお声がけをしたのですけれども。
空滝は普段は枯れ沢で、雨が降ると川のよ
うになつて、岩がもうい所でもあるし、急登
を登っていかねければいけない。この空滝を
避けて、昭和三五年の秋か、その少し前に、
横に七曲という道を付け替えて、今は廃道に
なっている危険な所です。

表紙の不動明王

その後もあれこれ相談や質問をしました
が、本人はもう病院にいますので、どうにも
ならないという話になつて。畠山さんがご家族
に、家の書斎の本棚を全部、写真に撮つてく
るようにと。それを病院の畠山さんに届けて、
その写真を見て、ここからここまで佐藤
に渡してくれと。そういう形で貴重な資料を
最後にお預かりすることができ、本当にあり
がたいなと感謝しています。

三十年前から定点的にずっと撮り続けてい
るので、どこで山の状況が変わつたかとい



【太平山系 埋れた石像】(1994年) 著者：工藤武則 私家版

畠山さんからお伺いしたのは、「写真を撮った後に行ったら岩ごと崩れていた」と。崩れていたのは秋で、翌春に行ったら、跡形もなくなっていたという話を聞いていました。この下は、弟子還沢の枝沢ですけれども、その沢に雪で押されたか、岩がもろいので粉々になったんだろうという話でした。

今回の調査に当たって、失くなったと聞いただけで行かないわけにもいかないだろうと、何とかして行こうと、空滝への入り方を聞いて行きました。「登山道から、水平に行ったら沢に落ちるから、必ず斜め四五度で沢に入って登っていけ」といわれ、実際に行ってみましたが、結局見つけることはできませんでした。見つけることができなかったの、失くなったと本に書いたんですね。で、この本を令和六（二〇二四）年の七月に出版したところ、「YAMAP」という山のアプリに、なんとこれを見つけたという人の記事が載りました。

その方は、空滝の入口出口の場所が分からなかったとも書いてあって、この本に出口の目印を書いたんですね。その方はそれを頼りに行っただけです。ここは今、通れない旭又コースにあるので、いったん野田から入っ

て、頂上を越えて、さらに反対の旭又側に下りて行っただけです。あまりの距離に、日帰りですから、そろそろタイムリミットだというので、諦めて帰ろうとして、振り返ったら足元にあったそうです。

みんながないと思っていたものが、この本をきっかけにして関心を持ってもらって確認されたということが大変よかったなと思います。また、今日も会場にいらしていますが、その記事を見て太平山の頂上を越え空滝で不動明王を撮影した方から写真を送っていただいています。

本を出版したことで、秋田市に住んでいる方を中心に関心が広がっていき、次の世代につながっていく。そういう一助になったのかなと実感できた、大変思い出深い石像です。

石塚稔さんの地図

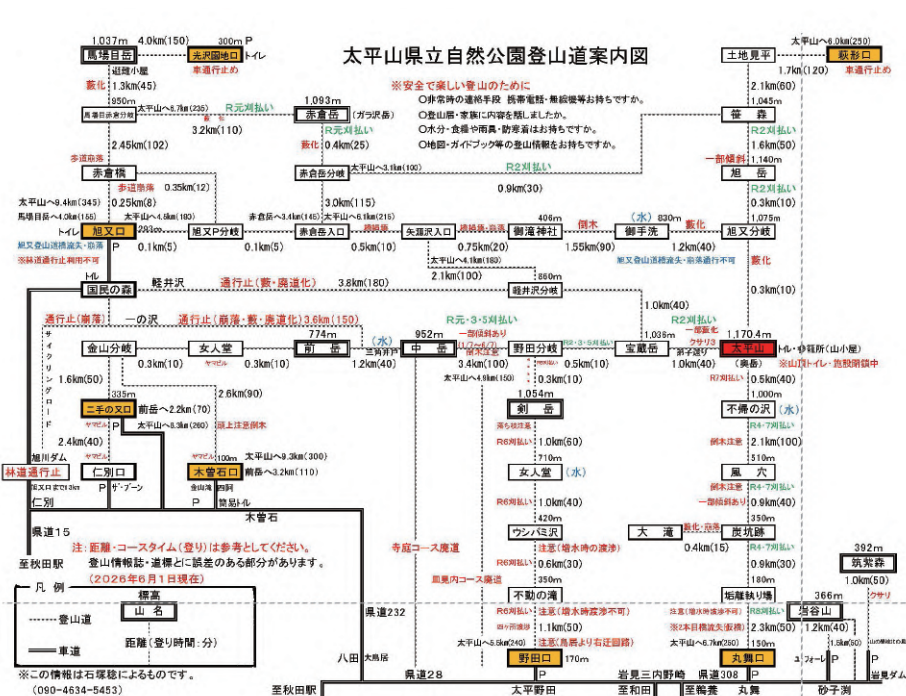
佐藤 太平山に登ったことがある方は、登山口に、この地図が貼られているのをご覧になったかと思いますが。野田口、木曽石口、旭又口。河辺側に丸舞口があります。これは、本日も来ていただいている石塚稔さんが作成したものです（図1）。これの何がすごい

かというと、太平山の登山道の全ての情報が入っているんです。

これは令和七（二〇二五）年六月一日の最新版です。山に入って現地を確認した上で定期的に更新されています。赤倉岳や馬場目岳も含めて、今の山の最新の状況が一目瞭然で分かるものです。石塚稔さんは太平山県立自然公園の管理員をやっていますが、前任者は亡くなった畠山さんでした。このように過去も未来も記録しておくことによって、大変貴重な資料になると思います。

今日来ていただいている佐々木民秀さんは昔の太平山の話がうかがい、できれば太平山の登山史という形でまとめられればなと思っています。鳥海山や岩木山など大きい山だと記録があるのですが、地域の山には体系だった記録というのがなかなかありません。

太平山を巡って、石像を確かめていただいたのは、私以外にも多くの方がいます。次は佐々木民秀さんに、真澄ロードの整備と一緒に山に入った方や、石像にまつわる貴重なエピソードをお話したいと思っています。



作図：石塚稔 太平山のすべての登山道の状況が分かる。登山者の安全のために登山口に掲示されている。



菅江真澄『月のおろちね』より（秋田県立博物館蔵写本）。野田登山口付近の絵図。

佐々木民秀氏のお話

「女人禁制」

佐々木 皆さん、女人禁制ってお分かりですか。すよね。「女人」と書いて、ニョニンと読みます。先ほど、成樹さんが説明した、野田



佐々木民秀さん（右）

コースの女人堂。それから、木曽石コースの前岳の手前にあります女人堂。それから、仁別・旭又コースの水飲み場、あそこも女人堂といっています。三つありますね。登山は今も盛んだけど、かつて江戸時代も、相当、混む時期があつたんです。人気がありまして。

昔の人は野良仕事をする百姓が多かつたんでしょう。たまに休みには女の人も太平山に登るわけです。今でいうレクリエーションという格好で大いに楽しんだ時代です。ところが若い男女の間では、ただごとでないことも起きるわけです。風紀が乱れることもありまして、佐竹のお殿様、これではいかんということで、村々に御触れを出すわけね。こら、おまえたち、登つたつて駄目ですよ。それのお触れのコピーを皆さんにお見せしますので一つ読んでみてください。

女人禁制の山というのはもう一カ所に物的証拠があるんです。雄和の高尾山つて行ったことありますか。ちよつと手を挙げて下さい。ありますよね。あの赤い鳥居をくぐつて、いよいよ階段が始まる。登る前に左手を見たことありますか。そこに女人禁制の石柱が立っています。訳せば、こより先は女の

人、登るべからず。秋田県では今のところ、その一カ所だけ。ですから、もうちよつと敷を払うとか。非常に貴重なものだとは私は思っています。

佐藤 民秀さんの著作である『分県登山ガイド 秋田県の山』という本は情報量がすごいですね。秋田の一般的なすべての山の状況、コースの変遷、ここは通れる、通れないだとか。

佐々木 山と溪谷社という出版社が、全国各都道府県各一冊出しているシリーズものです。秋田県の場合、私が担当であつたわけです。初版から今年で三十三年になりました。つまり今日の主題の三十三観音さんと同じように、ちよつと三十三年。この本の制作に当たっては、仲間がおりまして、書くのは私ですけれども、大いに協力してもらっています。この本をもし持っている方がおりましたら、中をよく見てください。知っている方が出て



「分県登山ガイド04 秋田県の山」(2024年改訂) 著者：佐々木民秀 発行所：山と溪谷社

いますよ。今日話題の畠山秀雄さん。畠山秀雄さんの姿を見て忍んでいただければ、大変ありがたいと思います。

真澄ロード

佐々木 この写真は、旭又コースの「山ノ神」という沢です（写真8）。菅江真澄の『月

のおろちね』で描かれている【大山祇の社】はなくなっていますが、菅江真澄の世界がまだここに残っています。三十三観音像を探すために集まったわけではありません。ここは真澄ロードといわれたところです。若い頃の私と、工藤武則さん、そして畠山秀雄さんが写っています。



写真8：旭又コースの「山ノ神」を整備する「太平山の熊たち」

私は当時、あまり関心を持たなかつたんですけれども、しよつちゆう先代の宮司と接していた関係上、宮司さんや弟の田村禎助さんがこの仁別の真澄ロードをどうしても見たいと話されていました。

その頃は、今の仁別のリゾート公園を造り始めた頃で、当時の責任者は田村君夫さんで、秋田市の産業部長であつたかな、ご存じの方はたくさんおると思います。太平山のリゾート公園開発の先駆者で真澄ロードに非常に関心を持たれました。それではと、私たちが立ち上がった。それがこの太平山警備員会のメンバーです。

平成三（一九九一）年です。七月に一回、九月に一回と二度にわたつて旧道を整備する。倒木だらけの、廃道状態でしたので。またまたその中にいた工藤さんと畠山さんが、

五番観音

佐藤 真澄ロードを整備していた平成三（一九九一）年、仁別の五番が見つかりましたが、完全に埋もれていて、粉々になっていました（写真9）。畠山さんはビニール袋にまとめて発見場所に置いたそうです。翌年に行ったら、失くなっていた。写真集には写真がちやんと載っているのですが、未だ行方不明です。

私もいろんな人と、何回もここに行つて、畠山さんが撮った写真の角度から、木や枝の位置を見て、ここじゃないかな、あそこじゃないかなと探したんですけれども、いまだに見つかっていません。どこまで流れていつてしまったのか、行方不明なものの一つになります。

山ノ神

佐藤 先ほどの真澄ロードの写真にも写っていますように、ここには天然杉の巨木があつて、その中にぽつんと「山ノ神」という女神が置かれています（写真10）。江戸時代はここに社があつて、菅江真澄が風景を描いている、そのままの所です。ここまですつと、時



写真9：五番碑（文化6年）消失

石像を探していました。ちょうど合致しましてこの写真撮影の日、第五番の観音さんを見つけたわけです。

地藏流れ四ツ辻という場所がありまして、そこに四番の観音様が祀られています。今もあります。ところが、五番がどこにあるのか分からない。それが工藤さんと畠山さんの謎でした。この写真から始まったということです。

佐藤 今だと、ザ・ブーンズの駐車場の登山口から入っていくと途中に三番の観音様があつて、その三番というのは工藤さんの本には載っていません。工藤さんが本を出版した後に発見されて、誰かがそこに置いたであろうといわれています。その次に四番。真澄ロードを整備していたときに五番が見つかったんです。



写真10：山ノ神（明治24年）

間をかけて歩かなければならないんですが、ここの杉の巨木の間に、山ノ神を見ると、心洗われるというか神聖な所だなという感じを抱きます。

真澄ロードを復活させようという機運が高まって、二回整備したけれども、結局、いろんな事情、自然の猛威というか近年の大雨の影響でなかなか維持することができませんでした。サイクリングロードも廃道になり、その上の真澄ロードもほぼ藪化して、春に行くと、踏み跡が若干残っていて、たぶん山菜採りの人は分かつて入っているのかなと思います。それ以外の人には、ほとんどこの旧道の存在は知られていないので。

余談になりますが、私は、山菜採りをしないんです。山菜採りをすると、皆さん、警戒

して道を教えてくれなくなるんです。道を聞く場合は、「ちよつと私、山菜よく分らないくて」、「山菜には興味ないんで」というような話からして、昔の道の話を聞くというのが、旧道探しをするコツかなと思います。

剣岳に落ちていた仏様

佐藤 民秀さんに野田コースのお話をお伺いしようと思います。太平山三吉神社の奥宮がある頂上の手前に、剣岳があります。ツルギという人もいれば、ツルギダケ、ケンダケという人もいます。

剣岳の頂上に建っている剣岳神社。石の祠はもうなくなつてしまいました。立て掛けてあるのは三十二番碑で、上部は失われ、下の部分だけが残っています。畠山さんも「周りを探せば、どこかにあるんじゃないか」という話をされていたのですが、他の人も、どこか周りに落ちているというので、機会があれば、昔のように戻してあげたいと思います。

佐々木 剣岳の山頂には、観音さんがいないわけです。あつてもおかしくない場所なんです。私は昭和三六、三七年、秋田国体のあたりかな、あの頃、丸舞コースにある不帰沢と

不帰沢という名前がなぜ付いたか説明しますと、そこには絶対入るなよ、江戸時代からずつとそういう言い伝えがあつたそうです。昭和に入つても同じく、ある軍人が入つて帰つてこないとか、ある人が入つたが亡霊になつて帰ってきたということで、いわくつきの沢として恐れられていたんです。

私も当時は若くて探究心があつたので、そういうところを見てみたいと、いろんな文献を調べてみました。そしたら、秋田商業に山岳部があつたんですよ。戦前ですよ、生徒ではなくて先生に、境田さんという方がおります。楢山の、境田素洞という、有名な俳人、文化人でした。その方が学校の先生をやっている頃、仲間を連れて不帰沢を探検しようということ で記録が残っています。

こんなことが書いてありましたよ。どんな魔物がいるか、獣がいるか。大蛇かということ、何を持っていたと思う？ ピストルを持っていたつて。そう書いてあつたんです。

よ。今じゃ考えられないことなんだよね。

私も不帰沢には七回くらい入ったかな。不帰沢から剣岳のほうへ延びる沢と、奥岳のほうへ延びる沢、弟子還のそこへ延びる沢、三十三滝沢から奥岳へ延びる沢があり、右沢、左沢に分かれています。その日は一番左側の剣岳に延びる沢を登っていたわけね。剣岳に向かって登つていたら、直下に四角いものが落ちてるわけよ。それが石仏でありました。今、成樹さんが説明したとおり、誰かが剣岳の頂上から蹴つ飛ばしたか、雪崩で落ちたか。それを、私が発見したわけ。ところが単独で入っていたので持つわけにもいかない。残念ながら、写真も撮つてこなかった。

その場所になぜあつたかという、恐らく私は蹴つ飛ばしたのではないかなと思います。江戸の頃は、神様も仏様も一緒ですよ。ところが明治維新に入つて、神仏習合の、分離令を出しまして、神様と仏様が分けられた。神様の山に、なぜ仏さんがあるんだと、仏さんが散々にやられちゃつた。

全国あちこち歩くと、首のない地藏さんを見かけるでしょ。あれは倒れて首が取れたんでないんです。完全にそのように破壊しているんです。仏さんを置けば駄目だということ



写真11：三十三番・勢至菩薩 太平山奥岳頂上

で。それで、神様だけ残るわけね。それが明治政府の指導であつた。そういう格好で恐らく蹴つ飛ばされたものでしょうと私は考えています。

三十三番勢至菩薩について

佐藤 これが三十三番の勢至菩薩です(写真11)。後ろに写っているのは奥宮の旧社殿です。今は建て替わつて新しい社殿になつています。基本的に三十三番というのは頂上にはないといわれているので、なぜここにあるのだろうというのが一つの疑問です。

三十三番の観音様は、もともと木曾石・金山コース沿いにある中岳の頂上にあつたものを、誰かがこの奥岳まで運んだのではないかとわけています。今はほとんど誰も気づか

人が運んだらしいとか。

天皇陛下も泊まれたアキタニューグランドホテルが中通り五丁目にありました。年配の方は分かると思いますが、今の若い方は誰も分かりません。あそこで、私の山の先輩、秋田アルパインクラブという会が戦後できました。その初代会長をやつた山田宗一さんという方が、グランドホテルの支配人でした。氏は当時、昭和二十七年の奥岳の写真を持つていました。それを見せてもらつたら、なんとこの観音さんが写っているんですよ。それで謎が解けたわけ。昭和二十七年には頂上にあつたと。私が発見したのは昭和三十七年。

誰かが蹴つ飛ばしたか、それとも雪崩かと、謎があつたわけ。当時の山頂は今と違つて1mくらいの高さの石垣があつたんですよ。三十三番はその上にあつたそうです。昭和に入つたら、仏様を蹴つ飛ばすということはありませんので、恐らく、雪の被害か台風かなかで落ちたのだないかと思つています。

三十三観音がある山

佐々木 秋田県内で三十三番観音像を祀つて

ない社殿の脇に、コンクリートで固められて置かれています。中岳から奥岳に動かされたのは、たぶん明治以降だと思います。これは民秀さんが関わっているということで、お話しただけだと思います。

佐々木 三十三番と巡り合つたのは、こういつた経緯でした。これは昭和三十三年に発見したものです。私は不帰沢を探検していた頃、探求ですね、探求して、三十三滝沢のほうへ入つたわけ。

恐らく左沢であつたと思いますけども、このときのメンバーは、私と、今日、田村一さんがおりますが、一さんのお父さん、田村禎助さんという方、それからもう一人、当時は秋田高校の生徒でしたので、禎助さんの同級生で横田さんという方。この方はこれ以降どうされているか分かりませんが、横田さんというのは記憶に残っております。

この三名で、三十三滝沢を辿り、奥岳に上がつて南側を見ますと、下が急斜面ですよね。恐らく一〇〇mくらい下に石仏が現れて転がっているのを見つけました。あれ？ と思つて、よくよく見たら、三十三と書いてあるんですよ。

いるのは、太平山以外でどこにあるか。どなたか分かつている方がおりましたら手を挙げてください。どうぞ。房住山ね。県道の脇から登つていく。尾根には観音様があるんですよ。頂上にあるのは二十一番でした。三十三番は金山林道登山口のほうです。

もう一つは増田町の真人山。公園にアスレチックがありますよね。あそこから登つて行きますと、観音さんが並んでいますよ。それから、まだありますよ。肝心要の河辺の筑紫森。観音さんが並んでおります。もし行く機会がありましたら、ぜひ見てください。

もう二つばかり、姫神山つて行ったことありますか？ 大曲の山です。あそこで観音様といつても誰も知らないでしょ。みんな、車で通るから分からないけれども、表参道、つまり石切り場から上がつて行きますと、右側にあります。薬師神社の近くまで並んでいますので、これもぜひ。

もう一つは下浜の珠林寺という、クリスマスローズの花で有名なお寺があります。あのお寺の後ろから登れます。筑紫森という山があります、河辺の山と同じ名前です。そこにも並んでいます、やはり三十三番は下の方

当時、沢登りというのは必ずザイルを持つて歩きますので、その観音さんをザイルでぐるぐる巻きまして、引つ張つていくというのも、あんまり無茶してもまずいと思いました。交代で背負つたら、最後の急斜面の三〇mくらいだったかな。とっても登れなくて、たまたま頂上のほうで人がおつたもんだから、皆さん、引き上げてくださいつて、ザイルでもつて引つ張つてもらつて上げたわけ。それがこの観音様です。

今から六十三年前に上げました。その頃私はあまり関心がなかったものですから。てつきり頂上に三十三番はあるものだと思つていたが、よく調べたら、三十三番の観音さんつて頂上にないんですよ。いわゆる頂上というのは、山岳宗教では阿弥陀の世界、それから薬師の世界ですので、観音様はランクが違つたんでないかなと、勝手に思つていますけど。どこへ行つても共通しているのは、三十三番の観音様は頂上にはありません。

昔、中岳であつたのでないかというのは、恐らく、先ほど成樹さんがいつたとおり、中岳にあつたものを誰かが背負つてきたのではないかと。今度はそれを調べてみたら、記録が残っていました。言い伝えでは、木曾石の

にあります。これも共通点。もう一カ所ありますよ。大曲の、神宮寺の方。三峰山という山があります。ここにも観音様ががらつと並んでいます、山頂にはありません。県内はこのように六カ所ありまして、太平山だけで三カ所もあるということは、全国でも大変珍しいのでないかなと私は思っています。

七月の豪雨災害のあと

佐藤 何度もお話させていただいています、令和五(二〇二三)年の七月の豪雨災害が太平山に大きな被害をもたらしています。今日のホールの後ろのほうに、今月号の赤沼の太平山三吉神社さんの社報を掲示しています。今の登山道の状況が書いていますが、まだまだ仁別から登れるのは何年先になるか、五年先になるのかというところですよ。

写真集は、畠山さんの写真がほぼ全てですが、私が撮影した写真を一枚入れさせていただいています。日付を見ると、二〇二三年の七月一日です。大雨の日が十五日で、翌十六日には被害の全容が明らかになりつつありました。十七日は開山祭当日で仁別・旭又口から登拝する予定でしたが、土砂崩れなどの影響で仁別集落の先から通行止めになつて

いました。その後はどうしようということになつて、オーパスのスキー場の上に二手ノ又という所があり、そこからだつたら登れるんじゃないかということで、女人堂、前岳、中岳を縦走して、奥岳までご分霊を背負つていくことになりました。

登山道は藪化が進んでおり、朝に出て着いたのは夕方で、約八時間かけてようやく着きました。十八日に下山するときどうしようという話になつて、来た道に戻るのは大変なのでもう嫌だと。旭又に下りて車道を帰つたほうが楽だという話になつて、旭又側のほうに朝八時から下りはじめました。途中、民秀さんから連絡が入つて、下の道路が大変なことになつていると。それでもずっと下りていきました。

御滝神社の下に橋がありますが、斜めに傾き人が渡れる状況ではありませんでした。そこで川にザイルを張つて、腰まで濁流に浸かりながら、一つ目の橋をクリアし何とか。そこからまた先に行くと、二番目のコンクリートの橋があるんですけども、その片側は全部流されていて二、三メートルくらいの段差になつており、そこもどうしようというので、杉の倒木にまたがつて行つて、最後は

ロープで下りました。そこも何とかクリアして、いよいよ旭又の駐車場だと思つたら、この写真の風景でした(写真12)。駐車場も何もなく。水煙が立つていて、一体ここはどこなんだというような。ここでも橋は流され、渡ることができなくて、この上流の橋まで戻つて仁別方面に向かうとしたんですけれども。

沢という沢、国民の森までの道路の半分くらいは完全に川に持つていかれて何も残つていませんでした。皆さん、へとへとになつて、その先の道がどうなっているかも全く分からないまま進んで、そのカーブを曲がつて道がなければ、また奥岳に戻ることになれば、どうしようというような。途中、道が完全に崩れてなくなっている所もあれば、斜面に亀裂が何本も走つていて地滑りしているんだなという所も、そういう場所を何箇所も切り抜け、命からがら帰つてきたのがこの十八日の夕方でした。

豪雨災害は令和五年でしたが、今は令和七年。復旧工事に時間がかかつて、ようやく国民の森までの道路だけは復旧していますが、現在も通行止めです。そこから、本当に昔の山のにぎわいが戻るところまでは、

まだ五年から先かかるのではないかなといわれています。

地域の文化財を守る

佐藤 野田コースですと、二十六番と二十七番。私も何度も探しに行きましたけれど、完全に河原になつて、鉄砲水で流されてしまつて発見することができませんでした。また旭又コースにあった二十五番も完全に流されてなくなつてどこかに行つてしまいました。

畠山さんの写真は、失くした文化財も記録しているということで、大変重要な意味を持つているのだと思います。地域の宝、文化財を守つていくのは、そこに住んでいる人が軸になつて力を合わせていくしかできないと思います。人口が減つて、行政にもお金がない。そういう中で文化財を守つて、次の世代に伝えていくことを、われわれがやつていかなければ、失くなくなつてしまうだろうと思います。

工藤さんが三十年前に畠山さんと一緒になつて石像を探し、記録し、三十年後に私が畠山さんと一緒に本を出版した。また三十年後に誰かがつないでくれれば、たぶん一〇〇

年にもわたつて文化財がつかつていくのかなと思つています。本目ご参加の皆さんにも興味を持つていただいて、太平山に入つて、こういうのがあるんだなというのを感じていただければと、そのきっかけになればと、今回の会を開催いたしました。

秋田県には太平山がいくつある？

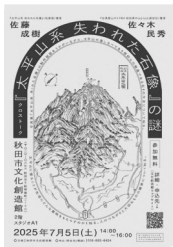
佐々木 皆さん、秋田県内には太平山はいくつあるでしょうと問いかけさせてもらいます。有名なのは大曲の太平山。姫神山です。あとは刈和野。あそこにも大平山つてありますよね。黒森山ともいいます。さらには、あちこちに太平山があります。主なるものは八カ所あります。ところが、なくなった太平山が一つあること、皆さん、知っていますか。それは秋田空港の滑走路ができたでしょ。あれによつて山が一つなくなつてしまつたんです。

滑走路の東端に一〇〇mくらいの大平山があつて、お宮があつて、信仰する人がおつたんですよ。それがなくなりました。それで代わりに、空港の正面に三吉神社があります。すぐ前に車も止められますので。空港のすぐ向かい。そこに行つたら、そこが移転した神社の建つ大平山になります。

ところが国土地理院の地図に載つていないのが、まだまださんあるんです。太平山と名前の付く山は県内でどのくらいあるかを、質問したいと思います。一〇から五〇くらいというクラス、五〇から一〇〇くらいかなと思ふクラス、あとは一〇〇以上と思ふクラス、三つに分けて、挙手してもらいます。ヒントを与えます。ヒントは秋田駅から新幹線こまちに乗りますと、東京まで行きますよね。トンネルの数とやや同じくらいあります。

一〇から五〇までの方、手を挙げてください。三割、四割ね。五〇から一〇〇くらいあるなと思う方、手を挙げてください。三割、四割だね。じゃあ、一〇〇以上あると思つた方は手を挙げてください。いないね。

大館方面が最も多いです。地元の人には太平山と呼んでいます。その名残は、全県に散らばつています。答えを申し上げますが、現在一二〇程まで確認しております。私、発見とは言いません。太平山の数が一二〇以上というのは、登れる山もありますけど、ほとんど藪で行けません。そこには石仏がありますので、私は全部、写真に撮りまして、地図と写真を畠山秀雄さんにまとめてもらつたんです。いずれは出版しようかという矢先に



「太平山系失われた石像」の謎

日時：2025年7月5日(土) 14:00-16:00
会場：秋田市文化創造館 2階 スタジオA
主催：秋田市文化創造館

佐藤樹
佐々木民秀

写真集『太平山系 失われた石像』の制作秘話をうかがいながら、太平山の道しるべであり信仰心の結晶である石像の今昔について学びました。太平山に登ることが生活にどんな意味をもたらすのか、人のつながりと大切なものの継承について、100人もの来場者と考えました。

下浜桂根のやまはげ、上新城のなまはげをめぐって

下浜桂根のやまはげ

藤原浩一（下浜桂根町内会長）

川村均（下浜桂根町内会副会長）

上新城のなまはげ

高橋浩樹（上新城小又・白山双葉親交会会長）

佐田稔（白山町内会長）

解説

齊藤壽胤

進行

渡辺知（秋田市農山村地域活性化センターさとびあ）

十年ほど前まで秋田市下浜桂根地区で行われていた、どこかユーモラスなお面の「やまはげ」。同じく秋田市の上新城で一〇〇年近く続く、小又集落と白山集落が協力しあい今も執り行う「なまはげ」。二地域の代表者をお迎えし、課題を話し合った二〇二五年一月一日の記録を掲載する。

下浜桂根地区のやまはげ

渡辺 私は、元上新城中学校、現在はそこを

大みそかに行われていたようで、それ以前は、小正月にやっていたようです。そういった話も踏まえながら、下浜桂根地区のやまはげ行事について、いつ、どこで、誰が、なんのために、どのように行われてきたのかを伺いたいと思います。

藤原 桂根町内会の藤原浩一と申します。今、渡辺さんから質問がございましたけれども、ここに『桂根の今昔』という冊子がございます。これは平成一一（一九九九）年頃に作成しまして、昔から現在までを詳細に調べました。でも結局、いつから始まったというのは判明しなかったんですよ。平成一一年に明治生まれの方がご存命でいらつしやいまして、その方に確認したところ、「俺、生まれ頃あつたよ」ということは、明治の初期からあつたんじゃないかなと。もしくは、もつと前からあつたかもしれないですが、その人が最長老だったものだから、明治初期からということになっています。今現在、なぜやめたかというお話ですけども。今から一〇年前に、いったんやめました。

それ以前も昭和三〇年頃までやっていたのですが、その時も子供が少いとか、いろいろ理由がございまして、一〇年間くらい中止

活用して地域の活性化事業に取り組む、秋田市農山村地域活性化センターさとびあという所で仕事をしている渡辺知と申します。地域振興を目的として開設された施設ですので、上新城の歴史・文化、あるいは暮らしをしつかり調べようという取り組みから四年ほど経ちました。そこでなまはげに出会うわけですが、これも。

ここの地域を見渡ししても高齢化、過疎化が進んでおります。そういう現状と地域の存続について、大変危惧するようになりました。

になつて。また昭和四〇年代になつて、親の会が主催という形で子どもたちを集めて行なつた、復活したということです。復活したんだけど、残念ながら再び一〇年前にやめました。その理由としては子供の減少です。実際、今、子供はわが町内に二名だけです。当時は三〇〜四〇人いました。やる方々も、お年を召してきまして、なかなかできそうもない。それから藁の確保、それと、それを制作する小屋。以前は、農家の方がたくさんいましたので、大きな小屋で持ち回りで作ってあつたんだけど、だんだん廃れてきて、現状になっています。

昨今では、西部市民サービスセンターというところからお面を作成したいとお願いをされまして、何回か作りました。その後もテレビや新聞の取材がありまして、また今日も、こういったお話をいただいて、ここにおります。町内会では、役員会で話して、どうしましょうかという話も、今現在、はっきり言つて出ています。復活するにあたっては、見てのとおり大量の藁を使用することになります。今、農家さんはほとんど全部機械でやっていますので、藁の準備、作る場所の確保、そういうものがひとまとめになれば、完全にやめたわけではないので復活することはでき

今日は地域の伝統文化である二つの小正月行事、秋田市下浜桂根地区でやまはげ行事を担われてきた、藤原浩一氏、川村均氏にお話を伺い、引き続き上新城の小又・白山地区でなまはげ行事に現在も携わっている高橋浩樹氏、佐田稔氏にお話を伺います。一緒に地域の課題を考えたいと思っています。まずは、下浜桂根地区のやまはげはどんなものかという説明からです。

渡辺 小正月に対して大正月という言い方がありますが、一〇年ほど前までは大正月の

ると思います。

うちのほうのやまはげは女人禁制なんです。作る時もです。というのも、私どもは白山神社という神社で、石川県の白山市に総本宮があります。その女神の名前が菊理媛尊（きくりひめのみこと）と言います。作る時も、かぶるときも全て男性のみで回るといふ形で、これまではやっていました。今現在、男だけの手では無理かなというところもあるので、女性も入ってく



秋田市下浜桂根地区のやまはげ(2024年12月21日さとびあでのワークショップの様子)



秋田市上新城小又・白山のなまはげ

る可能性はございます。頑張つて復活したいなというところもありますし、町内の皆様のご意見も聞きながら進めていきたいと思ひます。

渡辺 実はさとびあに桂根地区の出身者がおります。ぜひ、このやまはげの面をテーマにしたワークショップをやりたいというこ

とで、昨年の二月二日に一般市民の方に入つていただき実現させることができました。大変コミカルというか、かわいらしいというか。こちらのお面、われわれが見ても、すてきないキャラクターだなというイメージがあつたのですが、わがスタッフは、苦手で、小さい頃はすごく怖かつたんだと。恐怖で逃げ回つていたと言う話をしております。ワークショップの後には、できたお面をわれわれのほうでしばらく展示させていただきました。

続いて上新城の小又・白山地区で傳承され、現在も行われてる小正月行事のなまはげについて、これまでやつてこられた経緯も含めて、歴史的な状況をお話したいだきたいと思ひます。小又・白山両地区合同の双葉親交会を五〇年ほど前に作り、親交会でこの行事を繼承されてきたということです。

上新城小又・白山地区のなまはげ

高橋 上新城小又・白山双葉親交会会長の高橋浩樹と申します。先ほどの下浜桂根のやまはげとは比べられないような規模で今現在もやつております。いつ、どこで、誰が、なんのためにと言われましたが、うちの父親たち



上新城小又・白山のなまはげを行う佐田稔氏(左)、高橋浩樹氏(右)

が二〇代の頃に小又集落と白山集落の合同でこの双葉親交会を發足させたと思われまふ。親交会のなまはげは子供たちを驚かせるために始めたと考えられます。一月一五日になまはげをやつて子供たちを驚かせると、一年間、なまはげが来るぞということで行儀よくさせる、そういう狙いがあつたと思われまふ。

農家の長男というのは家に残るものと、

私たちの時代は、頭から考えておりました。まして、田んぼがありましたら、それを継ぐ使命とまではいきませんが、そういう考えはどちらの家庭の長男も持つていたと思ひます。それが徐々になくなつてきて、長男も都会に出ていき、お年寄りしか残つていない現状です。双葉親交会は会員の平均年齢が六〇歳を超えていると思ひます。一一名で、ほそぼそとやつている状態です。たぶん私たちの代で消滅するなと考へております。いつまでもできるわけじゃないので。ですから、生きている限りは続けていきたいと思ひます。

渡辺 上新城小又地区に重松の家があります。秋田市でたつた一軒の農家民宿をやられているご夫妻が、双葉親交会の皆さんと協力して、この行事を長い間サポートしていらつしやいます。私が勤めるさとびあでも、上新城の大事な地域資源という位置付けで協力をお願いしている事業があります。

下浜桂根のやまはげは、聞いてみますと、明治時代から一〇〇年以上継続してやつてこられた。途中で休んだり、結果的に現在はやられておりませんが、上新城のなまはげも、一〇〇年近くやられていふということですね。今後、下浜桂根地区のように上新城もや



下浜桂根のやまはげ：藤原浩一氏(左)、川村均氏(右)

めざるを得ない事態になつてはいけないという思ひをかなり強く持つています。

どうでしょう。下浜桂根の藤原さん、川村さん。残念なことに現在はやられていませんが、地域の皆さんに一年に一度、待ち望まれてきた行事だつたのでしょうか。復活、復興させられないかといううな声はありますか。

藤原 やめてから一〇年経つていますけれども、昨年ワークショップをやつてから、またやつてもいいんでねえという話は確かに出ています。要は藁の量なんです。この藁をどこから確保しようかという。お面の鼻の部分ありますね。稲を手刈りして、これぐらいの束にして。それをさらにまた大きく束にするんですけど、一〇から二〇束を使うんです。藁を全部一回さらつさらの状態にしてから、鼻といわれる部分を作るんです。ものすごい量なんです。それと、作る場所。皆さん、小屋とか壊してしまつて、作る場所がほらないです。それを確保できれば、復活は十分可能だと思ひます。

これまでは親子会を催して、小学生の高学年から中学生が参加しますけども。先ほど、子供は二人しかいないという話をしました。二人とも女の子です。彼(川村さん)にお孫さんが一人いるのですが、今、四つの子です。ですの、やるつて言へば、われわれ大人部隊がやるという形になります。やりたいところ半分、このままいんじやないのが半分の気持ちです。こういうお話をしている中で、またやりたいなという機運が燃え上がつてくると思ひます。その時はその時でさつとびあの鈴木さんに藁の手配を頼みます。

絶対、手伝ってくれると思いますんで、やっていければな。

こういう面は、行事が終わったら、一回全部ばらすんですよ。一年一年、新しい物に替えているんです。鼻の部分は藁でも、三一日に、杉や笹を朝一で採りに行くんです。雪を漕ぎながら山の中へ入り、採ってくるんですよ。金や赤や青の用紙も、なかなか売ってないものです。でもとにかく藁ですね。藁が手配できれば、何とかできるのかなという感じです。

渡辺 上新城小又・白山のなまはげについては、私が聞いたところによりますと、地元、小又に昌東院というお寺がございまして、たいへん歴史のあるお寺なんです。今から三代前の和尚さんが九〇〜一〇〇年近く前になまはげ行事を始めたと伝えられております。この後、なまはげ、やまはげと神社のつながりというような話にも展開すると思います。実際、双葉親交会の皆さんが長く続けている行事ですが、小正月行事を楽しみに待っているという住民の方は多いんじゃないでしょうか。

高橋 一月一五日、小正月の日に行なっていますが、住民の方は待っています。一年に一回

の行事なので必ず来て下さいということは伝えられます。ただ、そのお宅やご親戚で不幸があった場合は、訪問を遠慮しております。

渡辺 一月一五日、しんしんと雪が降っている深夜に、親交会のみなさんが家々を回るのが。そういう地域の行事を長く継続してこられて、嬉しかったこと、あるいは苦しかったという思いもお聞かせいただけませんか。私も一緒に歩き回りましたが、リアルな現場に立ってみると、これは大変だなという思いがありました。でも、なまはげを待っている方がいるわけですね。

高橋 なまはげで行ったお宅から「来年も必ず来て下さい」と言われると、よかったですと思います。一月一五日というのは平日に当たることもあるんですよ。一八時頃から準備して家に向かいますが、みんな仕事をしていますので、その時間に集まるのが大変です。

渡辺 小又・白山両地区の二つが一つになって、この事業を継続してきています。なまはげ行事だけではなくて、盆踊りや早苗饗（さなぶり）といったことで懇親の機会を作っていると同じ、それもまた意味のあることだと思います。このままこの行事を継承していく

ことは可能なんじゃないか。ちよつと心配なんですけれど。下浜桂根は現在、途絶えてしまっていますが、ひよつとしたらという話も含めながら、何か聞いてみたいことはございませんか、川村さん。

川村 課題は一緒だと思うんですけど、後継者がいないのが現状で、そこに尽きます。後継者がいれば、できますよね。藁を確保し、絢う人がいればできます。そのあたりが難しいです。

渡辺 上新城地区では藁に関して困っているという話を聞いたことないのですが、高橋さん、佐田さん、どうでしょうか。藁だったらいくらでも準備してあげますよといったような状態に、ひよつとしたら、あるのでしょうか。

高橋 残念ながらそんなに量はありません。うちのほうは会員の方が手刈りしている藁を、杭を地面に差しして、それでなんぼか乾かして、使わせてもらっています。下浜桂根さんに比べて少ない量が済みますので、何とか間に合っている状態です。

渡辺 ここで壽胤先生にお聞きしたいことがあります。下浜桂根のやまはげは、太平山の

三吉さん、三吉神社がルーツですね。里の悪魔祓いのために三吉の神の使者が山を下りてくるのだというのが桂根地区に言い継がれているようですが、どうなのでしょう。

三吉さん

齊藤 なまはげの正体はオエダラヤマから。オエダラヤマというのは秋田市の東のほうにある太平山のことです。三吉さんという神様が正体なんだということでもあるんです。これは私、一理あると思います。江戸時代には「山鬼神」とさんと表記されているものもあるんですね。なまはげ、やまはげは、まさに鬼の姿をしている。その一つの現れではないかなという伝承は各地に伝えられています。

例えば男鹿地域のナマハゲに関しては、西の脇本地区周辺の方々は、真山・木山から来るとはあまり言わないですね。太平山から来ると言っています。脇本地区は三吉信仰というのでしょ、三吉信仰が強い所でありまして。もちろん太平山のことを言っているわけですよ。その信仰石碑もかなり濃密に分布しています。

脇本からは秋田市の太平山がよく見えるん

ですよ。ちよつと小高い所におると、太平山は単独峰みたいに見える所が脇本地区には多いです。寒風山はすぐ後ろにありますけれど、寒風山の姿というのは離れて見えないとなかなか見えてきません。寒風山から来るというよりも太平山から山鬼神が来るということが多く聞かれます。しかし秋田市雄和の山崎という所では、山崎山から来ると言うんですよ。すぐ後ろ、背後の山です。

山崎山は里山ですから、単独峰としてあるような山ではなくて、皆さんが普通に生活している背後にある山のことです。つまり、私たちの生活の身近な所にある山から来るという考え方ですから。三吉さんは、さもありなん。秋田市でもそういう伝承がいくつか見られます。非常にサンキチ信仰が普及したと考えられるわけなんです。ただ、やっぱり山から来るといふ伝承は、やまはげに特有なんだろうと。やまはげは山から来て「剣ぐど、剣ぐど」と言う。剣ぐのは、やはりナマミを剣ぐという意味合いだったと思います。

こういう言い伝えは、それが正しいかどうかは別にして、この伝承をちゃんと伝えていかなければ、私たちのかつての生活が見えてこない。やまはげはどこから来るのか、正体

は何かというところに、ヒントが隠されているのだと思います。

上新城小又・白山のなまはげの起源

渡辺 佐竹氏の時代から明治の時代へ移っていく時に、上新城でも地主と小作人が存在する時代へ変わっていくわけです。そうすると、使用人たちの楽しみのために、寺の和尚さんがなまはげ行事を考えた、そこから始まったとも言われています。素朴でありながら長く引き継がれてきた地域の伝統行事となつていますが、この上新城のなまはげは男鹿のなまはげの伝承ではないかとも言われているようです。

齊藤 いわゆる若勢、女衆（めらし）という小作人の方々は一五日というのは「やぶ入り」と言ってお休みです。昔の正月の大晦日にあたるわけですからね。今では正月でも、お仕事している方も多いですが、もともとはちゃんと休まなきゃいけない祭りの日です。

この日をわざわざ特定してなまはげをやるというのは、若勢とか、女衆と昔は言いましたが、そういう方々の一つの娯楽みたいなものでした。あるいは、家を回れば餅やみかんを食べ

たり、お酒を飲んだりすることができるとい
ことです。こういう発想は、私は、こじつけだ
と考えます。なぜなら、この日はほとんどみん
な、休んでいますから。例えば手伝いの人たちが
その家にとどまっても、その親方が
若勢、女衆の方々に提供するのであつて、わざ
わざなまはげで回らなければそうしたご馳走を
得られないということではない。つまり、小正
月という特別な、いわば祭りの日の振舞いにあ
う、ということです。

和尚さんが考えて始められたということ
は、はつきりしたことは分かりませんが、あ
る程度の権威のある方たちに、行事の始まり
をこじつけたのではないかと思います。「こ
じつけ」というのは故事を付ける、理屈を説
明して付けるという意味です。縁起を付けて
あげるという意識が強いと思います。特にこ
の地元のお寺の和尚さんはインテリゲンチヤ
ですから、こういう起源だよ、あるいは、こ
ういうふうにしたほうがいいんだよ、という
ことだと思っています。

男鹿市の門前地区に長楽寺がありますね。
長楽寺には九九九段の石段構築の話がありま
す。それとなまはげは関係しています。長
楽寺の先代の和尚さんは、自分がなまはげ

の話を作っただよとおっしゃっていまし
た。九九九段は鬼が築いたという話がありま
して。でも、実は九九九段の話は日本全国に
あります。ほぼ同じ話が全国に伝わっていま
す。秋田県に、もう二カ所あります、つまり
三カ所。これも後々の伝承のこじつけであつ
て、実際はそれより前になまはげをやつてい
たことは、みんな分かっているわけです。

なまはげをやると、若勢の人たちが酒を饗
応してもらえる。なまはげの格好をして家々
を回れば、ふんだんにお餅もごちそうになれ
る。あわよくば魚をごちそうになれる。そう
いう一つの癒やし行事みたいなもの。それが
念頭にあって、和尚さんが始めたというの
は、後のこじつけじゃないかなと私は推測し
ています。なぜならやまはげの行事は江戸時
代の中頃には既に行っているとはつきりして
いるわけです。明治以降に始めた小又・白山
地域では、もしかして他の地域の行事を見
て、うちのほうもやろうとしたのかもしれま
せん。

広域へ

齊藤 地域連携という言葉は非常に大事だ
と思つています。一つの集落でできなけれ

ば、地域を広げていく。二集落、三集落でや
る。あるいは、行事の際、若い人たちに地域
に帰ってきてもらう。古里のことを思い出し
て、文化として伝えていこうという意識を取
り戻していただく。わずかの時間でもいいか
ら来ていただく、そういう方法もあると思ひ
ます。

それに、どうもこのやまはげ、なまはげの



さとびあの渡辺知氏(左)、齊藤壽胤氏(右)

行事は、個人的な、ごく小さい集団のお祭り
のように思えますけども、共同体の祭り行事
です。地域全体で行事を担うべきものです。
秋田県の各地で行われている小正月行事、例
えば横手市のかまくらでさえ後継者不足であ
り、しかしながら、かまくらの場合も今では
少し広域で行われています。共同体、つまり
村全体、あるいは集落全体で関わっていく、
それで成り立っているのだと思います。

やまはげ、なまはげは、私(個人所有)の
田んぼだけ祈ればいい、豊作になればいい、
そういうことではありません。あるいは、私
一人が悪霊から逃れられるように、病氣にな
らないように、なんていうことでもない。小
正月という大事な時期に、個人の豊作を祈る
のじゃなくて、集落全体、共同体のことを祈つ
ているわけです。そういう意識が希薄化して
きたのが衰退の一つの原因ではないかと思ひ
ます。いま一度、考えてみなくてはならない
と思います。

白山神社

渡辺 下浜桂根には、白い山の神社と書い
てハクサン神社があります。上新城の場合
は、白山にシラヤマ神社と呼ばれている神社

があります。そして両地区には、集落の出入
り口に庚申塚、あるいは庚申塔とも言います
が、複数存在しています。ハクサン神社、シ
ラヤマ神社と呼ばれる白山信仰は、石川県、
福井県、岐阜県にまたがる白山を中心とした
山岳信仰です。その白山信仰で、下浜桂根に
関しては一五八〇年に白山神社が造られてい
ます。ご祭神が白山比咩大神という女神です
ね。菊理媛神とも言われております。加賀
国、石川県の人たちが秋田沿岸へ大移動した
際、一緒に入ってきた古里の神、故郷神と呼
ばれるものが白山神社につながっているとい
うことなのです。

また上新城の白山神社に引き継がれている
掛け軸がありますね。昭和四年に佐田ショウ
タロウという方が寄附された。佐田家とい
うのは、一八〇〇年代に能登から集団移動し
てきています。昔、白山の奥には鉾山があり
ました。その鉾山を目的とした一族大移動が
あったということです。白山地区の会長であ
る佐田さん、ご存知なことがあればお聞かせ
ください。

佐田 銀山、鉾山があつた当時、一度、神社
が火事で焼けているんです。それで今の町内
にあります。最近は何四回、一月八日、三月

八日、一月八日に、お酒を飲んで、掛け軸
に手を合わせてお祝いをしています。うちの
町内は一軒です。三軒、空き家で、なか
なが続けていくのは大変ですけれども、でき
る限り、この掛け軸を床の間に飾って行事をし
たいと思います。双葉親交会も高齢化なの
で、だいたいづらくなってきましたけれど
も。若い人もいないので、どちらも精いつば
い、頑張つて続けていきたいと思ひます。

まとめ

渡辺 下浜桂根のやまはげも、上新城小又・
白山のなまはげも、来訪神という位置付けで
とても縁起が良い古い歓迎祭といったもので
す。神格を備えた儀式として受け入れられて
いた、地域に定着してきた小正月行事です。
これは地域社会の一つの秩序が形作られてき
たことを意味します。子どもの教育、あるい
は、お嫁に來られた若い奥さんに、生活に対
する戒めのような意味もあったのかもしれま
せん。地域ではそれを喜んでいたというこ
とで、まさに地域住民のつながりがそこで生ま
れてきたのだらうと思ひます。伝統文化であ
る大事な行事が後世に長く伝え継がれてい
つてほしい、こういう思いしか私の口からは言
えないのですが。

藤原 ありがとうございます。今後、いまだ、再興していきます。よろしいでしょうか。

渡辺 藤原会長、本当にいろんな重要な立場を受け継いでいただきながら、大変忙しくされていますが、何とか復活に向けて、地域の意向をくんで頑張つてほしいなという個人的な思いがあります。また、上新城小又・白山地区は、二つの地区がつながって双葉親交会を結成したことで、地域にとつて宝物のような行事になっていると思います。

高橋 私たちができる限りはやりたいと思っています。頑張ります。

齊藤 文化は、なくすのは簡単です。やめればいい。けれども、継承していく、復活させるというのは大変な時間と労力がいるんです。そのエネルギーはなぜ必要なのかということを私は考えています。長い間伝承されてきたことを一つの文化として、私たちの先祖が何を考え、何を伝えようとしていたのかをしつかり受け止めることなのではないかと思うわけです。

やまはげ、なまはげを受け入れるほうにも理解してもらわなければならないことが今日で

は起きています。やまはげ、なまはげの「せりふ」、これも考えていかなければなりません。「泣く子、いだが」、「勉強しねえ子はいだが」とか、「悪いことをする子、いだが」などという定番のせりふは決して悪いわけではないですが、今子供があまりいないのにそれを言うのはどういうことなのか。子供がいないうちに入つても、そのせりふを言わなければならない、ここが大事です。悪を代表するもの（稲につく害虫病、人につく病氣、自然災害など）を、なまはげが来て、祓つてくれる。そして新しい年を迎え、より良い生活に向かつていくということに尽きると思っています。悪事を祓うことが「悪いことをしねえが」とか「泣く子、いねえが」という言葉に集約されています。この意味を理解してもらうことも大事です。「去年の作柄はなんとだ」という問答も必要ですね。われわれ（やまはげ）が来たから、絶対、今年は豊作になるという一つの予祝。言葉によつてそれを実現させようとする力、それを言葉と言いますが、そういうものがやまはげ、なまはげには備わっています。

やまはげ、なまはげはどこから来るのか？

齊藤壽胤

つづいて、「やまはげ、なまはげはどこから来るのか？」にてトークセッションとともに行われた齊藤氏の基調講演を再構成して紹介する。写真も齊藤氏によるものである。

伝統行事の激減について

実はこのさまざまな秋田に伝わる伝統行事などが今、衰退をしている、あるいは消滅するという事態が起こっています。これらを再び興してもいいわけなんですけれども、衰退の状況を、実体を見ながら検討し、新たな地域づくりをしていくことも一つの目標としています。今日は課題が多くて、これらを一気に解決する手だてはないと思われまふ。しかしながら、それにアプローチしていく方法は、いくつか考えられるのではないのでしょうか。そんなことを皆さんと共に二時間ばかり考えていきたいと思っています。

テーマとしてここにありますように、いたい「やまはげ、なまはげはどこから来るのか？」。「男鹿のナマハゲ」はユネスコ文化遺産として登録されていますが、その他の指定になっていない、やまはげ、なまはげはほとんどが衰退の状況が見られます。秋田県内において、これまで、相当な数の行事が行われてきました。秋田市地域では、私が三〇年ほど前に調査をしたときには二四カ所で行われていた。旧雄和町、旧河辺町を含めた秋田市地域ですと、その倍以上の数になりました。

現在では、本当にわずかしが残っていない。令和七（二〇二五）年現在、旧秋田市においては長浜、羽川、八田、榎田という地域のみ。どうしてここまでの減少が見られるのか。さらにこれらをなんとかとどめよう、復活させようといったときに、どういう手だてがあるのか。

私は、このやまはげ、なまはげの行事の本質を、われわれはもう見失っているのではないかと思われてなりません。今日は、「やまはげ、なまはげはどこから来るのか？」という問いを含めながら、その本来の有り様を考えていき、それが私たちにとつてこれから必要なのか、あるいは、もう少しあつてもいい、継承してもいいものなのか、というようなことが見えてくれば、その問題の検討じたいが、大きな前進になるのだと思います。

「ナマハゲ」は男鹿の地域で総称してそう呼んでいるわけですが、類似習俗が各地に伝承されています。やはりこれらは小正月という時期に行われています。小正月に、異様な姿、普段の私たち人間の姿とは違う格好をして、来る。例えば顔に、真っ黒な墨を塗ってケラを着ている。ケラはかつて農具にも使われた雨具ですね。蓑とちよつと違います。蓑は肩まであつて、ケラは肩の被いが少ししか

クロストーク

2025年11月1日（土）

13:00-15:00

会場 秋田市文化創造館 2階 スタジオA1

共催 秋田市農山村地域活性化センター
さとびあ+秋田市文化創造館

トークイベント「やまはげ、なまはげはどこから来るのか？」～下浜桂根のやまはげ、上新城のなまはげをめぐって～

日時：2025年11月1日（土）13:00-15:00

会場：秋田市文化創造館2階 スタジオA1

共催：秋田市農山村地域活性化センター
さとびあ+秋田市文化創造館

下浜桂根のやまはげ：藤原浩一、川村均

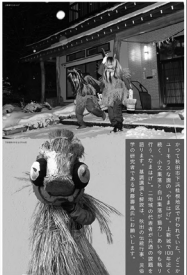
上新城のなまはげ：高橋浩樹、佐田稔

講師：齊藤壽胤

進行：渡辺知（秋田市農山村地域活性化センター
さとびあ）

人と人、人と地域を結んできた伝統行事が、高齢化や人口減少などで消滅する事態が起こっています。「下浜桂根のやまはげ」「上新城小又・白山のなまはげ」各行事を継承してきた関係者が、共通の課題を語りあい、取り組むべき地域づくりについてあらためて考える機会でした。

「やまはげ、なまはげ」は、秋田県内各地に伝わる伝統行事「なまはげ」の魅力を、秋田市文化創造館で紹介します。



「なまはげ」は、秋田県内各地に伝わる伝統行事「なまはげ」の魅力を、秋田市文化創造館で紹介します。

「やまはげ、なまはげ」は、秋田県内各地に伝わる伝統行事「なまはげ」の魅力を、秋田市文化創造館で紹介します。

79

78

ない。

ハゲダガ、ハゲダガ

秋田市の外旭川では、「ハゲダガ、ハゲダガ」と言つて家に入ってきます。「剥ぐぞ、剥ぐぞ」と言つて、結果として「剥げた」という意味です。こういう習俗が確実にありました。冬に火にばかり当たつていると肌につく「なもみ」、低温やけどですね。火斑は「ひだこ」と読みますが、「なもみ」あるいは「あまみ」と読まれることもあります。肌が真っ赤になつてくる。それらを剥ぐ、つまり、冬場において囲炉裏あるいはストーブにばかり当たつていて仕事をしないと肌にできるそれらを剥ぎ取るぞ、ということですよ。

「男鹿のナマハゲ」はその典型です。それが包丁を持つている理由です。包丁で剥ぎ取ろうと驚かす。脅すといましようか、訓戒を示して家を回る。もう少し仕事をしなさいと、怠け者の心を懲らしめる、勤労を促している。ついには豊漁や豊作をもたらす予祝をしているわけでありす。

明治中期の『羽陰温故誌』（近藤源八橋・明治一六―三六年）の書物には、秋田市の土崎に近い、飯田や飯島穀丁の村々で小正月の

晩に「生身剥ぎ」というものがあると書かれています。若者らが鬼神の姿をして、顔に墨を塗つて、蓑を着て、手に包丁を持って家々を訪れては大声を上げる。「生身つこ剥げだが、剥げだが、包丁つこ研げだが、研げだがよ」と唱え、酒を飽くまで食らい、最後に餅をもらつて帰るという習俗だったと書かれています。つまり、かつては秋田市の至る所で行われていた。

オト

こうした習俗では、けたたましく大声を張り上げ、激しく戸をたたきながら家々を巡り、中に入つていく。ユネスコ文化遺産に登録されている能代市浅内のナゴメハギは、拍子木や鉦をたたきながらやつて来ます。秋田市下浜羽川ではヤマハゲは竹の笛を自分たちで作つて鳴らして歩く。ピーという甲高い音がします。竹笛は、二つに割つて、笹の葉を真ん中に入れて鳴らしますから、かなり鋭い音がします。

外国でよく使われている角笛があります。あれは牛の角だと言つておりましたけれど。飯島付近ではそれに似た笛が使われておりましたが、最近やめてしまつて、その実物がどこにいったか分からないということです。秋

田市雄和の下黒瀬ではカラビビを使つていました。カラビビというのはホイッスルです。にかは市の赤石では、アマハゲは大鼓と鉦でドンドン、カチャカチャ、カンカンと打ち鳴らします。鉦というのは「土崎港ばやし」でもよく出てくる楽器のことです。つまり、いずれもこの習俗においては何らかの音を出して行く。

男鹿のナマハゲにも四角い箱というものがあつて、六方全てふさがつていいる木箱ですが中に何かが入つていいるらしくガラガラと音がします。文化年間（一八〇四―一八年）菅江真澄も記録していますから、江戸時代中期からそういうものを携えている。今日でも、いくつかの集落ではそれを脇に抱えて鳴らしながらナマハゲという行事をしています。常に何か音を出して行かなければならないという風習なんですね。ここは実に重要なところだと私は見えています。

例えば秋田市金足では「生身つこ剥げだが、剥げだがよ」とか「包丁つこ研げだが、研げだがよ」とか、「小豆つこ煮えだが、煮えだがよ」というように、青年たちが唱え言のように、ちよつと拍子をつけて歌いながら、仮面をかぶり、あるいは顔に「へそび」

といつて、昔の囲炉裏あるいはストーブに鍋やかまを置いておきますとそれに煤がつくわけですね。あの鍋の煤を顔に塗つて、行なつたんですね。

音

楽器で音を出す、あるいは戸をガタガタとたたく。これは単なる脅しではなく、神の訪問のサインです。皆様もまた、しばらく相手との交信がないとき、「音沙汰ないな」と言いませんか。昔から私たちはちよいと連絡をとる、これを音信と言つてきました。「音」に「信じる」です。この「音信」は「訪れ」という言葉に通じます。「オトヅレ」、音を連れてくる。

訪問することを「訪れる」と言います。どこそこの家を訪れる。今日は文化創造館を訪れる。その背景には、音を連れてくる、という意味があります。皆さんは訪問するときに家のドアをノックしませんか。あるいはチャイムを鳴らす。つまり「オトヅレ」である。なまはげは神の訪れ、鬼と言うこともできますが、音を連れてくるもの、だから、けたたましく大声を出し、笛を鳴らしたりさまざまな楽器で音を出す。

羽川の小さな竹の笛は、笹の葉を詰めて鳴らします。葉をリードとして、鳴らすわけです。私がそれに感動したのは、それが常緑樹だということ。竹はいつも青々としている。今日もこれから見ていただく、皆さんこの会場の左手のほうに提示してありますもの、今は杉の葉のようですけども、笹の葉を付けることもあります。羽川はまさに、あれと似たようなお面を作つて笹の葉を挟めておくんです。常緑樹はつまり、神様の依り代ともなる。「神」という木は木偏に神と書く木ですが、これも常緑樹です。こうした木を笹に代えて、つまり、竹に代えて春の訪れを表す、これが小正月の晩でした。

月

今日は「小正月」の風習が衰退してまいりました。残念ながら、小正月の行事などは、月遅れの小正月行事という形で、県内各地でわずかに行われる共同体の行事として、例えば「ぼんでん」、あるいは「竹うちかまくら」などのような行事しか残っておりません。大仙市の刈和野の「大綱引き」は、旧暦の一月一日、つまり満月の日に綱引きを行なつていました。現在は建国記念日の前の日、二月一〇日に変わつております。これはもともとお月さんが出ていなければいけなかつた行事



齊藤壽胤氏

望の「望」です。根底にそういう考え方があります。だから、お月さんでウサギが餅をついているんじゃないか。この「モチ」はお餅の「餅」、それと満ちる希望の「望」と合わさつて考えられています。今で言えばクレーターが、いかにもウサギが餅をついているような様子にも見えるわけでありすけれど。かつては非常に強く意味付けられていたわけです。だから、その日になまはげや、やまはげという行事をしなくてはいけない。

小正月というのは、私たちよりずっと古い時代の暦。中国から入ってきた太陽暦を採用する以前の暦日を重んじていた、月の満ち欠けによる、太陰暦です。ですから、私たちが「ツイタチ」と考えているのは「月が立つ」という意味です。望月を始まりと考えていたわけです。お月さんを見ていますと、望月、つまり満月から一五日たてば三日月になりますでしよう、そして新月になる。しかし、お月さんは消えません。再び満月になるんです。私たちはこういう月の満ち欠けによって生活をしてきた。こうした季節感覚は今日忘れられているというように思われます。

この月の満ち欠けの暦というのは文明がずっと出出した一つの文化だと私は思っています。

仮面の靈性

以前、私は男鹿のナマハゲ面をすべて調査しました。六〇数カ所、一つとして同じお面はなかった。現在はお面を彫る人も減りました。石川泰行さん、もう亡くなったかもしれませんが、息子さんがやっていると聞いています。お土産用に製作をしている方もいます。ですが、石川さんのお面は、誠にこの岡本太郎が言うような素朴で実にユニークな仮面だった。

例えばナマハゲは旧男鹿市地域において約六〇カ所でやっていますが、隣の集落を見る機会などないわけです。同じ日の同じ時間にやっているのですから。ちよつと隣に行つて見てくるなんてことはないし、出来ない。しかも、その仮面は作る時が決まっています、絶対に誰にも見せないようにしていたんです。それはなぜかという、やはり子どもたちに見られてしまえば、こんなもんかなんて思われては困るということもありますけれども。実は祭りにおいて仮面を自ら作ることは大きな要素なのです。それぞれ違いがあるということは今まで誰も分からなかった。自分たちの、これが本物のやまはげ、なまはげのお面だというふうに認識して、意識していい。つまり、仮面からも、その地域独特な靈性を感

ず。この精神性というものは大事にしなければいけなかったはずですが、残念ながら今はもう、そういう感覚はなくなつてしましました。わずかに残っているのは、お盆ですね。お盆も月遅れであります。八月十五日。もともとは七月十五日です。いいですか、一月十五日と七月十五日。ちょうど六ヶ月で分かれていた事に気付くでしょう。彼岸もそうあります。春彼岸、秋彼岸は三月と九月です。

お面

なまはげというのは、その年の初めの節目に行われる大切な行事だったということが分かります。岡本太郎は、一九七〇年に開催された大阪万博の地に「太陽の塔」をデザイン企画された芸術家ですが、彼は後に、彼自身が撮った写真をふんだんに納めた『岡本太郎の東北』という本を書かれております。二〇〇二年六月に毎日新聞出版より刊行された本ですが、それに男鹿のナマハゲについて載せています。文章をそのまま引用してみますと次のようです。

「私が「なまはげ」にひかれたのは、第一にそのお面だった。書物で写真を見て、こいつはいい。無邪気で、おおらかで神秘的だ。

じることができるといことです。

仮面の役割というのは大変重要です。仮面を制作することによって、なまはげという行事が成り立っていることをあらためて考えてみなければいけないわけです。今日では、藁など材料を手に入れるのがとても大変です。しかし、仮面制作の意味は大切だった。必要不可欠ということばかりではなく、もつと強い深い意味があることを認識しなくてはいけない。やまはげ、なまはげというのは、この根底に深く、私たちの生活空間そのものが凝縮されていると言っている。

五穀豊穡という信仰

それは一つの信仰だと思われます。この信仰というのは端的に言えば五穀豊穡です。あるいは大漁満足という信仰で、素朴な信仰であります。今年の世相では実にお米が足りなかった。どうですか。五穀豊穡であれば、潤沢にお米が手に入るわけです。しかしながら、ないとしたら、大変なことが起きるんです。私たちは少ない農業人口に頼っているわけですので、それが五穀豊穡にならないければ、なおさら一体どうなるのかということが、考えられてきたわけです。

しかも濃い生活の匂いがする、と感心した。ところが、男鹿に出發する前に、秋田でもらった観光パンフレットを見て、がっかりした。東京でもどこでもいい、月みな神社・仏閣が辺りにある鬼の面とちつとも変わらなようなのをかぶつたなまはげが、れいれいしく印刷されてるのだ。

何も普通でできなや駄目だとは言わない。お面がどんなにモダンになったって、構やしないのだ。それが彼らの現実生活、そして夢の上から、創造的な情熱によって作られたものなら。だがどこにもあるような型通りの鬼の面を見せられるくらいなら、東京でお神楽を見物してる方がマシだ。」

こんなふうに指摘しています。もともとこういうなまはげなどのお面は祭りをする連中が手作りしていたものであつて、ここが実は大事なところだった。皆さんの右手（展示）のお面を見て下さい。この大きなお面は手作りなんです。木のお面も、もともとは手作りで、機械で削っているわけではありません。入念に木の皮で下地を作り、あるいは、ざるに紙を貼り、不細工で、ずでかい、素朴で官能的な、鬼気迫るなまはげのお面を出現させます。まるで魂が込もっているような。

素朴でありながら、なまはげ、やまはげは、私たちの死や生きるといような、根底にあるナイーブな信仰を携えていると言つてよいかもしれない。悪霊を祓つて、豊作をもたらすという神の姿が、やまはげ、なまはげには見られる。そこを忘れて、単に訓戒をして歩く、子どもたちを戒めて歩く、そういうことばかりではないことを見て取らなさいけない。

今日農業では、農業機械、肥料や農薬というものがたくさんあるから、以前より心配しなくてもよくなりました。しかし、たつた一つ、私たちがコントロールできないのは天候です。雨が降つてほしいとか、長雨によつて洪水にならないようにしてほしいなどという祈りも、切実な問題になつてきています。そこで一年の初めに、今年の豊作を祝う、「予祝」という観念が、やまはげ、なまはげという行事の中に全て入っている。その表れがこの仮面であります。このように本質を見ていかないと、行事そのものも続いているのは難しいのではないかと思います。

様々な来訪神

さて、ここからはスライドによる資料を見えていきましょう。

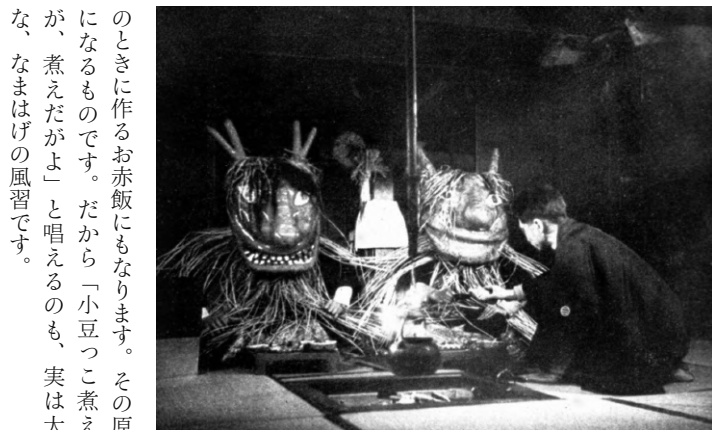
まず、日本における来訪神の分布は北から南、日本列島、ずっとあるんです。北といっても、北海道は残念ながら、少し新しい文化なものでこの分布図には見えませんが、ところが、秋田県出身の人が、北海道の歌志内という所ではなまはげをやっております。言ってみればなまはげの伝播ですね。そして東北地区は青森県からぐるっと回って太平洋側にもありますね。そして日本海側はもちろん、秋田市から山形、能登半島、それから九州、沖縄列島のほうに分布しています。

先ほど言いました「ハゲダガ」は秋田市内にあった行事ですが、今日はありません。現在、残っているのは能代のナゴメハギ、下浜のやまはげ、そして金浦のアマハゲ、そして象潟のアマノハギという、それぞれちよつとずつ変わった名前ですが、語源は「ナモミ（火班）を剥ぐ」ということになります。秋田県の分布図を見えますと、男鹿は約八〇カ所。男鹿地域というのは旧若美町、それから旧天王町も含めておりますので八〇あります。旧秋田市は、やまはげ、なまはげの伝承地は一四と書いてありますけど、雄和地区にいきますと二六カ所ありました。この特徴の一つに海岸沿いの全部日本海沿いに分布することです。

昭和二五年の男鹿のナマハゲを見てください。面白いでしょう。顔なんか、ものすごくでかくて。こういうのを岡本太郎は非常に興味深く見たと思われます。これ、二股の角です。こちらのほうは数本の角ですね。次は面白いんです。この男鹿のナマハゲって、昔は本当に鉾を持っていました。ナマハゲは農耕に関連しているということです。こちらは包丁です。分かりますでしょうか。

これは勝平得之が、男鹿のナマハゲを描いた版画であります。今は大みそかにやっておりますが、実は旧暦の小正月、満月の日にやっていた証拠です。戦後、暦が変わっていったためですよ。

秋田市のやまはげも、男鹿のナマハゲの一部でも、「ナマミつこ研げだが、剥げだがよ」、「包丁つこ研げだが、研げだがよ」、「小豆つこ煮えだが、煮えだがよ」と言います。この小豆とは何を意味しているのでしょうか。実は小正月の行事として小豆粥を食べる風習がありました。すると、ご飯（米）は、いわゆる平野で作られるものです。小豆は畑作ですね。稲作と畑作、この二つの根本的な日本文化が小正月で融合して現れているのではないかと。小豆というのは真っ赤です。お祝い



柳田國男・三木茂著『雪國の民俗(復刻)』第一法規半 1977年

これは大正六年の旧河辺郡のやまはげです。旧雄和町の北部の田草川という地域じゃないかと思うんです。これ、面白いです。これは馬柵棒^{うまざらぼう}といって、馬が家の中から逃げ出さないように柵を立てた、その柵の横棒で

ちゃんとあるんです。その地域から、やまはげがやって来る。今日のやまはげはどこから来るのかという、一つのヒントにもなるかもしれないですね。やまはげは「タノサノタツコ、来たぞ」なんて大声で叫ぶわけですよ。

雄和町寺沢に悪魔払いの、いわゆる棧俵^{さんだわら}の面があります。棧^{さん}というの「蓋^{ふた}」という意味です。俵の蓋です。これに南蛮（赤唐辛子）とヤマジルシの杉の葉を付けています。「手、三つ叩けば、いつでも山から来るからな」と言う。やまはげは実際には一日の晩しか来ません。親たちは子どもが悪いことをすると「今、やまはげ、呼ぶからな」、「手、三つたたくぞ」と言いますね。二つ叩けば、大抵の子どもは「やめてけれ」って言って謝ってきます。

地域の神社は少し小高い山崎山という所にあります。これは山崎山から下がってくるシーンです。家の中に入って、子どもたちに訓戒を言いつけます。しかし、ここでは「泣く子、いたが」というよりも、「悪魔祓い、悪魔祓い」と最初に言って入ってくるのです。その後で訓戒をたれるのです。やがて家の主人は、お正月のお膳で、まずは「よく来てくれた」となだめ、やまはげを歓待する。本来、



河辺郡役所編『川邊郡誌』1917年

す。太い棒で、こういうものをやまはげが持つて、恐怖感と威厳を保たせている。このお面を見て下さい。サンダロボッチという米俵の蓋^{ふた}をうまく作っていたんですね。これは小刀です。こっちは何だと思えますか。算盤^{そろばん}です。ガチャガチャ鳴らして歩くんです。そして子どもたちの前に行くと、「算盤、おいてみる」と言う。そろばんをはじくことを、「おく」と言いますね。ちゃんと勉強し



秋田市雄和のタノサのタツコ



秋田市雄和のタデノシタのバラザエモン

ているか、これくらいやらなきや駄目だよという訓戒を示す。これはタラ（米俵）。悪い子どもをこの中に詰めて、山に連れていって食ってしまふぞ、と脅す。

この仮面には名前が付いています。旧雄和町の館^{クラシク}ノ下の荊棘^{バラザエモン}左衛門。館^{クラシク}ノ下というのは、下黒瀬の白根館^{クラシク}下の沢合いにあります。これは田^{タノ}ノ沢のタツコ、田^{タノ}ノ沢という地域も



旧雄和町善知鳥のやまはげ

これは家の中で、大勢をもつて最後にお祓いをしていただきます。このお面は、同じく沖村という所。寺沢からすぐ近くです。子供たちは「ごめんしてけれ、もう悪いことしねえから」と、泣きながら言っています。悪態をついたり、子どもたちが勉強をしなかったりすることが、悪いことなんだというふうな。悪いことというのは、自分で行動するわ

これは沖村の仮面で、藁にスプレーペンキで色付けをしているところなんです。もともとは真っ白い。その隣の地域では何も塗らない仮面です。終わるとこのように藁を、電信柱や集落の入り口に掲げている。今日ではなかなかできないようになりました。交通妨害になるということ、本当に残念です。何とか工夫して、一年間、つるしておくということも交通安全の祈りにつながるかもしれない。悪霊が入ってこないかもしれないです。

竿燈を「ねぶり流し」と言うでしょう。実は眠気を流しています。皆さん、「ネブガキ（居眠り）してる」と言われたらどうですか。仕事をサボってるように考えられるでしょう。つまり、悪いことは、外から来て、自分の体に入って眠気を起こす。それを取り除いて、秋の収穫に向けてやるのが、ねぶり流しの行事の本質です。だから、「もう悪いことしねえから、ごめんしてけれ」というふうに言う。

けでありますから、自分のせいだと思っている。実は昔から、病氣もそうであります。外から来る悪霊によって自分がそういう状態に現れるという考え方をしてきたのです。そのためにやまはげが祓つてくれると思っていたのです。



秋田市雄和本田のやまはげ



秋田市雄和沖村のやまはげ



秋田市雄和平尾鳥の悪魔祓い



秋田市雄和寺沢の悪魔祓い

ここでは神様と同じようにもてなします。実際はこのやまはげは何かを食べるということはないのですが、お酒は相当、いただくのだと思います。何しろ一人で一〇軒くらい回りますから。一軒で一杯いただいたら、一〇軒回ったら一〇杯です。それくらいやまはげは平気だということです。神様ですから、お酒はいくらいただいてもいいですね。

やまはげの家々回りが終わると、すぐさま、やまはげの衣装であるケデはその日の晩



やまはげは主人から饗応を受ける(旧雄和町寺沢)

のうちに神社のすぐ脇の所に結わえておきます。これは一年中残しておきます。次の朝に撮った写真を見ていただけると分かりますように、集落の道路を通るときに見えるわけですね。「あそこにやまはげ、いるからな、すぐ今、来るよ」と脅します。一種の祓いの意味を持つ。

次には雄和町の平尾鳥という地域の山です。これを見てください。まるつきり藁をかぶっているように見えるでしょう。これもや



やまはげのケデは神託の杉におさめられる(旧雄和町寺沢)

まはげ面の一種でゲボシと言います。「今年の山だば、雪ふけえから、きつと豊作になるぞ、おやじ、心してかれ」、こういうせりふを言つて歩くわけです。当然、やまはげは山から来るものだと思うんですね。そして、秋田県ではほぼ全域にわたつて、雪が多ければ豊作になる。つまり水が潤沢だということ、これは自然観とつながるところがあると思います。春になると山の雪が融けて田にそぐからでしょう。

これは、やまはげ、なまはげであります。先ほど言ったように、神様を歓待するわけです。なまはげをやっている人たちを歓待するわけでなく、神様を、です。まずは訓戒しているはずで、ちゃんと勉強しているかとか、お利口になっているかとか。そうすれば、お父さん、あるいは、おじいさんやおばあさんが出てきて「うちの子は絶対、そういうことはしないし、今年一年、真面目にやるから大丈夫だから」、「その代わり、このお餅をどうかやまはげさん、持ってつてくれ」と言つて、お餅をやまはげに供える、という意味です。

あがない

いいですか、その子どもの悪い態度・行ないの代わりに、どうかこれを持っていってくれ。これは一種の贖^{あがない}ですね。こういう風習が実はちゃんと残っていました。

前郷（秋田市豊岩）のやまはげは、このように夜ふすまといつて、丹前つて分かりますか、夜具であるドテラのような継ぎはぎを使つて、昔は本当の荒縄でやつていました。細い荒縄だったのですが、最近は立派な太い縄にしました。お面は昔から伝わるものです。

髪はモクです。八郎潟なんかで昔採れていた

五穀豊穡を祈ってくれる

やまはげ、なまはげというのは神に近いわけです。異界から来ます。奥深い山も一種の異界と感じていました。その異界というのは、普段私たちの知らない不思議な世界だと思つてきたわけです。異界は、私たちの目に見えませんが、異界のほうから、われわれの所は見えます。だから、やまはげ、なまはげは何でも分かっているのです。

子どもたちにとつてみれば、なんでそんなに分かっているのか。子どもたちがよく訓戒されるのが、「この間のテスト、悪かったんじゃないか」。なんで、やまはげ、なまはげつて、よく知ってるんだろ。実はこのやまはげ、なまはげは、その家に入る前に父さんから情報を得て、「うちの子ども、こ



笹を背に差し訪れるやまはげ（下浜羽川）



秋田市豊岩前郷のやまはげ

た海藻を乾燥させて使うものです。かつては、このモクでお尻を拭いたりしていました。イズメ（嬰語）なんかも下に敷いて、子供がおしっこしたときのおむつとして使っていたんですね。これを髪の毛の代わりにします。

この写真のシーンでは「ごめんしてけれ」と言っていますかね。親は「おつかねえで、

の間、勉強しなくてテスト悪かったから、少しこらしめてけれ」なんて、打ち合わせをしているんですね。というようなオチもあるわけですが、ともかくやまはげはなんでも知っている。世の先（今年の作柄など）も予知していると思われていることを意味するものです。

異界というのは、私たちは知らない世界でありますけれども、そこから訪れる神様は、異様な形をしている。私たち人とは違うんだと。神の姿というのは、本当は誰も見たことがありません。だから、なまはげのお面も多様に違います。そして「オートツレ」る。音を出して、祝福を与えてくれる、こういう習俗であります。五穀豊穡を確かにもたらしてくれる、そこをきちんと理解しなくてはなりません。稲作が豊穡であるならば、私たちは幸せです。豊かです。それをもたらししてくれるものだと考えます。そして正月に悪霊を全てお祓いをして、一年、安泰であるというふうな祈りが込められているのです。

終わりの時間が来ましたので、これで私からのお話は一応とじたいと思います。ありがとうございました。

おつかねえで、「子供たちは「ちゃんと勉強するから、何とかごめんしてけれ」、父さんは「俺もパチンコばかりやんねえで、真面目に働くから」と言っていたような……。やまはげに訓戒を受けると皆、こんな風になると思います。

これは羽川のやまはげです。「やまはげさん、やまはげさん、どこから来たすか」、「今、山が来たんだ、分かったか」と言っている。羽川のやまはげは、先ほど竹で笛を鳴らすと言ったように、笹を背中の所にとつきり挿してやつて来るんです。竹の笛ばかりではなくて、この背中の笹がガサガサするものだから、ものすごく怖い。

この写真は独特なお面です。ざるを下地に作つたようなお面です。木製です、着色して作つてあります。このお面は白い般若面のようですね。羽川はご承知のとおり、集落の世帯数も多いものですから、いくつかに分かれています。その一部では、男鹿系のお面を使っている所もあります。これは男鹿のほうから購入してきたと言っておりましてけれども、そこでもちゃんと笹を背中にに入れて登場します。



秋田市下浜羽川のやまはげの面



秋田市文化創造館の成り立ちと記録

—— 藤田嗣治と勝平得之のこと

熊谷新子

- ・秋田市文化創造館の成り立ち
- ・藤田嗣治「秋田の行事」
- ・勝平得之「秋田十二景」
- ・秋田市文化創造館を拠点にした情報発信

秋田市文化創造館の成り立ち

この建物は、一九六七年に秋田県立美術館・平野政吉美術館として開館しました。秋田藩久保田城の跡地である千秋公園のたもとに位置しています。独特な形の屋根は「日本宮殿流れ屋根式」といいます。屋根と円窓は、藤田嗣治の大壁画「秋田の行事」を展示するため、吹き抜けの大空間に自然光が降り注ぐように設計されました。どこか寺院のような、教会のようなつくりは、藤田の意見が反映されているそうです。

二〇一三年に、県立美術館としての機能が、広小路の向かい側にある安藤忠雄建築

の新美術館に移行して、ここは閉館しました。二〇一五年、秋田市が中心市街地における「芸術文化ゾーン」の充実を図るため、この建物を新たな文化施設として活用することに決めました。改修工事は、耐震補強や、一階の外壁をガラス窓に変更し、県立美術館だった頃から鬱蒼と繁っていた周囲の木々も伐採して、光を取り入れやすくなりました。二〇二一年三月二一日、秋田市文化創造館としてオープンしました。

大壁画「秋田の行事」について

この建物の建設は、秋田市で米と穀物の商いを営み、県内有数の資産家だった平野家の三代目、平野政吉（一八九五―一九八九年）が自らのコレクションの公開を決意したことに はじまります。コレクションの目玉は、藤田嗣治が秋田に滞在した一九三七年二月二一日から三月七日の間、一七四時間で書き上げた大壁画「秋田の行事」です。高さ三・六五m、

幅は二〇・五mあり、現在も秋田県立美術館で常設展示されています。

壁画は、米俵六〇〇〇俵が収納できる平野家の米蔵で制作されました。完成後は南側の壁を壊し、壁画を搬出しました。その時代に入手可能だった一〇〇ワット程度の白熱電球を米蔵にたくさん吊りして、薄暗がりで描かれたといいます。

藤田嗣治と平野政吉の出会い

一九三四年、東京の二科展の会場で、平野と藤田は初めて挨拶を交わします。一九三六年六月に藤田の妻・マドレーヌが急死し、その鎮魂のために美術館の建設を平野と藤田は構想しました。藤田は、マドレーヌを描いた「眠れる女」を抱いて夜行列車に乗り、同年秋田にやってきたといっています。平野は藤田の大作を多数購入し、平野政吉コレクションの核である藤田作品は、一九三〇年代の藤田の



秋田市文化創造館 2021年 写真：瀧本幹也



写真：瀧本幹也、デザイン：服部一成

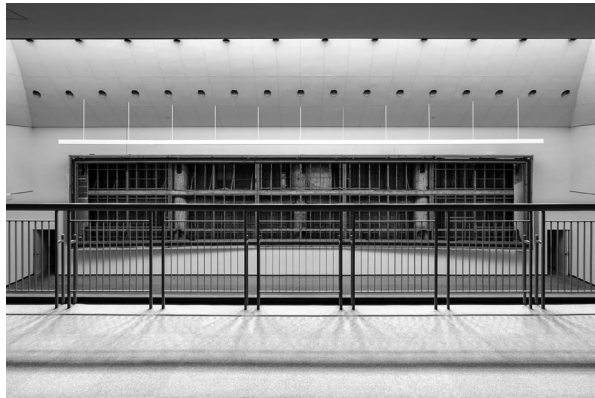


秋田市公式サイト「芸術文化ゾーン」より ※1

画業を俯瞰できる作品群となっています。

ひえはまさん 日吉八幡神社まぼろしの美術館

二人が構想した美術館は、壁画完成の翌年、一九三八年春に秋田市八橋の日吉八幡神社境内にて着工しました。しかし日中戦争の影響で、建設工事は中止となります。まぼろしとなった美術館の図面が、近年、平野家親族の家から発見されました。この図面を



「秋田の行事」を新県立美術館に移設するため剥がしたところ 写真：草湊裕

もとに、秋田県立大学建築環境システム学科の込山ゼミが、美術館の内観と外観のCG映像を製作しました。ガラス屋根だった美術館が日吉八幡神社境内のどこに建設され、壁画がどのように展示される予定だったかを映像と模型で明らかにしています。この研究の成果は、二〇一五年、そして二〇二一年五月に県立美術館が開催した展覧会で発表されました。※2

秋田県立美術館とランスの礼拝堂

ここが着工されたのは一九六五年二月。藤田は晩年、フランスシャンパーニュ地方の都市ランスで礼拝堂を建てる計画に着手しますが、それも一九六五年です。藤田は一九四九年に日本を出て以来、一九六八年一月に亡くなるまで一度も日本に戻りませんでしたので、この完成を見ることはありませんでした。以上につきましては、お手元に配布いたしました開館記念冊子に、藤田嗣治の日本随一の専門家で今は兵庫県立美術館の館長でもある林洋子さんに詳しくご執筆いただいておりますのでどうぞ一読ください。

「秋田の行事」に描かれていること

「秋田の行事」は、二〇一三年に新しい県立美術館に移設されました。私はこの創造館



CG制作提供：秋田県立大学建築環境システム学科・准教授込山敦司氏

のスタジオA1に「秋田の行事」があった頃見たことがあります。私以外人はおらず、薄暗くて、照明があつたかは覚えていないけれど、冬の自然光だけのような感覚で、厳かで、画面の中の民俗の喧騒が、群衆の感情が、折り重なった時間が、瞬間的に密封されたようだと感じました。

画面中央の橋を境に右側が「祝祭」＝「ハレ」、左側には「日常」＝「ケ」が描かれています。中央の橋は今もあります。明日、京都芸術大学の院生の方々がフィールドワークする予定の、奈良時代から平安時代の城柵、かつて秋田城があった遺跡を通る羽州街道からちよつと脇道に入り、菅江真澄のお墓に向かう途中にある伽羅橋（香爐木橋）です。

画面右から、日吉八幡神社の山王祭、太平山三吉神社の梵天奉納、竿燈祭のクライマックスが描かれています。梵天の背景には太平山が見えます。画面左には、米俵が乗った馬橋、野菜を背負った女性、雪室、油井（ゆせい）、酒樽等。犬もいます。

平凡社ライブラリーから出ている藤田の『随筆集 地を泳ぐ』という本に「雪に埋れる町」（一九三八年二月）というエッセイが載っ

ています。角館で雪室を見つけ、牛若丸のような稚児鬘の娘が遊んでいる場面を藤田は印象的に綴っています。「かくも秘れた、静かなこの室程、私の真髄を休ませてくれた試しはなかった。質朴そのものの女子供は、紺飛白の肩あてに棒縞の袖なし姿で、東京の客をねぎらつてくれる」。滞在中に藤田が子どもたちを撮った写真も残っています。

東京藝術大学所蔵「藤田嗣治資料」による

『藤田嗣治日々の記録』

二〇一〇年、藤田嗣治に関連する資料が、東京藝術大学に寄贈されました。前年に九八歳で亡くなった君代夫人が保管していた遺品のなかから、藤田研究に必要であろうと判断された資料類です。東京藝術大学はこれを藤田の『日々の記録』と名付け二〇二二年に公開しました。※3

この『日々の記録』には一九四一年から一九四六年の五年間の日記は含まれていません。一九四九年三月の渡米以前に、意図的に処分したといわれています。一九三七年の日記の後半も、墨で消された部分が散見されます。一九三七年というのは、二月から三月にかけて「秋田の行事」が描かれた年です。七月の盧溝橋事件をきっかけに戦時色が急速に広ま

る、際どい年でした。墨が薄く、消された文字が判読できる箇所には、乃木將軍の肖像画制作や、千人針にまつわる記述があるようです。

藤田の秋田滞在時のメモ

藤田が秋田に訪れるようになった、その記録も残っています。一九三五年の七月二一日には新潟から秋田入りし、二二日は十和田湖に宿泊しています。

一九三六年の三月九日には「現代日本」の撮影のために来秋、さらに七月、八月、九月、十一月には、壁画制作の調査のため、一週間から一〇日間ほど、秋田に滞在しています。「秋田の行事」を描いた一九三七年は二月二〇日から三月九日まで。ひとことメモ程度ですが「今日は絵のどの部分を描いたか」が記録されています。

1937年（昭和12年）51歳

2月20日 「秋田行に決定し鶴田と上野に九時十分発の汽車に落ち合います」
2月21日 「朝九時より仕事にかかる事として行く、画を大工大勢よんでたてに置かせ足の台等作らせて昼電気なく それでも



勝平得之 上：「外濠夜景」1929年 下：「秋田風俗十題」のうち「ささまき」1942年



ポストカードセット
『勝平得之「秋田十二景」小型画集』
秋田魁新報社 2022年

を制作する作家がいました。勝平得之という
木版画家です。

「外濠夜景」は、千秋公園の入口となる、中
土橋通りから見た風景を描いた作品です。皆
さんここにいらつしやる時に通ってこれれま

したね。創造館と隣の芸術劇場の間にある、
千秋公園へと続く道が中土橋通りです。三日
月と人力車。夜、創造館の遅番勤務を終えて
帰る時も、このような感じですよ。人力車が今
はスケボーをする少年とか。三日月がのぼつ
ているあたりに今は高いビル少しとそれと三

角屋根に十字架のある教会が見えます。勝平
の中央展の最初の入選作です。秋田魁新報社
からこの作品を含む「秋田十二景」の絵葉書
セットが発売されています。藤田の「秋田の
行事」に描かれている日吉八幡神社と太平山
もこの十二景に入っています。ここからすぐ

馬方と馬人物三四人かき出し
つるたそりをかき出させる」
2月22日 「竿燈のデッサン 太鼓とた
たく人 二組 竿を腰かたに
置く人等かく」
2月23日 「竿燈かく 老母 蛙の辺かく」
2月24日 「竿燈 提灯等」
2月25日 「雪室の辺」
2月26日 「犬等かく」
2月27日 「朝梵天を見る、雨ふらず十
一時三吉神社太平山、夜デッ
サン梵天かく」
2月28日 「梵天かく大がかりなり」
3月1日 「馬二匹等仕上げ 右端の人
物等盛んにかく」
3月2日 「鎮守祭の下図で 後すがたの
娘小児だく等面白く出来る」
3月3日 「秋田鎮守祭のところかき芸
者をとりはやし見物人小児の
はなかなでやるばあさん母さ
ん等かく大に進捗して今日帰
京ものばしてもう三四日で仕
上げる事とす だがし等たぐ
さんかいて画く事とす」
3月4日 「仕事」
3月5日 「仕事」
3月6日 「鎮守祭の方を大に一人でかく」

3月7日 「二体に地面を仕上ぐ 雪等」
3月8日 「朝十時仕事始めに行き 多
少、さしこ、風、お面をと
り去る等仕事」為秋田 平野
政吉 嗣治 自二月廿一日
至三月八日 時間百七十四時
間完成 のサイン大壁画にし
て 秋田犬貰いて夕方五時廿
分夜行 鶴田と三人下段寝台
にて帰京する事となり」
3月9日 「朝七時五十分東京へ着」

その後の藤田
一九一三年に渡仏し、一九三三年に帰国し
た後、一九三七年に日中戦争が勃発。「秋田
の行事」において試みたような「パノラマの
群像」と「公共性」というテーマは、戦時
下の「作戦記録画」へ展開していきました。
一九三七年八月には「千人針」、四一年には
横四メートルを超える「^{はる}ハルハル河畔之戦闘」、
四三年には二〇〇号の「アツツ島玉砕」を発
表しました。「アツツ島玉砕」は東京国立近
代美術館で見ることが出来ます。褐色の凄惨
な図の中に紫の花が描かれているのを見つけ
てみてください。

秋田県立美術館「ロートレックとベル・エ

ポックの巴里 1900年」
いま県立美術館では、「ロートレックとベ
ル・エポックの巴里 1900年」という展
覧会が開催中です。※4吹き抜けの二階に展示
されている「秋田の行事」と向かい合うよう
に、三階に一九三七年のデュファイの「電気
の精」というパノラマのリトグラフが配置され
ていました。パリ万博博覧会で発表された油
彩壁画の1/10サイズの二〇枚組の版画です。

ギリシャ神話のオリンポスの神々、ゼウス
の雷から、ニュートン、エジソン、キュリー
夫人、レントゲンまで、一一〇名の、エネル
ギーと光を追求した、科学の進歩に貢献した
科学者、哲学者、技術者がパリの街並みを背
景に描かれています。デュファイは、鮮やかな
色彩と踊るような筆致で、エッフェル塔や凱
旋門などのランドマークとともに表現しまし
た。ちなみにピカソの「ゲルニカ」も同じ
一九三七年の万博で発表された作品です。「ゲ
ルニカ」はスペイン館に出品されたそうで
すが、当時の多くの人が戦争の悲劇を描いた
「ゲルニカ」に背を向け、デュファイの「電気
の精」を見るために行列を作ったそうです。

勝平得之
一方、同じ頃、秋田には、こつこつと版画

その旭川沿いの街角も描かれています。

勝平得之記念館がある秋田市立赤れんが郷土館は、旧秋田銀行本店本館です。クラシックな洋館で、秋田の伝統的工芸品である秋田銀線細工なら「現代の名工」の進藤春雄さんの作品の他、漆の生駒塗りなども展示しています。

勝平の連作

勝平得之は、一九〇四年生まれ。秋田市で紙漉と左官を職とする家に生まれました。少年時代は家業を手伝い、その紙に版画を摺ったそうですが、竹下夢二が好きだったようです。一七歳の頃浮世絵を見て、版画にひかれ、独習しました。その頃木村五郎について木彫技術を学び、秋田風俗人形、秋田犬などを製作して生計をたてながら木版画をつくりました。

終始、秋田の生活・風俗を題材として豊かな作品をつくりました。歌川広重が好きだったそうです。勝平は、シリーズものが多いです。歌川広重「名所江戸百景」の一一九点はネット上の地図で場所を特定できるようになっていますが、広重は「東海道五十三次」「富士三十六景」「近江八景」などのたくさん

の風景画シリーズを発行しています。勝平に連作が多いのは広重の影響もうかがえます。

「秋田十二景」（二枚、一九二八―三八年）、「千秋公園八景」（八枚、一九三二―三七年）、「秋田風俗十題」（二〇枚、一九三九―四三年）、「花四題 春夏秋冬」（一九三八―三九年）、「舞楽図八部作」（八枚、一九四三―四九年）、「農民風俗十二ヶ月」（二枚、一九四九―五一年）、「米作四題」（一九四九―五二年）など。「秋田十二景」は完成させるのに一〇年かかっているのですね。

一九三五年、秋田県を訪れたブルーノ・タウトと知り合いになり、勝平の作品が世界に紹介されました。勝平がタウトの著作『日本の家屋と生活』（一九三七年）の挿画を手掛けました。ケルン東洋美術館には代表作およそ七〇点が保存されているそうです。見てみたいですね。

藤田の「秋田の行事」が描かれた頃、勝平も、横長サイズの群像を描いています。「櫓」（一九三六年）や「造花」「七夕」（一九三七年）など。日本が戦時体制に突き進む中、秋田の人々の日常生活をこつこつと彫り、刷って、制作をしていた姿勢は驚嘆に値すると思います。とても素晴らしい作品です。

ぜひ、赤れんが郷土館でご覧ください。

「ささまき」（一九四二年）で描かれているのは、風の通る、気持ちよさそうな家、幸せな家族の情景です。この「秋田風俗十題」には「いろり」（一九三九年）という作品も含まれています。勝平は一九七一年一月になくなっていますが、「叢園」第七十八号（昭和四十六年四月三十日発行）に掲載された絶筆「ふるさとの自然」では、次のように答えています。「昔と比べて、あなたの生活から姿を消した自然は？ 復活させたいものは？」「一家の和楽をともし、家の中心地になる『いろり』が一般家庭になくなった事。（略）『いろり』火が甚だなつかしい。」

記録することのひたむきさ

「大日堂舞楽」は、国威発揚の意で、むしろ奨励されていました。勝平は、戦時下、伝統行事の様も肅々と記録しています。藤田が戦地に赴いて戦争記録画に精を出していたのとは対照的です。

ブルーノ・タウトらとの交流を通じて、自らの制作における、民俗学的な価値を意識するようになったのではないかと思います。現在の秋田には油谷満夫さんという蒐集家がお

います。

新たな一冊

伊藤俊治先生と石川直樹さんがこの度刊行された『秋田——環日本海文明への扉』には、石川さんが撮影した現在の秋田の伝統行事や文化遺産が多数掲載されています。

石川さんは、（二〇二四年）十月四日に、世界八〇〇〇m峰の十四座、最後の山であったシヤパンマに登頂され、十四座を全制覇されたばかりで今日ここにお越しになつています。

伊藤先生は、秋田の文化的な歴史の魅力を語りなoshi、秋田の新しい読み方を提示してくださいました。継承されてきた知性や運動が、こうしてまた新たな一冊として再生されたことがとても嬉しいですね。

当館のウェブサイトに「聞き書き」に挑戦させていただいている「あこがれのひと」というインタビュー連載や、事業レポートを掲載し、写真とテキストでこつこつと記録しています。よろしければ読んでいただけたら幸いです。

- ※1 秋田市公式サイト「芸術文化ゾーン」
<https://www.city.akita.lg.jp/shisei/machizukuri/1011483/100529/1002910.html>
- ※2 「藤田嗣治と平野政吉 まぼろしの美術館 1926-1938」会期：二〇一五年一〇月三日―二〇一六年一月一七日、会場：秋田県立美術館「藤田嗣治 秋田で見た建築と風景」会期：二〇二一年五月一―七月四日、会場：秋田県立美術館「ルートレックとベル・エポックの巴里」一九〇〇年、会期：二〇二四年一〇月五日―十一月五日、会場：秋田県立美術館
- ※4 「東京藝術大学所蔵藤田資料による 藤田嗣治 日々の記録（東京藝術大学大学美術館／二〇二三年）
<https://museum.geidai.ac.jp/>

参考文献

- 林洋子監修『旅する画家 藤田嗣治』（新潮社／二〇一八年）
- 林洋子監修・著「もつと知りたい 藤田嗣治生涯と作品」（東京美術／二〇一三年）
- 藤田嗣治著「随筆集 地を泳ぐ」（平凡社／二〇一四年）
- 『勝平得之記念館作品集』（秋田市立赤れんが郷土館・勝平得之記念館編集・発行／二〇〇一年）

協力

公益財団法人平野政吉美術財団、秋田市赤れんが郷土館、秋田市企画調整課

本稿は、当館にて二〇二四年一〇月二六日に行われたラーニングプログラム「秋田京都惑星特急便」での講演を元に再構成したものである。

られ、東北の農村の民具や日用品もたくさんお持ちです。骨董として高値がついたものを集めるのではなく、捨てられそうなものをあげると言われたものをすべてもたらってきたといえます。ものが残っていることも重要ですが、実際の生活でどのように使われていたか、具体的な営みのシーンが絵で残っているのはとても貴重なことだと感じます。勝平の作品には生きる喜びや力が描かれています。自分が版画で、秋田を残すんだというひたむきさ、真面目さ、誠実さの源は、何だったのだろうかと思います。

秋田市文化創造館情報紙「そうする？」

秋田市文化創造館を拠点に、今どのように日々の営みを記録し発信しているのか、最後にに少しだけ紹介させてください。ニュースレター形式の情報紙「そうする？」（デザイン：服部一成、榎本紗織）は、開館した二〇二一年より年二回発行しています（二〇二五年度発刊の9号よりA5サイズの冊子へとリニューアル）。館内外で行われた事業、出来事、周辺地域や秋田の魅力的な人物や場所の紹介、当館に招聘された作家の活動を掲載しています。普段、利用者の皆様の活動を支えるスタッフによる原稿も掲載し、スタッフの個性やあたたかみも発信できればと心がけて

語りの世界へ

工藤千咲（秋田昔ばなし大学再話研究会）

「そう、そう」と、合いの手を入れながら幸せそうなお顔で語りに耳を傾ける小澤俊夫先生、秋田昔ばなし大学再話研究会、最後の一コマだ。

私が語りに出合ったのは、秋田市立中央図書館明徳館で行われた故市川早苗さんが講師を務められた講座「子どもの本の学校」だった。講座終了後、修了生で「愛炉辺倶楽部」を立ち上げた。「愛炉辺倶楽部」は、素話、わらべうた、手遊び、絵本等を学べる場で、2025年に30周年を迎えた。私は、市川早苗さんの語りの心地良さに惹かれ、小学校のお話会で昔話を語るようになった。子どもたちに語っている時は、語り手は子どもの心が良く見える。目を輝かせてお話を楽しんでいる子、悲しいお話には涙を浮かべる子、怖いお話には身じろぎせず聞き入る子、言葉の意味が分からなくて途中で止まってしまいう子もいる。その子には分かりやすい言葉に変えて語った。そんな中、18年前、口承文芸学者である小澤俊夫先生が「秋田昔ばなし大学 基礎コース」を仙北市田沢湖の「思い出の潟分校」で開講するという情報が入り参加した。「昔ばなし大学」は1992年小澤俊夫元筑波大学教授が退職後開講。2024年までに全国95地域で開かれ受講者は3万人を数えた。

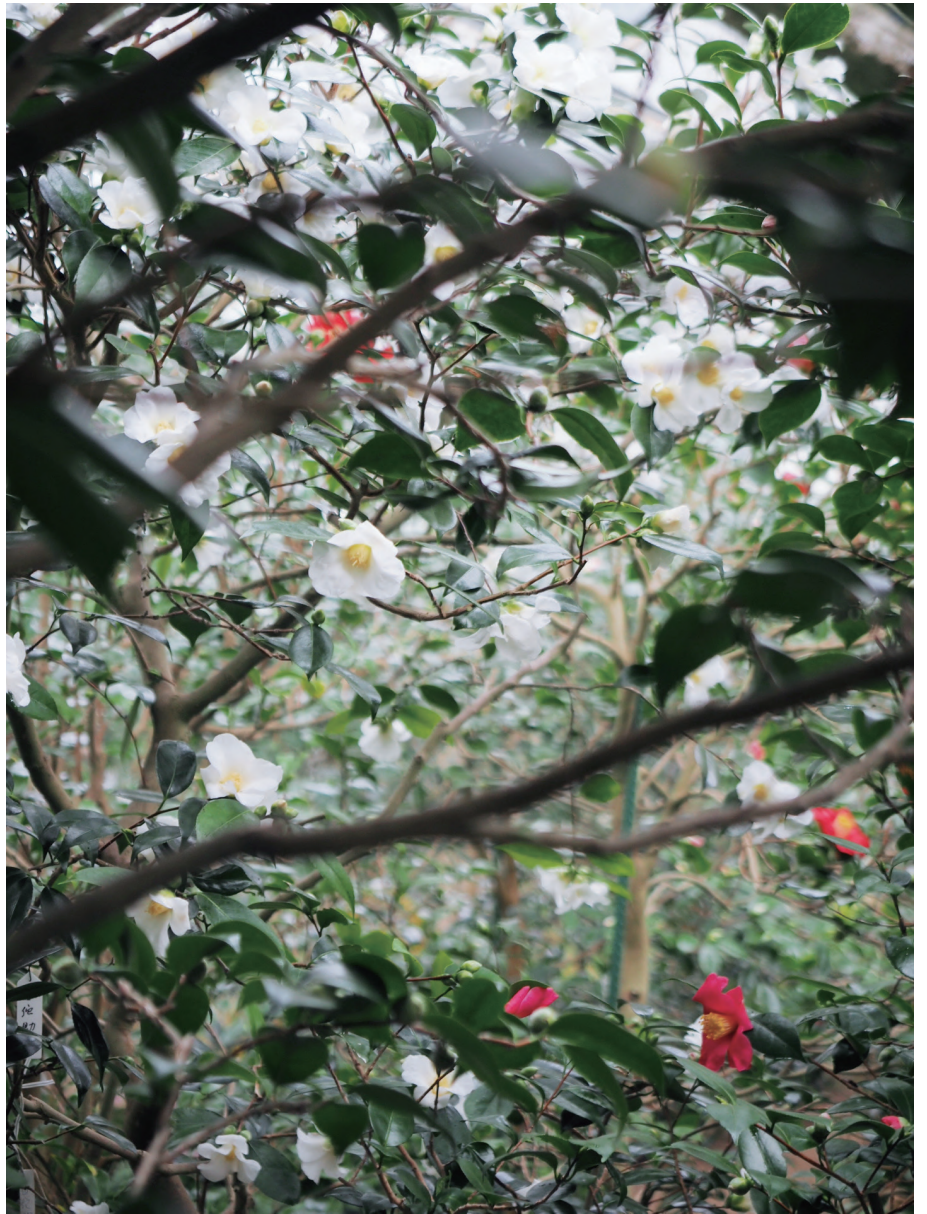
秋田では県内から100名の参加者があった。一コマ80分の授業、学生時代に

戻ったわくわく感があり会場は熱気に包まれていた。基礎コースは3年間、その後再話コース、再話コース修了者は再話研究会に進んだ。再話研究会では各グループが秋田の昔話の音声データや資料を集め、土地言葉、共通語に書き起こしていった。小澤俊夫先生からは読んで分かる文章と耳で聞いて分かる文章との違いを学び、子どもに伝わる再話の仕方をご指導していただいた。

小澤俊夫先生は誕生日の2日後、2026年4月18日に旅立たれた。96歳だった。3月22日、「日本とヨーロッパの昔話」の4回講座最終日、小澤先生は体調を壊し病室からの講義だった。私は、オンラインで講義を視聴した。講義の最後に先生は、「ぼくの人生はこれで終わりです。全国で沢山の人が僕の講義を聞いてくれて人の輪も出来たと思う。それがとても良かった。最後の講義に沢山、集まってくれてありがとう。どうか学び続けて下さい。そして子どもたちに語って下さい」。これが先生の最後の言葉になった。私には先生との出合いが宝物になっている。

私が「語り」に惹かれるのは、子どもの頃の記憶にある。亡き父が囲炉裏端や寢床で語ってくれたその心地良さに出合えるからだ。語っている父の匂い、肌の温もりに出合える喜びがあるからだ。人とのつながりが希薄になっている今だからこそ、子どもたちに対面で生の声を届ける大切さを感じている。

秋田市文化創造館5周年、25年度地域創造大賞受賞おめでとうございます。この場は、私たちにとって気軽に集い、語り合える場となっています。これからも楽しいイベントを期待しております。



椿 (2025年12月16日)

花の庭を歩きながら

話し手.. 大友俊和 (ガーデンおとも)

椿九〇〇種一〇〇〇本、桜一〇〇種二〇〇本、躑躅一〇〇種二〇〇本、紫陽花一〇〇種一〇〇〇本…もともともと、たくさん種類の花。大友さんが植えて、育て、枯らしては、また植えて、育てている秘密の花園で、お話をうかがった。

始めたのは四一年前。庭の敷地は四〇〇〇坪あります。子ども頃は畑でした。キャベツとかジャガイモとか日常のもの。母親一人でやってたからただ難儀だけしてたっていうか。その昔は果樹も植えていました、梨とか林檎とか。二代前、三代前も、半分道楽でやっていたようなものです。

椿だったら、外と温室の中に、九〇〇種類はあります。違う種類を求めて、あちこち、新潟なんか、日帰り、車で。手入れはあまりしたくないので秋田の寒さに強くて、育ってくれるものを選んでいます。秋田はぎりぎり育つからよかつたなと思っっています。花は苗から育てているんです。

母親をここで十年間介護していました。去年の二月まで。嫁いできたことで、田んぼ、畑をやっていたことで。昔はちゃんと草を刈っていたのが、途中から花も抜くようになって。でもやっぱり畑をまだやりたいうちゅうてた。

亡くなったのは一〇二歳です。いまみんな施設に入れるけど、それはできなくて、私がずっと。私は役所の現場の作業管理の勤めをしていました。

温室は二〇〇三年の一二月に建ちました。一〇〇坪の広さがあります。これがないと私の夢が終わらなかつた。温室では演歌を聞きながら。時々カラオケボックスにも行きます。「銀座のサムライ」はAKTで四回も生放送で歌った。冷や汗。「銀座のサムライ」は森雄二とサザンクロスという昔のムードコーラスグループで、そのボーカルの方がフリーになってから、いい歌だなと思っって。

花、歌、山です。山は千くらい登りました。全部頂上まで行

きました。晩飯食って金曜の夜に出発します。車を夜通し飛ばして登山口で野宿して、朝一で登る。

ところが今は一、二時間も歩けば、もう歩けない。二年前、はしごから落ちて、腕を骨折したんです。それがきつかけかがくんと体調が悪くなつて。腕なのに足も動かなくなつた。関係ないようだけど、それしか考えられない。いま七六歳だから七四の時か。けがをして以来、気力はあるけど体が付いていない。癪だなあと思つて。気力も体力も徐々に衰えていくのになつてイメージだつただけど、いきなりでした。

秋田は海岸と内陸の奥羽山脈まで距離があるでしょう。海岸の藪椿と雪深い地域の雪椿が交雑したものはユキバツバキという呼び方をしている。夢中だつた頃は、あちこち回つて歩きましたもの。秋田にもあるんです。

桜も好きというか、ここで十分、花見ができるぐらいの一〇〇種類の二〇〇本は植わっています。川岸もプライベートル桜並木ですよ。

川岸は初夏には紫陽花です。土手の奥まで植えてあります。向こうまで一六〇メートル。こんなばかりはいないよな。でもきれいですよ。紫陽花も一〇〇種類はあります。

ここは花桃の一大養成地でもある。昨年さらに調達して植えたんです。これは胡桃の木。

花と山に目覚めて、狂ってしまったんです。何でも、のめり

込む悪い癖があつて、徹底的にやらないと。咲くと別世界になる。ここでは、いろんな種類を見られるから。花が好きな人は、本当、帰りたくなくなる。

まだ、もつと、もう一回、人生があればいいような感じがするけど。私はひたすら探して歩く。

枯らしましたよ。でもやめなかつた。今度こそつてやるんです。椿や山茶花は風にてきめん弱い。だから風当たりの少ない場所に植えるんです。

田舎のよさと悪さがあつて、いろんな行事とか慣習があつて、私には馴染めないところがありました。私は個人プレーが、一人でこつこつとやるのが好き。うちは代々、神社の総代、お寺の総代を勤めてきたから、自然と役割の話が来ちゃうんです。俺は父親とか先祖代々の人のようにはできないから、それでいろいろ反発も食らつて。俺が行かなければ母親が行かなきゃいけない。そうすれば、女の出る幕でねえとか。いろんな人がいるから。

父が亡くなったとき、俺は三六だつた。最初に買ったのはライラックの木だつた。まだ一本残つてる。ライラックつて響きがよかったのかな。リラの花。

聞き手…熊谷新子×石川直樹
花の写真…石川直樹



染井吉野 (ソメイヨシノ)



●大友俊和さんのインタビュー全文はこちら
「あこがれのひと」第8回
<https://akitacc.jp/article/akogare-008-gardenootomo/>

ガーデンおとも
〒010-1503 秋田県秋田市下浜羽川家ノ腰6
営業時間：【月～日】9-17時
電話番号：090-7663-5142



雪小国 (ユキオグニ)



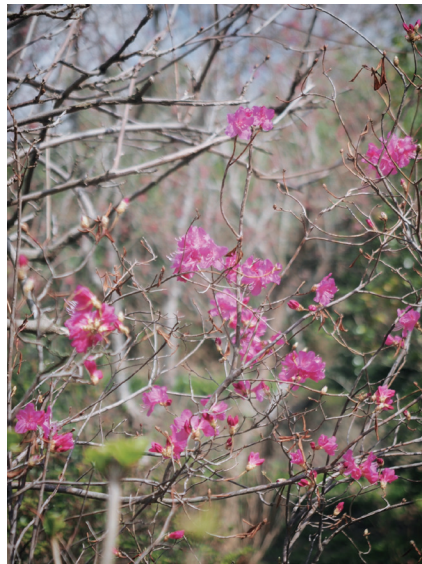
白花蒲公英 (シロバナタンポポ)



思川 (オモイガワ)



白木蓮 (ハクモクレン)



三葉躑躅 (ミツバツツジ)



黄金葉小手毬 (オウゴンコデマリ)



雪柳 (ユキヤナギ)



木通 (アケビ)



大友さんの温室

小町さん またこんにちは 最果タヒ

夢路には足もやすめず通へどもうつつにひとめ見しことはあらず

夢で会えるのだから、いくらでも

いつまでも眠り、いつまでも夢を見て

いつまでもあなたのところへ行きながら

あの日の、あなただけが

私の心臓と繋がっている

あなたの鼓動と私の鼓動が

同じなのは、あの日のあなただけ

一度きり会えたあなただけが 私と同じ鼓動で

陽の光と同じ鼓動で

月の光と同じ鼓動で

海の光と同じ鼓動で

私が美しいと思うものすべてと 同じ鼓動で

解説..

「夢の中でなら足も休めずに毎晩通えるけれど、それでも現実で一度お会いできた時ほどは素敵ではない」というような歌。

この時代は男性が女性のところに通うのであるけれど、小野小町はこの歌でまるで自分を通う側であるかのように詠んでいる。ふしぎだな、女の人なのに自分が通うのか……と最初は思うけれど、でも全体を見るとなんだか、しつくりもくるのだ。つまり、ずっと待っていて、ずっと待っていても現実では来てくれなくて、ああそれなら夢で会いましょう……という流れでの「通う」なのではないか。小野小町にとってこの恋は、「私があなたを好きなほどにはあなたは私を好きじゃないんだろうな」という気持ちとともにあるものなのだろう。そうして、それでも、彼女はその人のことが好き。当たり前だけど、たとえ男性が通ってくる時代だとしても、恋はお互いがお互いの恋心の主導権を持つのだ。その意識が当たり前にある人だから、待ちながら、夢の中では自分で通おうとする小野小町。好きなのは私なのだから、通うのも私。それを当たり前前に歌にできる人なのだろう。

うつつにはさもこそあらめ夢にさへ人目をよくと見るがわびしさ

会えない、会えない、白い花が見ているかもしれないから、湖の水面が見ているかもしれないから、雲のすきまから落ちる光が見ているかもしれない、誰かが見ているかもしれないから、会えない、会えない、ずっと私はあなたには会えない。それは、わかつているのです。心の中に透明の針を刺して覚えしました。私はあなたには会えないのです。それでも、夢の中でならその針は溶けて消え、すべての花は目を伏せて、湖は空に夢中になり、雲はそっと消え失せて、私はあなたに会えるのだと、瞼を閉じるまでは思っていた。眠るあいだも私の心を、冷たい針が、冷たい現実縫い付けて。私は現実の生き物だと教えてくれる。会えないのだと、諦めていれば、夢こそがそっと溶けて消える。

愛しているのはここにいる私。会えないのは、ここにいる私。会いたいののはここにいる私。せめて、夢だけでも言いたくはない。あなたにふれてほしいのは、ここで息をする私。

解説..

人目を気にして会えない恋の相手が、夢にも登場してくれなくて、「夢ですら人目を避けるのですね」と嘆く歌。この歌の最後の「わびしさ」とは何を指すのだろうとずっと考えていた。

小町は夢の歌がとても多い歌人だが、夢を、自らの意思で、自らの願いで、会いたい人に会う場所として描くことが多い。だから、ここで夢でも会えないという時、「人目を避けるのですね」とその相手だけを責めるような書き方もなんだか奇妙だなと感じる。むしろ彼女ならば、「夢ですら会えないのか……、いや、私の思いがその程度なのだろうか……」と感じての「わびしさ」を抱きそうだと私は思う。

小町は「夢で自分の足で通う」みたいなことまで詠む人なのだ。そこまで夢での主体性を持つならば、夢で会えないことをただ嘆くのはなんだか彼女らしくない。彼女は、夢で会えないことを嘆きながら、本当は夢で会うことがゴールじゃないと強く思っているからわびしいのではないか。夢ですら会えないけど、本当はそれが叶ったって満たされるわけじゃない。私はただただ現実で会いたいのですよ、という本当の「叶わなさ」に、夢でも会えないと嘆くことで改めて直面して、その「わびしさ」が彼女を包んだ、そんな歌のように私には見える。



秋田市立千秋美術館において「おかえりなさい！ 佐竹本三十六歌仙絵とゆかりの名品」が開催されます。

「佐竹本三十六歌仙絵」は、かつて秋田藩20万石佐竹家が所有していた、鎌倉時代の最高傑作と名高い歌仙絵です。大正6(1917)年に佐竹家を離れ、大正8(1919)年には上下2巻の絵巻が一歌仙ごとに切断されて各所へ分蔵、流転しながら今日に至ります。絵巻切断から100余年、本展では、過去最多15点を展示替えをしながらご紹介します。佐竹本の模本を同時に展示し、近世における佐竹本三十六歌仙絵の図像の伝播についても考えます。千秋美術館が所蔵する「秋田蘭画」や、大正6年の売目録に掲載されていた佐竹家ゆかりの名品たちもご紹介します。



「佐竹本三十六歌仙絵巻（模本）下巻 小野小町」（谷文晁 画、明忠 書、江戸時代後期、齋田記念館蔵）〔中期展示〕
※「佐竹本三十六歌仙絵 小野小町」（鎌倉時代、個人蔵）は〔前期展示〕

「おかえりなさい！ 佐竹本三十六歌仙絵とゆかりの名品」

会期：2026年8月1日(土)～9月23日(水・祝)

会場：秋田市立千秋美術館

前期：8月1日-16日

中期：8月18日-9月6日

後期：9月8日-23日

※3つの期間、展示替えがありますのでお見逃しのないようご注意ください



展覧会の詳細はこちら

執筆者プロフィール

黒木美佑（くろき みづ）三重県四日市市生まれ。石油化学コンビナートのそばで大きくなる。子どもの頃の思い出は町でたくさん外国語を聞いたこと。秋田市文化創造館の受付スタッフとして働きながら、言葉と言葉が出会う瞬間の面白さに魅了されている。

伊藤俊治（いとう としはる）一九五三年、秋田市生まれ。専門の美術史・写真史の枠を越え、アートとサイエンス、テクノロジーが交差する視点から多角的な評論活動を行なう。主な著書に『秋田』（亜紀書房／二〇二四）、『昭和百年への鎮魂 江成常夫のレンズがとらえた戦争』（集英社新書／二〇二五）

石川直樹（いしかわ なおき）一九七七年、東京都生まれ。写真家。人類学、民俗学などの領域に関心を持ち旅をしながら作品を発表。二〇二四年一〇月四日、世界八〇〇〇メートル峰一四座すべての登頂を果たした。著書に『秋田』（伊藤俊治氏との共著、最新刊『最後の山』（新潮社／二〇二五）八月三〇日まで茅野市美術館にて個展「ヒマラヤへの長い旅」を開催

笠井康平（かさい こうへい）作家・編集者・研究者。著書に『さみしがりな恋人たちの履歴と送信』いぬのせなか座。近作に「眠たセンターも、嫌われても、年をとっても」（港区立みなと芸術センター）、「騒がしい画面、冷たい部屋」（ユリイカ二〇二六年一月号 特集「大前栗生」）など

作家の手帖（さつかのてちょう）「もの書き」が生活に役立つ知識を持ち寄るメディア。小澤みゆきと笠井康平が二〇二一年に立ち上げた

小澤みゆき（おざわ みゆき）会社員、作家、編集者。編

著に『かわいいウルフ』、『海響一号大恋愛』など。近著に『リン・インにまたね』

後藤那月（ごとう なつき）二〇〇一年、秋田県湯沢市生まれ。秋田公立美術大学を卒業後、日々歩くことを通して日常と旅先の風景を見つめながら、ゆるやかに制作を続けている。ある場において瞬間的に出会う気配や風景と、人に深く潜在する普遍的な心象との関係性を模索している。石と古物の収集が好き

山川冬樹（やまかわ ふゆき）一九七三年、ロンドン生まれ。ホーメイ歌手、アーティスト。自らの「声」と「身体」をプラットフォームに、音楽・美術・舞台芸術の境界線を横断する脱領域的パフォーマンスを展開。多様な分野のアーティストとのコラボレーションも多く世界各地から招聘を受ける

石倉敏明（いしくら としあき）一九七四年、東京生まれ。秋田公立美術大学教授。シッキム、ダージリン、ネパール、東北日本等でのフィールド調査にもとづく比較神話学や複数種をめぐる芸術人類学の研究、作家との制作や展覧会企画を行う。新刊『共異体の人類学』（作品社）

高橋希（たかはし のぞみ）秋田市生まれ。写真家。川村悦生氏に師事し独立。二〇一三年帰郷。「ふつうの人の、ふつうの暮らし」をテーマとしたリトルプレス「YukinRo」を三谷葵と共に制作。秋田の日常を暮らすように旅する「ユカリロ」の偏愛秋田ガイド「秋田市編」が好評発売中

田附勝（たつき まさる）一九七四年、富山県生まれ。写真集『東北』（リトルモア／二〇一一）で第37回木村伊兵衛写真賞受賞。発掘当時の新聞紙に包まれた博物館などに収められた縄文土器片を撮影した写真集『KAKERA』（T&M Projects／二〇二〇）。十一月に秋田で写真展『Y-Y』と、十年ぶりの『みえないところに私をしまう』が同時開催予定

永沢碧衣（ながさわ あおい）一九九四年、秋田県生まれ。絵画作家。秋田公立美術大学アーツ&レッツ専攻卒業。主に東北の狩猟・マタギ文化に関わり、自らも狩猟免許を取得。狩猟者としての経験に基づき記録・表現した絵画作品を制作。二〇二六年十月三十一日まで個展「記憶の堆積 Accumulation of memories」を潟上市のギャラリーブルーホールで開催

菅原果歩（すがわら かほ）二〇〇〇年、秋田県生まれ。東京藝術大学大学院先端芸術表現専攻修了。鳥類への関心を起点に、鳥を軸とした環境の多層的な関係性に着目し、フィールドワークをベースとした制作を行う。主な活動に「星影のたもと、うたは渡る」（新屋NINO／二〇二三）、「アイトサイト名古屋城2024」（名古屋城内／二〇二四）

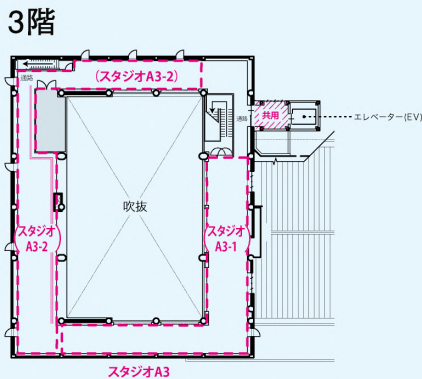
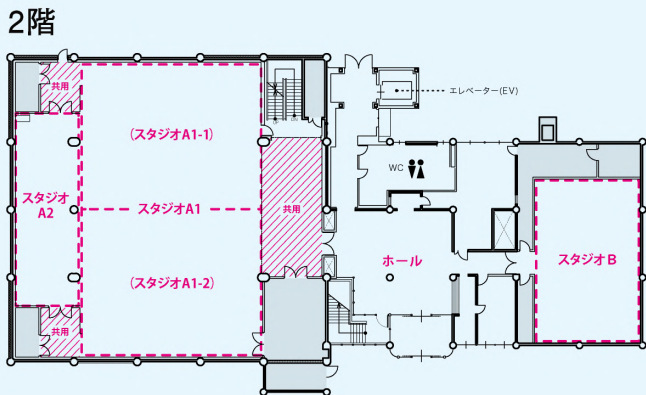
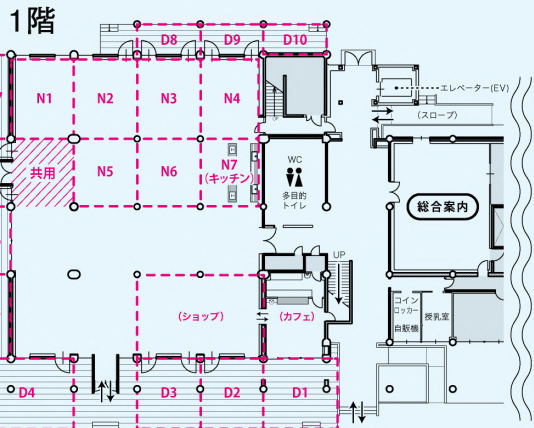
佐藤成樹（さとう なるき）一九七二年、秋田県天王町（現潟上市）生まれ。「太平山の古道」や「三吉信仰」を調査・研究するとともに「三吉さん」の御神影を中心に絵札（護符）や「鳥海山」、「社寺境内」等の刷物などの信仰関連資料を蒐集。また、鳥瞰図絵師・吉田初三郎の鳥瞰図、古地図などの郷土資料を蒐集。令和七年度に「太平山系失われた石像」で第42回秋田市文化選奨受賞（芸術部門（民俗学）

佐々木民秀（ささき たみひで）一九三六年、秋田市太平洋生まれ。長年に渡り組織登山に専念し、県内の未知なる山々を調査。韓国や台湾との国際交流登山にも貢献。現在、日本山岳会永年会員、太平洋自然公園協議会委員他。著書に『秋田県の山』等多数。二〇一六年秋田県スポーツ功労賞受賞

畠山秀雄（はたけやま ひでお）一九四四～二〇二四年。秋田市生まれ。『太平山系埋もれた石像』の著者である工藤武則氏（一九四八～二〇一三年）らと共に太平山中の石像調査にあたる。中央地区山岳協議会理事長、前太平洋山県立自然公園南部地域管理人、太平洋警備員会会員、秋田叢山研究会会員

スペース貸出について

秋田市文化創造館は、多様な文化活動との出会いを結び、人々の創造的な歩みを支える場です。
創作や練習に励む方、新しい活動を始めようとする方の第一歩を後押しします。



コミュニティスペース (N1-N7)
大きなイベントだけでなく、「1m」や「1区画」といった最小限の単位から借りることができます。個人の小さな展示、ワークショップなど、自分に合わせた自由な使い方が可能です。キッチンエリアでは、料理教室など食に関するイベントを行うこともできます。

デッキ (D1-D10)
一部区画の専用利用が可能です。

屋外エリア
マルシェ、ミニコンサート、ワークショップなどの利用が可能です。

スタジオA
展示、シンポジウム、ワークショップ、公演、上映、滞在制作など、さまざまな用途に利用できる空間です。3つのエリアにわかれ、それぞれ単独での専用利用が可能です。

スタジオB
窓がなく、展示やダンス練習、会議などさまざまな用途にご利用いただけます。

詳細はこちら



石塚稔 (いしづか みのる) 一九五五年秋田市河辺生まれ。一九七一年矢留山岳会入会を機に積雪期を主に登山活動をする。近年は太平山系の登山道整備に身を投じる。自然公園管理員・指導員。河辺山歩会前会長

齊藤藤胤 (さいとう じゅいん) 一九五四年、秋田市雄和生まれ。日本民俗経済学会理事、秋田県民俗芸能協会会長ほか。著書に『秋田の民俗つづれに』『あきた風土民俗考』『貝沢誌』など。「ちゃんとワケあり民俗学」(楽園)連載中。「あきた民俗懇話会研究例会」を一九九八年より現在まで毎月一回開催する

渡辺知 (わたなべ さとる) 一九五三年四月八日、秋田市生まれ。妻と二人暮らし。二人の娘たちはハワイ在住。ウクレレを趣味としながら、昼寝を至福の時間とする。地元新聞社の制作会社に四十年間勤務した後、秋田市農山村地域活性化センターさとびあに勤務する。地域振興を目的とする映像と冊子『上新城之物語』を制作した。日々是好日をお願い、MLB大谷さんの活躍に一喜一憂している

藤原浩一 (ふじわら ひろかず) 一九六〇年二月二日生まれ。妻と長男夫婦、孫の五人暮らし。趣味は野球観戦、旅行、家庭菜園(六十坪の土地で季節の野菜を栽培。家族が収穫を楽しむにしている)。会社を退職してから、町内会長、地域役員、秋田市民憲章推進協議会の役員をしながらボランティア活動に励んでいる

川村均 (かわむら ひとし) 一九六六年七月一日日生まれ。妻と母親の三人暮らし(愛犬ろくも同居)。休日には中途半端な趣味だが、野球(500歳野球)、ゴルフ(スコアは血圧数値の上と同レベル)、競馬鑑賞(国庫納付で社会福祉に貢献)を満喫している。三人の孫たちとの野球遊びが至福の時間

高橋浩樹 (たかはし ひろき) 一九六二年二月二八日生まれ。今年六月から妻と二人暮らし。長女、長男は他県暮らし。現役会社員で、兼業農家を営んでいる。若い頃から「矢沢永吉」が好きで、チケットが入れば家族でライブに行く。今で言う「押し」

佐田稔 (さた みのる) 一九六〇年一月一日生まれ。妻と二人暮らし。長女は秋田市内、長男は東京暮らし。趣味は、家庭菜園。害獣対策の罠捕獲。現在、上新城の人口減少で将来を心配している

工藤千咲 (くどう ちさき) 一九五五年、秋田市生まれ。「旭川親子読書会」に三十五年、「愛知辺倶楽部」に三十年、「おはなしポスト」に二十年、「秋田昔ばなし大学」に十八年所属し、子どもたちや幼児にお話しやわらべ歌を伝える活動をしている

大友俊和 (おとも としかず) 一九四九年一月六日、秋田市生まれ。秋田山下浜羽川の「ガーデンおとも」を運営する。秋田県庁に四十二年間勤める。毎日咲いている花を撮影し、投稿している。歌と山も好き

最果タビ (さいはて たひ) 詩人。詩集に『死んでしまう系のぼくらに』『夜空はいつでも最高密度の青色だ』(二〇一七年石井裕也監督により映画化)、『恋と誤解された夕焼け』(秋原朔太郎賞)など。詩文集『星がすべて』、現代語訳した『千年後の百人一首』『きょうの枕草子』、最新詩集『溶けていく氷』によってぼくらは永遠

是非お出掛けください
●八月二三日(日)まで、京都市立芸術大学ギャラリー@KC UAにて、油谷満夫氏の蒐集人生に焦点を当てた、民具と美術、アーカイブが交差する場となる展覧会「蒐集がアートになるとき」が開催中です。
●一月二日(月・祝)まで、酒田市の土門拳写真美術館にて「Double Body」細江英公と土門拳」が開催中です。細江と土門による史上初の二人展、また約三十点の土門作品が初展となります。
●一月一四日(土)に、三種町の山本ふるさと文化館にて「石井漢生誕 四〇年祭」と銘打った催しがあります。

創造館より
●カタルバー…毎週水曜に開催される対話の場です。一日店主が掲げるテーマをもとに、同じ趣味や興味を持つ人たちが集まり、ゆるやかに語り合います。
●おやさい隊…集まった人々と一緒に野菜を育てるプログラムを実施しています。プランターで野菜を育て、苗植えから栽培、収穫、試食までを楽しむ活動です。
●ソウゾウカンラボ…誰もが気軽に「つくる」活動を楽しむために、一階に工作スペースを設置しています。手芸セットやミシンも加わりました。
●チャレンジマーケット…第6回は九月二三日(水・祝)に開催します。出店の申し込み期間は締め切りでしたがぜひ遊びにお越しください。
●クリエイター・イン・レジデンス2026…今年度は、アーティストの中村邦生さん、演出家・民俗芸能アーカイバーの武田力さん、文化人類学者・プロジェクトアーキビストの津田啓仁さんを迎えます。
●創造館のどうする!? ラジオ…館と関わりのある様々なゲストと共に対話形式のラジオプログラムをSpotifyで配信します。
●リンの日…毎週水・土曜日にリングラフ印刷機を利用し、ZINEやチラシを制作できます(有料・要予約)。

